
遊戯王5D's ~ 剣纏う花 ~

大海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王5D's ～剣纏う花～

【Nコード】

N2644X

【作者名】

大海

【あらすじ】

見た目：可愛いです。綺麗です。

性格：優しいです。お人好しです。しっかり者です。そして怒ると怖いです。

その他：暗い過去があります。

とまあ、よくある設定のオリ主が活躍する遊戯王5D'sの二次小説です。それでは、楽しんで頂く事を祈って、行ってらっしゃい。

第一話 夜咲く花（前書き）

どうも。

氷結の花と一緒にこっちもやりたいと思います。

もっとも、こっちはあちらに比べて投稿は少なめになると思われます。

それでも良いよって人にはこの言葉を贈りたい。
行ってらっしゃい。

第一話 夜咲く花

視点：?????

……
「も……」

……
「い……もと……」

……
「えもと……」

……うっ
「家元」

目を擦り、眠く重たい体を持ち上げた時、私を呼ぶ声をはっきりと聞き取ることが出来ました。

「お目覚めになりましたか？」

「……すみません。うっかり眠ってしまいました」

「お気になさらず。お疲れになって当然ですよ」

移動中の車の中で、私はすっかり眠ってしまいました。

「もう少しで家に着きます」

「わざわざありがとうございます。大谷さん」

完全に目を覚ました後で、車の外を見ます。もうすっかり夜だといつのに、ビルなど街からの光が眩しく光っている。何と云うか、こんな光景を目の前によく眠れた物ですね。

ここは日本の中心都市『ネオドミノシティ』。

そして私達は今、そのネオドミノシティの最高階級区域、『トツプス』へ続く道を車で走っております。

「大谷さん、明日の予定はどうなっていますか？」

白い着物姿の、スラリと背の高い短髪の中年男性、大谷さんに尋ねました。

「はい。明日はまず、午前十時からトツプスの市民会館で日本舞踊のお稽古、十二時に茶道と華道、十五時から和菓子展示会と試食会、十七時からシティで華道協会での接待、二十時から日本武道の稽古となっております」

「分かりました。では明日もいつもと同じ、五時には起こして下さい。まだ整理出来ない書類や手紙も多くありますので」

「家元……」

私が返事をした後、大谷さんは深刻な声を出しました。

「しつこいようですが、もう少しスケジュールを緩めた方が。どう考えてもやり過ぎです」

心配してくれるのはありがたいですが、本当にしつこいですよ。

「私は多くの方々の期待に応える義務があります。何より、私を育てて下さったお父様のため、この程度で音を上げるわけにはいきませんよ」

「ええ、分かっています。ですが……」

キキーン！！

なおも大谷さんが何かを言おうとした時、車が急停車致しました。

「何事だ！？」

大谷さんが運転手さんにそう叫んだ直後、前方を見ました。私も釣られて見てみましたが……なるほど。

「さっさと出ていけよ……」

「通りたかつたら金出せ金!!」

まあ、この車が高級車であることも原因の一つでしょう。何人もの『Dホイール』に乗った、顔には『メーカー』を付けた男性の方々が、Dホイールを並べて大声で叫んでいます。

「まったく。すぐに追い払います」

そう言いながら大谷さんは出ようとしたが、

「……家元？」

大谷さんの手を取り、制止します。

「私が行きましょう」

「家元が!？」

大谷さんが何か言う前に、私は車から出ました。

「おお、着物美人!」

「いいねえ。胸は無えが紫の着物が色っぽい」

そんな言葉をかけながら近づいてきました。人数は、十人ほどでしょうか。近づいてくる間に、私は持っていた手提げからお財布を取り出しました。

「これでよければ、どうぞ持って行って下さい」

男性の一人がそれを受け取り、中身を確認しています。一応、中身はそれなりに詰まっています。

「じゃあ、貰ってください」

そう言ってくださったので、私は車へ戻るために踵を返しましたが
が……

「まあまあ、そう慌てないで」

別の男性が私の前に立ちました。

「なあ、せっかく出会えたことだし、俺達と良いことしていこうぜ
え」

ふふ。どこを触っているのやら。

「なあ、早く行こうよ」

今度はまた大胆に後ろから。やれやれ。

「お前ら!!」

大谷さんが大声を上げながら車から出て参りました。そんなに慌てずとも、ほんの戯れです。

「あ？ 何だおっさん。野郎に用は無いんだけど」

そんなことを話しながら、大谷さんの肩を掴みました。

「ああちよつと、ダメですよそんな……」

「ぐあー!!」

……言わないことはありません。

肩に触れた瞬間、大谷さんにポーンと投げられました。

一応ケガをさせないよう気を配ったようですが。

「な、この野郎!!」

他の男性方も叫びました。

「ダメですよ大谷さん」

「うお!!」

大谷さんに呼びかけながら体を軽く捻ると、私に抱きついていた男性は簡単に倒れてしまいました。

「家元も、お遊びが過ぎます」

「良いではありませんか。……それより、きちんと鍛えないといけませんよ。せつかくの良い体格が、宝の持ち腐れではないですか」

「何だと!？」

今度は乱暴に着物を掴んできました。しかしそれも、力を入れている方向に向かって体を捻ることで簡単に転んでしまいます。単純な方々だ。その後は殴る蹴るの暴力ですが、なっついていませんねえ。打撃の打ち方というものをまるで分かっていない。どれも単調な上

に遅すぎる。なので簡単に避けられるうえ、皆さん五発目には息が上がっています。

「もう許さねえ……」

今度は刃物ですか。

キンッ

「……は？」

その人は、折れた刃物を見ながら呆然としています。まあ、直前まで持っていた普通の刃物が、出した瞬間には真っ二つになればそうなりますか。

「今度は何をしますか？」

見えないようすぐ刀を隠し、一応、笑顔で話し掛けます。

「この、女……」

ああ、やはり勘違いしていらつしやる。

「あの、私は一応男子なのですが……」

「はあ!？」

そんなに驚かないで下さい。慣れてはいますが心外ですよ。

「だったらなお更容赦しねー!」

やれやれ。まだ懲りないんですね。

「家元、いい加減片付けてしまつては？」

「ダメです。そんなことをしては」

「なにゴチャゴチャ喋つてんだ!？」

大声を上げながら振り下ろされる鉄の棒。避けることは簡単なのですが……

ゴ!!

エンジン音だけが響く空間に、そんな鈍い音が響き、頭頂部に痛みが走ります。

「家元！！」

大谷さんが叫びましたが、大したことはありません。そこでじつとしていなさい。

「……これで気が済みましたか？」

米神に生暖かい感触が滴りますが、気にせず男性方に話し掛けました。皆さん、先程まであれだけ意気込んでいたというのに、頭を打った途端完全に恐れています。

「殴られても平気でいる私を恐れているのですか？ それとも、殴ってしまった自分達に恐れているのですか？」

そう尋ねても、誰も何も答えはしません。それでも、私は笑顔を作ります。

「いずれにせよ、あなた方にも、まだ人をいたわる心が残っている、ということですね」

「なに？」

男性の一人が聞き返してきました。私はハンカチで血を拭き取りながら続けます。

「あなた方がそんなふうになってしまった理由は分かりませんが、少なくとも、一瞬でも私を気遣ってくれる心がありました」

「気遣った？ 何だよそれ？」

「もしあなた方が、こういった行動でしか自分の身を守るすべを知らない人達ならば、私を殴った後も容赦はしなかったはずです。それをしなかったのは、あなた方の優しい心によるものに他なりません」

「優しいだと……」

今度は、怒りですか。

「ふざけるな！！ このマーカーを見ろよ！！ こいつがある限り、俺達は一生悪人として生きるしかねえ！！ 恵まれたお前には分からねーだろうな。街のどこを歩いてても、返ってくる目は犯罪者だ無法者だ悪だ！！ 居場所も無え！！ 助けも無え！！ そんな俺達が、どうして優しさなんか持てるってんだ！？」

「……持っていますよ」

ずっと叫んでいた男の手を取り、もう一度笑い掛けました。

「あなた方なら……いいえ、あなた方だから、持てる優しさがあるのです」

「何だよ、そりゃ……」

「あなた方は……そう、恵まれた私や、私を除く多くの人々には出来ない辛い思いをしてきた。そんな気持ちを知っているあなた方が人の痛みや、苦しみを分からないわけがありません。今はただ、その苦しみに耐えかねているというだけです。その苦しみを、誰かのために感じたいと思うことができた時、あなた方は変わることができます」

「そんなこと……俺達にできるわけが……」

「今は無理でも、きっとできます。なぜなら……」

私は握っている手を顔に当てながら、皆さんの顔を見やります。

「あなた方は今、一人ぼっちじゃないではありませんか」

そう言った時、全員が目を見開きました。そして、お互いに顔を合わせています。

「もう一度、あなた方自身でも構いません。誰かの声に耳を傾けてみて下さい。そして、その言葉を思いやつてみて下さい。そうすればきっと、あなた方は変われます。あなた方自身が、心から出会いたいと願っている人物に、あなた方自身が」

「……俺達が？」

「そうです。あなた方が会えないというのなら、あなた方自身がそうならば良いのです」

「……」

「……」

全員が、考えて下さっています。大したお話しは出来ませんが、伝わってくれたでしょうか。

「いいや。俺達はもう出会ってる」

「え？」

「……あんたに会えた」

今度は私が驚く番でした。

「私……ですか？」

「ああ。全員が俺達を嫌な目でしか見ないのに、あんたはそんな俺達を嫌うどころか、優しい言葉を掛けてくれて、まだやり直せるって気付かせてくれた。だから、俺達も変われそうだ」

彼の顔を見た後で、他の方々の顔を見ってみました。皆さん、笑って下さっている。

「約束するよ。いつになるかは分らんが、俺達も、あんたみたいに変わってみるよ」

私のように、ですか……

「私のようにはならないで下さい」

「え？」

「あなた方は、あなた方にしかねないあなた方自身になれば良いのです」

それが、一番良いのですから。

「……そうか。分かった」

笑顔を向けて下さいました。

「その……悪かった。こいつは返すぜ」

そう言っつて、先程渡した財布を返して下さいました。私も、それを無言で受け取ります。

「最後に頼みがある」

「何ですか？」

「名前を聞いてもいいか？」

ああ、そう言えば……

「申し遅れました。私の名は、『水瀬 梓』と申します」

「水瀬……水瀬梓！？」

男性の一人が、そう驚きながら声を上げました。

「家元、そろそろ行きましょう」

「そうですね。では皆さん、ごきげんよう」

最後に挨拶をした後で、皆さんは急いでDホールをどけて下さいました。そんな方々に笑顔を向け、家へと帰ります。

……

……

……

「おい、あいつがどうかしたのか？」

「バツカー！！ 知らないのか！？ 水瀬って言ったたら、日本一の名家だろうが！？ しかも水瀬梓って言ったたら、十五歳でその水瀬の頭首に選ばれた神童で、茶やら花やら料理やら琴やら三味線やら舞踊やら、大よそ和と名の付くものは全部こなしまう天才児で、今も色んなところ周って自分より倍以上年上の人間に色々教えて周ってるって話だ」

『なー！！』

「そんな人に、俺達はカツアゲしよう」と……」

『……………』

「けど良い女……………じゃなかった。良い人だったよな」

「ああ……………」

……

……

……

「家元」

「はい？」

大谷さんに呼ばれ、返事をしました。

「誰にでも広い心で接し、時にはその心を変えてしまう。そんな家

元を、私は尊敬しております」

「ありがとうございます」

「ですが、それは同時にあなたの悪い癖だ。今回はあれで済みましたが、もしものがあれば……」

「平気です。私の強さはあなたが一番知っているでしょう？」

「それだけではない。まるで自分が、辛い目になど遭ったことが無いと言うような姿勢も頂けない。少なくとも私は、あなたほど辛い目に遭ってきた人は知りません」

「……不幸というものは自慢するものではない。そして、不幸に差はありません。不幸である期間が長いか、それが大きいからです。あの人も、不幸な目に遭ったのなら必要なのは、その不幸を思いやつてくれる心と、その出会いです。私も、出会えたから変わることができた」

「……」

そう。だからこそ、私は水瀬家を支えていかなければならない。水瀬家二十一代目頭首として。そして、この私をここまで育てて下さった人のためにも。

そのためには、休む暇など無いのです。

「それともう一つ」

「何ですか？」

「……夢は、本当にもう、よろしいのですか？」

「……」

夢……

その言葉を聞くと、今でも言葉が詰まります。

「……私の夢は、水瀬家を支え、永久とわの繁栄と栄華、そして平穩を与えること。それだけです」

「……そうですか」

そんな顔をする必要はありませんよ、大谷さん。これが、本当の私なのですから。

第一話 夜咲く花（後書き）

お疲れ様です。

一つだけ言いたい。

君が読んでいるのは間違いなく遊戯王5D・Sだ。

大海自信、書いてて何度も思った。

あれ？ 俺何書いてるんだっけ？

てね。

まあ、大海にも色々やりたいことがあるんだよ。そこんところを分かっておくれ。

んじゃ、次の投稿まで待っててね。

第二話 花と剣の出会い時（前書き）

第二話）。

例によって決闘は無い。

けど、遊戯王なのは間違い無い。

まあ細かいことは気にするな。

ほな行ってらっしゃい。

第二話 花と剣の会つ時

視点：大谷

今日も家元、水瀬家二十一代目頭首『水瀬 梓』は、お仕事であるお稽古回りを行っている。稽古と言つても習うのではなく、教えるために。若干十五歳ながら大勢の人間の指導をする立場であるそのお姿は、物珍しさを通り越して感動すら覚えてしまう。それは彼の秘書として働く私だけではなく、彼から物を習っている人間全員が感じている。

無論、稽古を習う人間の大半は、彼の美しさに惹かれた者が多数ではあるものの、実際のところ、彼の手腕は大したものだ。優しい指導でありながら、要点と欠点を的確に指導し、個人個人に最も必要なことを無駄なく与えていく。実際、ほんの趣味程度でお花やお茶を習い始めた人間が、彼の指導により、一流料亭の女将や店主に匹敵するだけの礼儀作法を身につけ、琴や三味線を習った人間は、それだけで生活していける程の腕を身につけていった。そんな実績と容姿、そして絶大なカリスマから、今や彼のことを知らない人間は、少なくともトップスやシテイにはほとんどいない。

それだけの技量を身につけているのだから、本来ならばもっと大きな流派を立ち上げ、正式な弟子を取ることも可能ではある。だが、彼はそれを一切しようとしらない。あくまで自らが様々な施設を回り、『師匠』ではなく『先生』として、『道場』ではなく『教室』という形を変えずに今までやってきた。そのことで、過去にマスコミから取材を受けたことがある。その時、彼はこう答えた。

「私は弟子を取るほど偉い人間でもなければ、そもそも本来なら年齢的に見ても、大人の方々に何かを教えるという行為を行えるほど立派な人間ではない。何より、何かを学びたいという思いに差はあ

りません。しかし、私が今以上の立場に立てば、間違い無くその思いに差が生じてしまう。誰もが気軽に、楽しく学べること。それが、学ぶことには必要なことであり、教える立場の人間に課せられた義務であると、私は感じております。学ぶきっかけは誰もが興味本位です。そこから、自分の目指すものを見つければよいのですから」

寛大な心を持つ、家元らしい言葉だと感じた。

実際、家元から指導を受けている生徒達の中には、気軽な気持ちで習いにきている人間もいれば、本気で家元のような人間を目指す人間もいる。それでも家元は、特定の人間を特別扱いするような真似は一切しない。家元から教えるを請いたいという人は、あくまで教室の生徒として迎え入れている。

ゆえに誰もが同じ志を持ち、平等に成長していける。家元がずっと理想としていた、教える人間と学ぶ人間の形だ。

だが、それゆえに生徒は年々増えていっている。『ネオドミノシティ』では文化の西洋化が進み、日本中の住民が多国籍になってきているというのに、日本の心を目指す人間は本当に多い。始めの方こそ若すぎるという理由から少なかった彼の生徒も、現在では全てを合わせれば四桁を超えるかもしれない。だから日に日にスケジュールは増していく。

「大谷さんにも、苦勞をかけて申し訳ありません」

以前そう言われたが、正直私の苦勞などどうでもいい。心配なのは家元の苦勞だ。一年三六五日、ほぼ休み無くシティ中を駆け回り、教室では教え、取材があれば答え、誘いがあればほぼ全てを受けている。もしこれが私であつたら、とうの昔に間違い無く過勞死しているだろう。それほどの仕事量なのだから。

「もう一本、お願いします!!」

現在は夜の二十一時。家元のお稽古回りも、大抵はこの時間までには終わる。そしてこの時間からは、家元が唯一、教える立場から教えられる立場に変わる時間でもある。

今彼が行っているのは柔道の稽古。他にも日代わりで、剣道、合気道、弓道、柔術、剣術といった武芸に関するものだ。

茶道、華道などの他にも積極的に取り組んできた。それゆえ家内では野蛮だという声も上がったことがある。確かに今の家元は、普段の麗しい姿が嘘のように荒々しい姿を見せている。だが、これもまた家元の姿なのに代わりは無い。これだけ強さに対しても貪欲になれるというのも、彼の純粋さがあってのものなのだから。

武芸の稽古は帰ってから二時間。昔から毎日欠かさず、更にスケジュールも変わらない。これだけは家元も日課として行っていることだ。

そしてその稽古も終わり、ようやく帰宅。既に明日のスケジュールも打ち合わせ済みだ。

だがそれでもまだ終わりではない。

入浴を済ませて部屋に入ると、今度は翌日行っ教室の資料や、生徒達の名簿などの整理、その他の準備や、昼間に片づけられなかった仕事の残りなどを行う。百数人からなる生徒達の確認作業だけでもかなりの時間が掛かる。それもたった一人だけ。お陰で彼を起こしに部屋へ行った際、彼が布団の上で朝を迎える姿を見たことは数えるほどしか無い。過去に何度も手伝おうとしたが、私のことを気遣い、帰宅後の仕事は一切手伝わせなかった。

朝を迎える家元を見ながら、私はいつも感じてしまう。

彼は毎日、無理なスケジュールで働いている。しかもその間、まともに食事すら摂っていない。たまにある接待や食事会など以外で、彼がちゃんとした食事を摂ったところは私でさえ見たことが無い。

家元いわく、

「食べる時間があれば、水瀬家に費やしますよ」

だが、無論それだけが理由ではない。そもそも、彼は幼少の頃からほとんど物を口にしてこなかった。それゆえに空腹にすっかり慣れてしまい、それすらまともと感じなくなってしまうているのだ。食事も取らず、毎日街中を周る姿は、本当に凄いと感じる。だがそれ以上に、その姿はあまりにも痛々しく、哀れみの気持ちの方が強く感じる。

私は水瀬家に勤めて長くなるが、家元は、歴代の頭首の中で最も苦勞をした者の一人だと言えるだろう。そして、歴代で最も簡単に死んでしまう頭首であろうとも。なぜなら、何もせずとも放っておけば、過勞か栄養失調のどちらかで、簡単に死んでしまだろうからだ。

……

……

……

さて、この日も家元は、いつもと同じように生徒達の稽古にいそしんでいる。今行っているのは三味線教室だ。

「少し力が入り過ぎていますね。左手は指先を添える程度、右手も、手首から先だけを軽く振る程度の心構えで行って下さい」

「はい／＼／＼」

指導された女性は赤面しながら、家元に言われた通りにした。家元よりも年上の女性だ。もっとも、十五歳の家元からすれば、生徒の七割は年上なのだが。あの女性も、どう見積もっても二十台前半といったところだろう。

そんなことを考えている時、携帯電話が鳴る。

「もしもし」

「……………」

「なに!？」

「……………ふむ。先週よりだいぶよくなっていますね」

「家元」

指導を行っていた家元に話し掛ける。基本的に指導中は話し掛けないようにと言われていたが、今回はさすがに緊急事態だ。

「はい?」

返事をしたところで耳元に手を当てた。

「……………」

「……………ふむ。そうですね」

予想通りというか、話を聞いても家元に大した反応は無い。

「分かりました。では終わるまで待っていて下さい」

「よろしいのですか?」

「今は指導中です。皆さんも見ていますよ」

確かに、私有家元に話し掛けただけで、百人以上はいるであろう生徒達からの視線が一斉に突き刺さるのを感じた。されだけ彼の行動一つ一つが見聞の対象になっているということだ。

「私はこの方々の先生なのです。先生ならば、何よりも指導を優先せねばなりません」

「……………分かりました」

返事をして私は隅の方へと引っ込んだ。

……………

……………

……………

三味線教室を終えた後は、お琴教室、日本料理教室、和菓子教室と、いつも通りその日のスケジュールをこなしていく。先程のお話

を聞いたことが嘘のようだ。

そして、月が高く上った頃にその日のお仕事を全て終え、残る生徒達を送り見た後だ。

「大谷さん!!」

それまで毅然としていた態度とは一転、今にも泣き出しそうな顔で大声を上げた。

「はい!!」

その声に釣られ、私も大声で返事をした。

そして車に乗り込み、運転手に指示を出す。

「トツプス中央病院へ急いでくれ!!」

病院へ到着し、車から降りて急いで目的の場所へ走ろうとしたが、

「見て、水瀬梓さんよ!!」

「おお、本当だ!!」

「うそ、本物!?!」

病院ですらそんな声上がる。そしてまた、家元は毅然とした態度と表情を作り、走ろうとしていた足を止め、歩みを始める。そして周囲に笑顔を向けながら、いつもと同じ家元を演じている。自分の感情一つにも正直になることが出来ないとは、何と悲しい光景だろう。

結局互いに逸る気持ちを抑えながら、目的の場所へ着くのに五分の時間を要してしまった。

「お父さん!!」

病室へ着き、ドアを開けた瞬間また顔が変わり、ベッドへ走る。

今の家元は、家元であって家元ではない。水瀬梓という、どこにで

もいる一人の少年でしかなかった。

「あら梓さん。随分遅かったわね。実の父親が倒れたっていうのに」
部屋に入って真つ先に聞こえたのは、そんな冷たい声だった。

病室には既に、十人近くの間人間が揃っていたのだ。全員が水瀬家
に關係の深い人達だ。

「確か、六時間前には連絡が行っていたはずだけど、それまで何を
していたのかしら？」

「それに窓から見てましたよ。着いた後も随分のんびりしてしまし
たね。そんなに体面が大切ですか？」

「会うのは久しぶりだけど、あなたがそこまで体面を気にする人だ
つたなんて意外だわ」

口を開けば、そんな家元の心を抉る言葉ばかり。

「恐れながら……」

私は単なる秘書でしかないが、さすがにこれらの言葉には黙って
いられない。

「家元の一日のスケジュール、そしてそのお仕事での評価や期待は、
皆さんもご存知かと……」

「あなたには聞いてないでしょう。私達は梓さんに聞いているの。
単なる秘書は黙っていてちょうだい」

く……

「ねえ梓さん。彼の言ったように、あなたの仕事ぶりは知っている
わ。けどそれって、実の父親の緊急事態よりも優先することなのか
しら？」

「本当に。私達は単なる親戚だけど、みんな予定を返上してここに
集まっているのだけれど」

「まあ、そういじめてあげなくてもいいのではないかしら？ 父親
とは言っても、本当の親子でもないことですし」

「それもそうね」

部屋に広がる笑い声。そして家元は何も言えず、ただ顔をしかめ
ている。

そう。今床に伏している人こそが、先代、水瀬家二十代目頭首、そして家元はその息子になるのだが、本当の親子では無い。

前頭首は結婚もせず、女性との特別な関係さえも持たない人間だった。だが、それが五年前、どこからか捨てられていたという子供を拾ってきて、その子供を育て始めた。それが家元、水瀬梓というわけだ。

だが、水瀬家は格式高い日本有数の名家。そんな、どこから湧いて湧いたのかも分からない家元を快く思わない人間は大勢いた。かく言う私とて、始めの頃はそうだった。ずっと水瀬家にお仕えしてきたというのに、なぜこんな子供の世話を任されなければならないのかと。

だが、彼の毎日の努力を目の当たりにし、何より自分以外の誰かを重んじた態度を見て、私は最後まで、この人のお世話をさせていただくと、そう心に誓ったのだ。

しかし、それ以外の人間は、未だに家元のことを煙たく感じている。そしてそんな存在が、二十一代目頭首になったことにも家内では不満の声が多く挙がっていたのだ。本来なら、先代に子供がいなかった時点で、この部屋にいる誰かがそれになれたはずだったのだから、当然と言えば当然のことだろう。

「まあ、どちらにしろ、こんな人を頭首に添える先代も先代だけど、ここまで親に対して冷たい人だとは私達も思わなかったわ」

「まあ、いいんじゃないか？ 彼は自分を育てた父親よりも、自分が育てている生徒達の方が遥かに大切ということだろう。親のいない人間にはよくあることさ」

そんな言葉と共に、部屋には嘲笑が響く。家元がこういう言葉に言い返せない人であるのを良いことに、言いたい放題言っている。家元は先程から顔を歪ませ、無言でその一つ一つの言葉を噛み締めている。何も言い返すことが出来ず、辛い思いに駆られているのが

見てとれる。

「このことは家内でも問題にさせていただくから。私達はこれで失礼するわ。あなたを待たされていい加減疲れたから」

そして、ぞろぞろと病室を出ていく。本気で先代を心配している人間など一人もいない。単純に義務と、ストレス発散のためだけに集まってきたただけだ。ただ一人、家元を除いては。

全員が出て行った後、家元は静かに先代の前に座った。

「お父さん……」

今にも泣き出しそうな顔だが、ずっと涙を抑えている。

六時間。その間、父親が倒れたと連絡を受けながら、いつも通り仕事をこなす姿は、正直、見るに堪えなかった。普通の人間には分からなくとも、私には分かった。今ある全てを投げ出してでも、すぐにもここへ来たかったことが。

「……大谷さん」

突然話し掛けられた。

「……明日の予定を」

こんな時にまで、あなたという人は……

「家元……明日は……」

私もいつもと同じように、明日の予定を話す。明日もいつもと同じ、早朝から深夜、果ては明後日の早朝まで、仕事はびっしりつまっている。

「……とりあえず、今日は剣道でしたね。先生に連絡をして、十分謝罪をしておいて下さい」

「既に連絡しました。お大事に、とのことですよ」

そう返すと、また顔を伏せ、先代の顔を見やる。

「お父さん……私は間違っていますか？」

まだ目の覚めていない先代に向かって、そんな言葉を掛けた。

「私は、私のことを頼りにしてくれる人達を大切にしたい。あなたを頼りにするしかなかった私のことを、あなたが大切にして下さっ

たように……なのにそのために、一番大切な人の危機にさえ駆けつけることが出来ない。私は、間違っているのでしょうか……」

そう悲しい声で、なのに必死な気持ちで聞いているが、先代は答えない。答えることなど出来ない。

そして、私は何も出来ない。気のきいた言葉を掛けることさえ、出来ない。

彼はずっと努力をして、そのために苦しんできた。自分さえ投げ出してきた。それで多くの人に認められてきた。なのに、それを水瀬の人間は認めようとせず、その存在を否定することばかりを考えている。

彼が二十一代目頭首として選ばれた時、家内の多くの人間は反対した。ほとんど先代の独断によるものだった。それでもそうなる以前から多くの実績を上げてきた家元にとっては当然の評価だと言えるが、結局は赤の他人。その事実ばかりが纏わりつき、彼の躍進の邪魔ばかりしてきた。現在ののように正式に頭首になった後も、結局は今ののように、誰も認めようとはしない。実際、水瀬が先代の代に比べて遥かに、ここまで大きくなれたのは間違いなく家元が貢献したからだというのに、さも拾われた身として当然だと言わんばかりに冷たく接している。

一体彼らが水瀬のために何をしてきたというのだ。ただ家名の力を頼りに、自分達のしたいことを好き放題やってきただけではないか。

「お父さん……」

だが、それを言ってしまうえば、本当のところ、家元さえここまで頑張ってきたのは、自分のためなのだ。ただ、先代に喜んで欲しい拾って下さった恩を返したい、その思いで、ここまでやってきたのだ。そんな先代が倒れてしまった今、彼は何を思っているのか、それは想像に難くない。

「……大谷さん」

「はい？」

「今日はもうお帰り下さい。あなたもお疲れでしょう。私はここに泊まります。早朝六時頃に迎えに来て下さい」

「はあ、しかし……」

「心配せずとも、明日も予定通り、お稽古周りは行いますから」

「……」

私が心配したのはそんなことではない。だが、結局彼はこういう人だ。父親もそうだが、教え子たちのことも気にかけている。どうしてそこまで自分以外の人のことばかりを考えられるのだろう。その心には、ただただ感心するばかりだ。

「……分かりました」

私はそう返事をし、部屋を出た。これ以上は、邪魔になると思った。

さて、病院を出てすぐのことだった。

「やあ、大谷さん」

話し掛けてきたのは、先程病室内にいた内の男。

「そろそろ良い返事を聞かせて欲しいんだけど」

「またその話ですか？」

「ああ。君がオーケーを出すまで何度でも口説きに来るさ」

簡単に説明をすると、この男は私の秘書としての仕事ぶりを評価している。だから家元とは手を切り、自分の家へ来て働いて欲しい、そういうことだ。

「何度も申し上げたように、私は家元の元を離れる気はありません」
「またまたあ。家元と呼ぶけど、秘書なんて名前だけで実際は単なる子守りじゃないか。いつまでも付き合う必要無だろう」

「確かに家元はまだ子供だ。だが一日の仕事量はその辺りにいる大人を遥かに凌駕している。当然その仕事ぶりも。そのお手伝いをす

ることに、私は誇りを感じています」

「誇りか。本心は違うんじゃないの？」

相変わらず卑しく笑いながら、私の肩に手を置いてきた。

「確かに彼は優秀だよ。今でもたくさんの生徒を受け持つて、雑誌にも載つてさあ。けど、優秀とは言え子供は子供だ。君は平気なのかい？ そんな自分の倍以上年下の、おまけに水瀬ですらない、誰だか分からない子供に顎でこき使われて、本当は不満なんじゃないの？ 先代の時とは違うでしょう。おまけに彼は休み無しで働いているから必然的に君も休み無しだ。なのに彼は決してスケジュールを緩めもせず、拳句大切な先代の一大事にも遅刻。ずっと水瀬家に仕えてきた君が、何も不満を感じないはず無いだろう」

「……」

「ねえ。どうせ給料も少ないんだろう？ 彼はいくつかの教室は無償で開いているそうじゃないか。そんなんじゃない、君も満足は出来ないだろう。今の給料の倍払おう。週休だつて与える。今より楽な上に給料も増えるんだから、何も君に悪い条件は無い。あんなわがままで自分勝手な赤の他人は放つておいて、うちに来なよ」

「……」

何も言い返すことが出来ない。それは返す言葉が無いのではない。呆れて言葉を返す気にさえなれないのだ。

「……私からも言わせて頂きたいのですが」

その私の言葉に、男は表情を変えながら私の顔を見やる。

「あなたの家に行き、あなたの仕事の手伝いをさせて頂くとして、それは今の仕事以上のやりがいを感じられるのでしょうか？」

そう聞くと、男の顔から笑顔が消える。

「確かに私には休みがほとんどありません。それは家元が休みなく毎日働いているのだから当然のこと。だが、それでもやりがいはある。多くの人々が彼を敬い、評価して下さっている。それは家元の評価であると共に、それを陰で支える私の評価にも繋がっている。それだけの評価を、あなたは私にもたらずことは出来ますか？」

そんな質問にさえ、彼は答えない。

「給料も確かに高いとは言い難い。しかし、今の待遇が不安なのなら、私はとうに彼のもとを去っている。今も去らない理由は一つ。彼の存在が、それだけの価値を見いだしているからだ。そして、あなたにはそれだけの価値があるのですか？」

やはり答えない。だが、代わりに口元を吊り上げた。

「まあ、君がどんな仕事にやりがいを感じるのかは知らないが、給料よりもやりがいだっというのならこちらも考えよう。今日はもう遅いし、帰らせていただくよ」

こちらの質問には一切答えず、去ってしまった。

まったく。どうしてこうも、家元自身を見ようとしなない人間ばかりなのだ。そして、かつて彼らと同じであった自分を思い出すと、今すぐ自殺したくなるほど情けない気持ちになってしまう。

視点：梓

ここに来てどれくらい経ちましたでしょうか。眠ることさえ出来ず、私は父の顔を眺めるばかり。よくテレビドラマなどでは、こういうシーンでは病人に声を掛けたりするものですが、私には、掛ける言葉さえ見つけられない。

掛けようと思う言葉を探してみても、やれ毛利さんのお琴の腕が上達したあの、やれザビーさんから感謝の手紙や野菜を頂いたあの父には縁もゆかりも無い方々のお話ばかり。毎日が仕事続きで、父との交流もすっかり減ってしまっていた。彼は私の仕事にはほとんど口を出さなかったから、話す時間というものもほとんど無かった。どうして、もっと父と一緒にいられなかったのか。先程皆さんに言われた言葉が私の中で反芻はんそうされる。私がどれほど父のことを思っているか、所詮は赤の他人ということか。私には、父を思いやる資格など、始めから無かったのかもしれないね。

「……うう」

「！！今の声は!?!」

「……うう……あ、ずさ……」

お父さん!?!

「目を覚ましましたか!?!」

反射的に顔を近づけ、声を掛けます。

「……ああ、すまない。心配掛けたな……」

どうやら意識もはつきりしたらしく、私の顔を見ながら、笑顔を浮かべて下さいました。

「謝らないで下さい。私こそ、あなたに謝らなければならないのですから」

「ん?」

当然、事情を知らないために疑問を感じています。

「私はあなたが倒れたと聞いた後も、あなたではなく、仕事を優先してしまった。お世話になったお父さんの命以上に、目の前の生徒達を優先してしまった。あなたの息子として、恥ずべき行為です……」

仮にそれで生徒達の腕が上達し、感謝をされたとしても、お父さんの容体が良くなるわけではない。それに、今回はむしろこれで済んだが、もしそれ以上の事態が起きてしまえば、私はお父さんの死に目に会うことさえ出来ない。

昔から、ずっとお父さんに喜んで欲しくて頑張ってきた。なのに、その行動の一つ一つが、お父さんを苦しめてしまっている。

私は、日本一の親不孝者だ。

「なあ梓?」

お父さんが話し掛けて参りました。いつも見せる、陽気な笑顔を浮かべています。

「はい?」

「俺が着てた服あるか？」

そう聞かれたので、部屋を見渡します。すると、籠の中にいつもお父さんの着る、赤と黒の羽織袴が。

「それ、取ってくれ」

そう言いながら体を起こしました。私も言われた通りにします。

「なあ梓。今日が何の日か覚えてるか？」

袴をまさぐりながら、そう尋ねてきました。忘れるはずがありません。

「私が、水瀬家へ来た日。今日で、ちょうど六年目になります」

「そうだ。お前が水瀬家に来て、水瀬梓に変わった日、言わば水瀬梓の十六歳の誕生日だ」

誕生日……

捨てられていた身である私にはそんなものは存在しない。しかし、確かに水瀬梓という人間が誕生したのはこの日だ。それまでは、名前も、年齢すら無かったのだから。

「だからな、今日はお前に誕生日プレゼントがあるぞ」

プレゼントですか。それは嬉しいですね。何でしょうか。

そんな冷めた気持ちでそれを見た時、また疑問を感じました。

「それは？」

それは、見たことがあるような、しかし、何であったか思い出せない、紫色の小さな箱。振ってみると、カタカタと音がします。随分軽いようですが。

「まあ受け取れ。中身を見てみる」

そう言われ、慣れないながらも開いてみましたが、そこには……

「こ、これは!？」

茶色の紙に、黄色の無数の線による模様が刻まれた、いくつものカード。そして、世界一有名なカード。

「『決闘モンスターズ』!!」

驚いている私に、父は平気で話し掛けてきました。

「お前が俺に拾われる時、俺に言った言葉、覚えてるか？」

「あ……」
思い出しました。

そう。それはちょうど六年前、私が初めて父と出会った日……

……

……

……

父との出会いは、いわゆる人身売買のトラックだった。

生まれつき親はおらず、帰る家も無く、ただその日その日を命がけで、自分以外に頼れるものも無い。そんな中で必死に生きてきた。だが、生まれつき美しい容姿をしていたことで、誘拐犯達からは絶好の標的とされてしまった。抵抗など出来る力など無く、簡単に捕まり、そのまま売りに出された。

そして、そんなトラックの中にいた私を、父は見つけて下さった。「坊や。うちに来い」

それが、父に初めて掛けて頂いた言葉だった。

どの道、商品として金で買われる身として、私に選択肢など無かった。だというのに、そんなことを知らなかった私は、父に言った。「……二つ、お願いがある」

商品としてはあるまじき行為。普通ならそれだけで買われなくなるか、最悪生意気だと暴力を浴びていただろう。

だが父は笑って、何が望みかを聞いてくれた。そして、私は答え

た。

「強くなりたい……」

「強く？」

「今までずっと……たくさんの人にいいようにされてばかりだった……だから、二度とそうならないように……何かされてもやり返せるように……強くなりたい……」

「ほお。顔の割りに言うことは男の子だな。よし分かった。強くし

「てやるっ」

「……………ほんと？」

「ああ。それで、二つ目は？」

「二つ目は……………」

……………

……………

……………

「決闘がしたい……………」

「ああ。だがお前はそう言った後、それを許してくれるだけの人間になれたらって言った」

「私には許されない……………」

「そんなことねーよ」

父はそう言いながら、私の両手にカードを持たせます。

「お前は十分頑張ってきた。水瀬の名前をここまで大きくしてくれた。だからな、これからは、もう少し自分の好きなことをしたっていいんだ」

「しかし、親戚の方々は……………」

「あいつらのことなんか気にするな。無理してお前のごと認めようとしなだけだよ」

「……………」

また目線を落とします。私に許されるのか？ 決闘は私がこの家に来る以前から、誘拐される以前からずっとやりたいと願っていた。ですが、生活が、境遇が、環境が、そして使命が、いくつも重なりそれを許さないと言い、同時に私の中からもその思いは消え失せていた。

だと言つのに、カードを手に感じたのは、皮肉にも、好機と興奮。長年待ち望んでいた恋人に、やっと再会できた時はこんな気持ちなのでしょう。

しかもこれらは、私がずっと使いたいと思っていたカード群。それがなお更、私の中の興奮を駆り立てる。このデッキを手に、決闘をし、目の前の相手を倒す。そんな自分を浮かべてしまう。私が憧れた、あるプロ決闘者のように。

……だが……

「……申し訳ありませんが、これを受け取るわけにはいきません」
カードを机の上に置きます。

父の心はとても嬉しい。念願の決闘を許されたことも嬉しい。幼い頃から求めていた物を手に入れたことが嬉しい。嬉しいのに、私はそれをはねのけるしかない。

「好きなことは十分してきました。あなたは私の学びたい物、全てを文句無く学ばせて下さった。この上決闘まで学ぶ必要はありません。何より、私には今、大勢の生徒の指導があります。皆さんが私を待っていてくれるのです。そんな皆さんを差し置いて、決闘を行うことなど、出来ません」

「……」

そんな顔をしないで下さい。私は欲を持つてはならない人間なのです。ずっと、誰かに支えられることで生きてこられた人間です。そしてあなたは、強くなりたいたいという願いを叶えて下さった。それだけで十分です。

「じゃあ、こう言っ」

お父さんは急に満面の笑みを見せ、その言葉を掛けてきました。

「はい？」

「俺のために、梓の決闘をするところを見せてくれ」

……は！？

「言っている意味が……」

「梓よお、俺がただお前を喜ばせるためだけにこいつを用意したんだと思っただのか？」

聞かれても、普通贈り物というのはそういうものでは……

「お前があの時決闘をしたって言った時、俺だっけって見たって思っただけ。立派に成長したお前が、決闘者になって決闘するところをさ」

「いえ、しかし……」

「なあ、頼むよ。俺からの、親父からの最後の願いをさ」

「ちよつと、抱き付いてこないで……」

え？

「最後？」

それは……

「どういう意味ですか？」

「何だ。ここに来たなら医者から聞いたと思ったのに？」

聞いたって、何を？

「俺、もって今年中だつてよ」

……

……え？

「……はは、お父さんもお人が悪い。そんな冗談を言ってまで、私に決闘をさせたいのですか？」

「冗談じゃないよ」

「……またまた。お父さんは嘘が上手ですから」

「いや、本当だつて」

「とにかく私は、決闘は出来ませんよ」

「梓」

「明日も仕事がありますし、今日は、これで……」

「梓……」

……

……

五年、いえ、今日でちょうど六年でした。その間に、数えるほど

しか聞いたことの無い、優しいお父さんの怒鳴り声。

「本当だ」

さっきまで浮かべていた陽気な笑顔が一変、真剣な目付き。

「……嘘だ……」

そんな筈が無い。だって……

「ずっと、元気だったではありませんか……毎日、帰った後も笑いかけてくれて、今日家を出る直前も、気軽に話して下さったではありませんか……なのに……余命が来年まで？ そんなこと……」

「あるんだなこれが」

また真剣な顔が一変、陽気な顔に。

「お前にはずっと黙ってたんだけどな。不治の病ってやつ？」

「……いつから？」

「去年！」

去年……

「このこと、私以外は……」

「みーんな知ってるけど」

ということは……

「このことを知らなかったのは……」

「梓だけ」

私だけ……？ 私だけが、お父さんの、病のことを……私だけが

……

ガタンッ

体の力が抜ける。全員が知っていることを、私だけが知らなかった？

私だけが……息子である、私だけが……

「驚いた？」

気が付くと、床に尻餅を着いた私と同じ目線で、お父さんがベッ

ドから出て話し掛けていた。

「なぜ……」

「そうなるから」

私が全てを言い切る前に、お父さんは遮ってきました。

「お前の考えてること、当ててあげよっか？」

私の考え……？

「なぜ私には教えてくれなかったんだ？ 私はお父さんの息子なのに。それともそれほどまでに私には信用が無かったのか？ 所詮は拾われた子供で、赤の他人だから、そんなことを教える義理も無いということなのか？ 私は、結局息子とは思われていなかったというのか？」

「……」

……その通りです。一語一句、私の感じたことそのままです。モノマネはあまり似ていませんが。

「じゃあ聞くけどさ、ここまでお前のことが分かる俺が、お前のと嫌いだと思うか？」

……

……相変わらず、

「いじわるなことをする……」

笑みを浮かべながらそう言つと、お父さんもまた、笑顔を見せる。本当に、子供のような笑顔だ。

こんな人が、私が来る前には私のしていたこと全てを行い、そして水瀬家の全てをまとめていたという事実が、未だに信じられませぬ。

「そういうことだ。ありていにはありきたりなこと言うけど、お前に心配させるわけにはいかんだろう」

確かに、ありきたりな答えではありますね。ただ、それでも……「秘密は酷いと思います」

ですが、直前まで感じていた怒りや悲しみも、直前ほどのものは無くなりました。

「本当はさ、俺も、お前が自分から言ってくれるの待ってたんだ。決闘をさせてくれたさ」

私から？

「まあ、お前の性格考えれば、そんなこと言い出せないだろうってのは分かってたけどな。それでも、お前には、お前自身の夢に正直になってほしかった。だってよう、お前は何かって言えば、頑張りたい。俺に喜んで欲しい。みんなに喜んで欲しい。水瀬として認めて欲しい。みんな笑って欲しい」

「それが私の欲ですから」

「ああ。けどさ、この中に一つでも、お前自身が喜ぶためにやったものがあるか？」

「……皆さんの喜びが、私の喜びになりますから」

「……寂しいねえ」

その言葉に、私は疑問を感じました。

「寂しい？」

「ああ。寂しい」

「……そうですね。今までずっと、一緒にはいられませんでしたが」

「じゃなくてさー！」

ずいっと顔を近づけてきました。ちょ、怖いです。

「その、あゝ、あれだ。お前だってさ、もう少し俺に甘えてくれたっていいじゃんよ」

甘える……甘える？ 私が、甘える？

「そりゃあさ、お前はずっと誰かに甘えることなんて出来ない生き方してたもんな。誰かは知らんが実の親に捨てられて、それからはずっと一人で生きてきて、拳銃誘拐されて人身売買。俺に拾われたら拾われたで、今度はそれまで出来なかったこと全部を習って、おまけに俺や大谷以外にはひどい扱いを受けてさ。それでも弱音一つ吐かずに、今みたいになるまで毎日休み無く頑張った。今だって、毎日休み無く働いてる。自分のためってのもあるんだろうけど、実

際は全部、俺やみんなのためだ」

……その通りです。

茶道、華道、それ以外にも多くの事柄、毎日必死で学んだ。人並みでは意味が無い。人より出来なければ意味が無い。それが、水瀬家の子供になるということだった。だからこそ、毎日厳しい練習を行った。はつきり言って、辛かった。今まで触ったことも無いような物に触れ、それを自分の物にしながら、かつ人以上の技量を身につける。生半可な努力では出来るはずが無い。

それでも、いえ、だからこそ頑張った。挫けはしなかった。私は今、お父さんのお陰でここにいる。お父さんに助けられ、息子として下さったからここにいます。だから、どれだけ親戚の人達から罵倒され、時には虐待されようと耐えられた。お父さんが見てくれていたから。成長する私を。

だから、お父さんに恩義を返したくて、そのために今まで頑張ってきた。私が頑張った結果で、お父さんが喜んで下さることが私にとっての生き甲斐だったから。そして、逆に私が教える立場に立ったことで、教えられる方々の喜びを知ってしまったから。

「そりゃあさ、嬉しかったぜ。お前が六年間、毎日毎日、頑張って頑張って、水瀬の新しい頭首になるほどの男に成長した。あの時のポロポロだったちびっ子が、今じゃこんなに立派に成長した。俺や大谷以外の、たくさんの人達に好かれる人間に成長した。父親として、嬉しいに決まってる」

お父さん……

「だからさ、今度はさ、俺にお前を喜ばさせてくれよ」

「お父さんが、私を？」

「ああ」

「しかし、私はもう十分……」

「俺が喜ばせたいのは水瀬梓じゃない。俺の息子の、梓をだ」

「あなたの息子の……」

梓を……

「父親が息子の喜ぶ姿を見たいって思うのは、間違ってるか？」

……

……私には、ずっと親はいなかった。

だから、今あるものだけが全てだった。

そして、お父さんだけが全てだった。

「甘えては……弱音を吐いては……欲を持つては……自分のことを優先しては、決してならないと……」

「そんなことで、お前のこと慕ってくれてる奴らは、お前を嫌いになると思ったのか？ 俺がお前を嫌いになると思ったか？」

「……」

「もう一度頼む。俺の最後の我がままだ。俺のプレゼントしたカードを使って、お前が決闘する姿を見せてくれ」

「……」

……

気が付けば、私の顔は濡れていた。目からは生涯流さぬと心掛けていたものが、絶対に流してはならないと言い聞かせていたものが、止め処なく溢れてくる。

「私の夢……ここに来る以前から、ずっと憧れて……それでも諦めた、私の夢……」

「叶えてくれよ。父親として、息子の夢の応援くらいさせてくれよ」
そう話し掛けながら、お父さんは、机の上のデッキケースを取り、私に手渡しました。

私の夢……決闘がしたいという、私の夢……

ケースを見ていると、お父さんは私の頭を持ち、そのまま胸に当ててくれた。

拾われた日を最後に、ずっと身を委ねることを拒否した、お父さ

んの胸。あの頃よりも小さい……なのに、あの頃と同じ……暖かい

……

その心地よい暖かさに、私はいつまでも甘えていた。

それは、ずっと否定し続けてきた、なのにずっとしたいと感じていた行為。

息子として、父に甘えたい。

ずっと、するなと自分に言い聞かせていた行為。そして、叶えてはならないと言いつづけていた夢。それが一度にでき、そして叶った時。

嬉しさ、懐かしさ、安心、陶醉、そして感動、それらの感情があまりに大きくて、私に、涙を隠すという選択肢を与えなかった。そして私は、声を殺しながら、ずっとお父さんの胸で泣いていた。

……

……

……

視点：大谷

家元のお言葉通り、六時十分前ほどに病院に着いた。そして、病院を見てすぐ家元は姿を現した。

だが、それは昨夜見せていた顔が嘘のように、晴れやかな顔だった。世間の体面があるとはいえ、それにしても清々しい顔をしている。長年彼のそばにいる私にはそれが分かる。

そして家元は黙って車に乗り込んだ。

「出して下さい」

声も、いつもよりもやけに明るいきがした。

「大谷さん」

「はい」

呼ばれたのでいつも通り返事をする。

「明日から、私の習い事を一つ増やします」

「はあ……今度は何を？」

「決闘モンスターズを」

……一瞬、言葉を理解するのが遅れた。

「は？」

「決闘モンスターズです」

「……では、家元……」

「ええ。私は夢を叶えます。決闘者になるという夢を」

その言葉は、私に衝撃を、そして、喜びと胸の高鳴りを覚えさせた。そして、自然と頬が緩むのを感じた。

「家元」

先代以外に、私にだけ話して下さった、家元が水瀬家へ来る以前から抱いていた夢。ずっと、諦めていると自分に言い聞かせていたという夢。初めて聞いた、家元が水瀬のためではない、自分自身のためだけに抱いた夢。

それを叶えようとする姿。それが今、目の前にある。

それは、ずっと彼の秘書として働いてきた中で見てきたどんな姿よりも、輝いている姿に思えた。

第二話 花と剣の出会い時（後書き）

お疲れ様です。

何度でも言うけど、これは遊戯王5D・sだからね。

俺自身本気で何書いてんのか分かんなくなってきたけど遊戯王5D

・sだからね。

決闘は次回書くから、それまで待ってたなら我慢して。謝るから。

ほな次話まで待ってて。

第三話 開花の時（前書き）

三話目や〜。

やっと決闘や〜。

何はともあれ読め。

行ってらっしゃい。

第三話 開花の時

視点：大谷

家元が先代からデツキを受け取ってから、今日で一ヶ月。

あの後家元は、毎晩行っていた武道の稽古の一切を辞め、ほぼ毎晩決闘の訓練に打ち込むようになった。既にどれも免許皆伝に足るだけの実力を身に付けていたため、師匠^{せんせい}方も家元の稽古の中止には誰一人嫌な顔を見せなかった。それでも、稽古を辞めると言う時、深刻な顔でかなり言い辛そうにしていた所が家元らしいが。

もつとも、さすがにずっとせずつとせずつとすれば技術も体力も衰える。そう言いながら、週に一度は自主的に訓練を行っているのだが。

そして今日は、一ヶ月で磨いた腕を試すために、初めての大会に出ることになった。もつとも体面もあるため、仕事を全て終わらせた後で、深夜に行われる非公式の地下決闘、なのだが。

「来る前にも言いましたが、何もあなたまで来なくてもよろしかったのですよ」

「いいえ。私はどこまでも、家元に付いて行きます」
そう言うと、家元は笑って下さった。

ちなみに私も家元も、当然のことだが変装している。お互いに着物では無く、周囲の人間が普通に着るような服を身に付け、顔はサングラス、家元は帽子も被っている。

そして、地下決闘が行われるこの場所。何やら既に異様な雰囲気^{きふく}が漂っている。大会参加者も、見に集まっている客も、全員が異様な雰囲気だ。

だがそれも当然だろう。

先に調べておいて分かったことだが、ここではほぼ毎晩のように、半数は道楽で、半数は商売で人が集まる。決闘での賭博が行われる

ためだ。参加する決闘者はその大半が公式決闘の大会を永久追放された者や、他に行き場所の無い者達という荒くれ者達。中には家元のように純粹に決闘を行うために来る者達もいるのだが、それもごく少数だ。

フッ

と、そんなことを思っている時、会場の灯りが消える。

パッ

スポットライトが点いた。そこは決闘場、そして、その上にいる司会者を照らしている。

「レディース、エ〜ンド、ジェントルメン。今夜も集まってくれてありがとう……」

そういった感じで司会が進行される。とは言え、司会と呼べるほど長い話しはしない。すぐに話は終わり、一組目の対戦者が決闘場に立った。

「こいつを召喚する！」

「ダイレクトアタックだ！」

「お前に500ポイントのダメージ！」

「く、俺の負けだ……」

「ほらもつと気合い入れろー！！」

「俺はお前に賭けてるんだぞー！！」

「おら逆転しやがれ！！ お前が負けたら大損だろっが！！」

「引つ込め負け犬ー！！」

「恐ろしい場所ですね」

「ですが、それも御承知のうえでここにいるのでしょうか？」
そう呟くと、家元は微笑を浮かべた。

「なあ、坊や……」

すると、直前の決闘で負けた男が近寄ってきた。

「悪いんだが、ガードを恵んじゃくれないかな」

うむ。こんな場所ならば当然と言っべきか、ベタな展開と言っべきか。

「あいにく、デッキ組しか持ち合わせがありません」

「構わないから、カードくれよ。何ならデッキ丸ごと出せや」

そして、服越しにナイフをあてがってきた、のだが……

「一体何で脅しているのでしょうか？」

家元がそう尋ねると、男はナイフを見た。

「……え？」

まあ驚くのも無理は無い。直前まで、それも服の内側に持っていたナイフが折れているのではな。

「私の出番も近い。すみませんが、ここはお引き取りを……」

呟きながら男の手を取り、それを手渡した。そしてそれを見て、

男は震えながら退散した。

言わずとも分かるとは思うが、家元が渡した物は、男の持っていた折れたナイフの刃先だ。

「刀を出すまでもありませんね」

「まあ、あなたが強過ぎることもあります」

「それを、決闘でも言えれば良いのですが」

家元がそう言い、不安げな顔を浮かべた直後だ。

「次の挑戦者は、おなじみ元プロ決闘者、氷室仁!!!」

「そしてその相手は、今回がデビュー戦！ リングネーム『サイレントフラワー』!!!」

「……先程も言いましたが、他に良い名前は無かったのでしょうか

「？」

「すみません。適當過ぎたと反省しております……」
そう会話して、家元は決闘場へ歩いていった。

視点：梓

私の前に立つのは、青色にトゲトゲな頭をした、体格の良い男。
名前は聞いたことがあります。元プロライディング決闘者。確か、
最後はキングに敗れ、その後は行方知れずだと聞きましたが、ここ
にいたのですね。

「初陣か。だからと言って手加減はしないがな」

「もちろん。それでこそ、ここに立つ意味があります」

「良い覚悟だ。早速始めよう」

お互いに挨拶を簡単に済ませ、ディスクを展開させます。

『決闘！』

氷室

LP：4000

手札：5枚

場：無し

梓

LP：4000

手札：5枚

場：無し

「俺の先行だ。ドロー！」

氷室

手札：5 6

「『地雷蜘蛛』召喚」

『地雷蜘蛛』

攻撃力2200

「カードを伏せる。これでターンエンドだ」

氷室

LP：4000

手札：4枚

場：モンスター

『地雷蜘蛛』 攻撃力2200

魔法・罨

セット 1枚

彼の決闘も見たことがあります。デッキは同じ、『蜘蛛』デッキですね。

「さあ、お前のターンだ」

「ええ。私のターン！」

梓

手札：5 6

……どうやら、この一ヶ月の訓練は無駄ではなかったようです。
「速攻魔法『サイクロン』！ そのセットカードを破壊します！」
「ぐう……」

破壊されたのは、『聖なるバリア・ミラーフォース』。

デツキは、応えてくれました！

「私は三枚の永続魔法を発動！ 『六武の門』！ 『六武衆の結束』

！ 『紫炎の道場』！」

「『六武衆』デツキか……」

「六武衆を召喚、特殊召喚した時、それぞれ門に二つ、結束と道場に一つの武士道カウンターが置かれます。私は手札より、『真六武衆・カゲキ』を召喚」

『真六武衆・カゲキ』

攻撃力200

『六武の門』

武士道カウンター：0 2

『六武衆の結束』

武士道カウンター：0 1

『紫炎の道場』

武士道カウンター：0 1

「カゲキの効果。このカードの召喚に成功した時、手札のレベル4以下の六武衆一体を特殊召喚できます。『真六武衆・シナイ』を特殊召喚」

『真六武衆・シナイ』

攻撃力1500

『六武の門』

武士道カウンター：2 4

『六武衆の結束』

武士道カウンター：1 2

『紫炎の道場』

武士道カウンター：1 2

「カゲキは場にカゲキ以外の六武衆がいる時、攻撃力を1500ポイントアップさせます」

『真六武衆 - カゲキ』

攻撃力200 + 1500

「これで結末に乗った武士道カウンターは二つ。結末を墓地に送り、カードを二枚ドロウ」

梓

手札：1 3

「『六武の門』の効果発動。武士道カウンターを四つ取り除き、六武衆を一枚手札に加えます。私は『真六武衆 - ミズホ』を手札に」

『六武の門』

武士道カウンター：4 0

梓

手札：3 4

「このカードは場にシナイがいる時、手札から特殊召喚可能。『真六武衆 - ミズホ』を特殊召喚」

『真六武衆 - ミズホ』
攻撃力1600

『六武の門』
武士道カウンター：0 2
『紫炎の道場』
武士道カウンター：2 3

「くっ、何て展開力だ……」

「まだまだいきます。このカードは場に六武衆がいる時、手札から特殊召喚可能。『真六武衆 - キザン』を特殊召喚」

『真六武衆 - キザン』
攻撃力1800

『六武の門』
武士道カウンター：2 4
『紫炎の道場』
武士道カウンター：3 4

「ミズホの効果！ 一ターンに一度、フィールド上の六武衆をリリースすることで、相手フィールド上のカードを一枚破壊できる。私はキザンをリリースし、あなたの場の『地雷蜘蛛』を破壊」

キザンが光となった瞬間、ミズホが瞬きもせぬ間に『地雷蜘蛛』に向かい、そのまま斬り裂きました。

「あ、ああ……」

「そして、『紫炎の道場』の効果。このカードを墓地に送ることで、このカードの上に乗った武士道カウンターの数以下のレベルを持つ六武衆、または紫炎と名の付いたモンスターを特殊召喚できる。武士道カウンターは四つ。レベル4の『真六武衆 - エニシ』を特殊召喚」

喚
」

『真六武衆 - エニシ』

攻撃力1700

『六武の門』

武士道カウンター：4 6

「エニシは場にエニシ以外の六武衆がいる時、攻撃力を500ポイントアップさせる！」

『真六武衆 - エニシ』

攻撃力1700+500

「『六武の門』の効果、武士道カウンターを四つ取り除き、墓地の『真六武衆 - キザン』を手札に加えます。そして特殊召喚。キザンは場にキザン以外の六武衆がいる時、攻撃力を300ポイントアップさせます」

『真六武衆 - キザン』

攻撃力1800+300

『六武の門』

武士道カウンター：6 2 4

「門の効果、残り四つの武士道カウンターを取り除き、武士道カウンター二つにつきキザンの攻撃力を500ポイントアップさせます。最後に永続魔法『連合軍』を発動」

『真六武衆 - キザン』

攻撃力 1800 + 300 + 1000 + 1000

『真六武衆 - エニシ』

攻撃力 1700 + 500 + 1000

『真六武衆 - カゲキ』

攻撃力 200 + 1500 + 1000

『真六武衆 - ミズホ』

攻撃力 1600 + 1000

『真六武衆 - シナイ』

攻撃力 1500 + 1000

「こ……こんな、ことが……」

「バトルフェイズ」

「な!!」

私が言った直後、五人は構えました。

「五色の剣よ、敵を討ち取れ!!」

そう叫んだ瞬間、五人が一斉に氷室仁に向かっていく。

「ぐうああああああああああ!!」

氷室

LP: 40000

「私の罪に光を……」

最後にそう呟き、残り一枚の手札をデッキに納めました。それはまるで、刀を鞘に納める感覚に似ていた。

視点：大谷

「氷室が負けた……」

「あの氷室が……」

「氷室はここじゃ無敗だぞ……」

「それを、しかもたった一ターンで……」

『うおおおおおおおおおおおー!!』

家元の勝利と同時に、大歓声が上がった。
が……

「セキュリティだ!!」

「全員動くな!!」

同時にそんな声も。これは少しまずい。

家元はすぐに決闘場から降り、近づいてきた。

「急いで逃げましょう」

「はい」

それだけ会話し、セキュリティの間を割りながら逃げる。

「待て!!」

「逃がすかー!!」

……

……

……

「……」

「はあ、はあ……」

私は息が上がっているというのに、さすが家元は息切れ一つして
いない。お互い既にサングラスは外している。

「……………」

先程からばおーっとしている。どうかしたのか？

「…………… 大谷さん」

「はい？」

決闘前までは普段通りだったというのに、今は声が震えている。興奮しているのか？

「私は……………」

同時に体も震えている。

「私は……………」

こちらを向く。その顔はやはり、興奮に震え、笑顔を浮かばせている。

「家元……………」

「私は…………… 決闘が楽しい！！ 勝てて、嬉しい！！！」

ほとんど叫ぶように言っているその顔は、まるで子供のように輝いている。

家元のこんな顔を見たのはいつ以来だったか。

「それは良かったですね」

「はい！！！」

うむ。どうやら、決意を新たにしたようだ。

「私はきつと、なってみせます。お父さんも喜んで下さるほどの決闘者に！ きつと！！！」

それは、まるでずっと蕾ほしであった花が開くように、一人の決闘者が目覚めた瞬間だった。

視点：梓

私が大谷さんに叫んだ直後のこと。

「……………」

突然声が聞こえ、複数人分の気配を感じた。後ろを振り向くと、

そのころ……

第三話 開花の時（後書き）

お疲れ〜。

初決闘ながらアツサリしすぎたか？ 最初はこんなもんだって。

ほな次話まで待っててね。

第四話 花はやがて成熟し（前書き）

四話目。決闘は無いよ。

やべえ、本当に書くこと無くなってきたよ。

でもまあこの言葉だけは変わらない。

行ってらっしゃい。

第四話 花はやがて成熟し

視点：大谷

初めての決闘大会から三ヶ月。あれから夜になつては決闘の大会へ出場するという毎日が続いている。当然どれも夜に行われるような大会であるため、全て非公式の物だ。当然変装も忘れず、あの日初めて名乗ったリングネーム、『サイレントフラワー』という名前をずっと使つて出場している。非公式であることから記録が残ることとも無く、強過ぎることでも有名になるという心配もほぼ無いため、家元も本気を出して決闘を行うことが出来ている。そのため、全ての大会で優勝を飾り、初めての夜からだいぶ『決闘者レベル』とやらも上がっている。

当然仕事の方もおろそかにはしていない。朝と昼間は仕事のお稽古周りを行っている。またそれまで夜に行つていた仕事も、武道の稽古に当てていた二時間が空いたため、今まで以上に余裕を持つて行うことが出来ている。処理する量が多過ぎることからやはり徹夜をする日はあるものの、決闘を始める以前に比べれば遙かに睡眠時間は増えてきている。大変良い傾向だ。

だが、同時に気になることも出来た。

あの夜以来、なぜか家元は独り言を繰り返すようになった。また、仕事も大会も全く無い夜というのも時々あるのだが、そんな夜はどこかへ出かけることが多くなった。私にも言えない場所らしい。おまけに帰ってくると必ず汗だくになり、風呂に入っている。病院かとも思つたが、時間的に病院が開いているとも思えず、何より、そんなに汗だくになるようなことを病院で行うことは無いだろう。

とは言え、秘密を抱えていることは寂しさも感じるが、それもま

た、家元の持つことが出来なかった少年らしさだ。今まで、少年らしい生き方を全くしてこず、青春と呼べるものも皆無であった家元のそんな姿を見ることが出来るのは、私には、まるで一種の親心のような嬉しさを感じさせられる。

家元には、もっと年齢相応の楽しみというものを、多く感じて欲しいと思う。

視点：梓

「はあ……………はあ……………」

私が息切れを起こすなど、いつ以来のことでしょうか…………

「こんなものか？　こちらはまだ余裕だぞ」

「……………ええ、分かっています……………少々、息を整えていただけです……………続けて下さい……………キザン」

会話しながら、刀を杖に立ち上がり、目の前に立つ、黒い鎧姿の武将、『キザン』に話し掛けます。

「頑張るなあ。その辺にしとけよ梓。体もたないぜ」

「お黙りなさいカゲキ……………私はあなた方の主である身……………ならば、あなた方以上に強くあることこそ必然」

「私達以上か。志は良いが、そもそも人間と精霊じゃ生まれつきの体力が違う」

「それは、私が弱くて良い理由にはなりませんよ、エニシ……………」

二人が返事をしたのを見た後で、またキザンと向かい合います。

「僕らは水でも汲んでこようか？　ミズホ」

「そうね、シナイ」

「構えなさい！ キザン！」
そう叫んだ直後、踏み込み、刀に手を掛けます。

「やれやれ。顔は女子なうえ普段は冷静な癖に、こつこつ時は熱血男子だよな」

「だが、それでこそ私達も仕えるに足るというもの」

「以前の主は最悪だったしね。彼は若いけれど、素質もあるし努力も相当なものだよ」

「そうね。むしろ、その若い部分を私達で支えていくべきでしょう」

「はあああああ！！」

ガツキ！！

……
……
……

それは、初めて出場した決闘大会で勝利した直後、セキュリティが来たことで急いで逃げた後のことでした。

「私はきつと、なってみせます。お父さんも喜んで下さるほどの決闘者に！ きつと！」

大谷さんに向かって、年甲斐も無くそんな大声を上げた直後でした。

『我らが主』

突然声が聞こえ、複数人分の気配を感じました。後ろを振り向くと、そこには……

「な……！！」

その、私の前にひざを着く六人の影を認識した直後、すぐに消え

てしまった。

「どうしました？ 家元」

「大谷さん……」

呼ばれて見てみましたが、大谷さんは何事も無かったような顔を見せていました。

「……いいえ。早く戻りましょう」

きつと、夢幻ゆめまぼろしの類たぐいであろうと自分に言い聞かせ、今の光景は忘れることにしました。

しかし、その後ですぐ自宅へと戻ったのですが、自室へ入るなり、夢ではなかった……」

『ま、そういうことだ』

六人中、茶色く光る鎧を着けた武将が話し掛けてきました。

「あなたは……もしかせずとも、『真六武衆・カゲキ』ですか？」

『ああ。今後ともよろしく。主様』

その言葉と同時に鎧が消え、彼の素顔と、普段着と呼ぶべきか？茶色の着物姿となりました。カゲキ、素顔は思っていたよりも若いのですね。

「……先程もそう言っておりましたが、主とはどういう？」

『それはな……エニシ、説明』

『私か……』

少々呆れた声を出しながら、緑色の鎧の武将、エニシが前に出て参りました。やはり鎧が消え、緑色の端正な素顔と着物姿に。

……

……

……

「……つまり、あなた方は決闘モンスターの精霊であり、そして

今日から私が、あなた方の新たな主として選ばれた。そういう意味ですか？」

『そういうことだ。今日からよろしく頼む。主』

「……にわかには信じがたいお話ですね。第一主と呼ばれましても、私は具体的に何をすれば……」

そう聞き返そうとした時、急に後ろから抱きつかれました。

『別に何もしなくても良いって。君はただ、僕達を使って決闘をする。そして僕達は大暴れする。それだけだよ』

後ろを向くと、青色の着物を着た美形の男性。

「あなたは、シナイですか？」

『ピンポン。今日からよろしく〜』

随分軽々しい口調ですね。武将というイメージとは正反対の、現代風の男子のようです。

『ちよつと、シナイ、主となる方に馴れ馴れしくするんじゃない！』

今度は赤色の着物の女性。確かめるまでもありません。

「あなたはミスホですね」

『ああ、はい』

返事をしながら、必死な顔で私からシナイを引き剥がしました。

『あはは、ごめんごめん。彼女は僕の奥さんだけど、武将の癖に嫉妬深くてさ。僕が真六武衆以外で男女問わずいちゃついていると、すぐこうなっちゃうんだ』

『シナイ！』

ミスホが叫んだ直後、シナイは彼女の手を取り、顔を近づけました。

『安心して。僕が誰と一緒にいようと、一番はいつでも君だから』

『シナイ／＼／＼』

『愛してるよ。ミスホ……』

そして、二人は無言で見つめ合います。

おしどり夫婦で微笑ましいことですね。何やらあの二人の周囲に桃色の空間が広がっているように見えるのは気のせいでしょうか。

『まあ、あの二人は基本あんな感じだ。戦いの時は頼もしいんだが』
「良いことですよ。それだけお互いのことを思い合っているということなので、」

「そんな二人をずっと見ていたかったのですが、」

『……その辺にしておけ』

「そんな、低い声が聞こえました。黒い着物。私よりは短いですが、背中まで伸ばした髪。」

「キザンですか？」

『……ああ』

「それは無表情ですが、全てを見透かすかのような目をして、私を静かに見据えています。」

『とにかく、今日からあなたが私達の新たな主だ。今後とも、よろしく頼む』

「はい」

彼の真剣な態度に、自然と私も気が引き締まるのを感じました。
「のですが……」

『お前はいつでも固いよなあ！』

「そんな声と共に、白い着物を着た、最後の一人が後ろからキザンに抱きつきました。」

『……やめてくれ』

『固いことは言いつこなしだ。それより主！』

「はい！？」

突然大声で呼ばれ、目が合います。

『何でさっきは私だけ呼んでくれなかったんだよ！ こっちはやる気十分だったつてのに、差別か！？』

叫びながら徐々に近寄ってきました。

「そんな……ただあなたを呼ぶ必要が無かったですよ。それに、ルール上フィールドにモンスターは五体しか並べられませんし……」

『あー！ 何で六体並べられないんだか！ まあ良い！ 今度やる時は私を呼べよ！』

「いやあ……あなたを呼んでしまうと、勝負が簡単に着いてしましますので……」

「はあー!? じゃ何か!? 私の初陣はまだまだ先ってことか!」
「?」

「す、すみません。あなたには、もっと然るべき舞台で召喚しよう
と、デツキを組む時点で決めていたものですから……」

「それいつだよ!? 私はいつになったら戦えるんだよ!? 終い
には泣くぞー!!」

「あはは……」

「あははじゃねーよ!」

その絶叫とほぼ同時に、左右からエニシとキザンが現れ、彼の両腕を押さえました。

「許して欲しい、主。こいつはすぐにこうなる」

「私達の中じゃ一番強いが、同時に寂しがり屋で一番面倒臭い」

「……たく。強過ぎるってのも考えもんだぜ」

「……」

目の前に立つ三人、そして、その左右に立っている三人の、計六人。彼らを見ながら、私は思いました。

「……ではさっそくですが、主として、二つお願いがあります」

その言葉と同時に、六人ともに顔が真剣な物へと変わる。それは、主君を見つめる武將の姿に他なりません。

「まず、一つ目ですが……」

そして流れる緊張感。彼らは何を言われるのか、体を硬直させながら聞いています。

「……私のことは、主では無く、梓とお呼びなさい」

そう言うつと、六人はなぜか力が抜けたような顔を見せました。

「そんなことかよ。妙に真剣な顔するもんだから緊張しちまったぜ」

カゲキが言いました。

「だが、あなたは主だ。それを気安く、名前など……」

キザンが話していますが、それを遮ります。

「私があなた方と戦ったのは今日が初めてです。私はまだ、あなた方に主と呼ばれるだけの功績は挙げていない。何より、私はあなた方を、家来のように扱っただけはしたくない。私はそこまで偉い人間ではないのですから。だから今後、私を目上の者として見ることは許しません」

そう言った後、また沈黙が流れました。

今の言葉に嘘はありません。彼らは仲間なのです。仲間達に目上として見られることなど、おかしいこと。いつもの教室のような、先生と生徒、そんな関係では無いのですから。

「……分かったよ。梓」

真つ先に返事をし、目の前に来たのは白い着物。

「まあ、別に主と言っても、主従関係なんて言えるほど大げさなもんでもねーから、気軽に構えてりゃ良い。それでお前が名前で呼べつてんなら、私達はそうさせてもらっさ」

「それもそうだね」

シナイが返事をしながら、私の前に立ちます。

「よろしくね。梓」

そして笑顔。綺麗な笑顔ですね。

「ほら、ミスホも呼んでごらんよ」

「あ……梓……」

「はい」

私も返事を返します。すると、ミスホは笑って下さいました。

「じゃあ俺達もだ。梓」

カゲキが笑いながら呼んで下さいました。

「梓」

「エニシも。そして最後は、

「……梓」

相変わらず表情は暗いですが、キザンも呼んで下さいました。

「それで、二つ目の願いは？」

尋ねられたので、また笑顔を浮かべます。

「二つ目の願いは……」

……
……
……

二つ目の願いが、これというわけです。

「はあ……はあ……」

遂に体力の限界が訪れ、地面で仰向けに倒れてしまいました。

「はい、お水」

シナイから水を受け取り、横になったまま飲み干します。

「あり……がとう……」

ここは決闘モンスターの精霊世界。多少暴れても被害は起こらない広い草原。

倒れた場所の草が私を包み、風が肌に心地良い。

「三ヶ月。間違いなく強くなった」

「キザン……まだ、あなたには、勝てませんが……」

「私以外には勝っている」

その言葉と同時に、後の四人も私の前に立ちました。

「たった三ヶ月で大したもんだな。俺は修行を始めてから一ヶ月目で倒されちまうしよ」

カゲキが笑いながら言いました。彼の四本の腕は厄介でしたが、徐々に目が慣れていき、全て見えるようになった所で勝つことが出来ました。もちろん、私が人間だからと手は抜かない。お互いに本気で戦った結果です。

「その二週間後には、私とシナイの二人まで破ってしまわれた。あの時は、さすがに少し落ち込みました」

「まあ、僕がすぐに元気づけてあげたけどね」

シナイが言いながらミズホを抱き寄せ、またミズホが赤くなりま

す。

シナイとミズホの二人は、常に寄り添い生きている。それは戦場でも同じ、いつも二人で戦ってきたそうです。なので、私は二人にだけは二人がかりで相手をして頂くことにしました。二対一という状況も経験しておきたかったこと、そして、二人の全力と戦いたかったことが理由です。そして、勝つことが出来ました。

「二ヶ月目には私と互角に渡り合えるようになり、その一週間後には私を超えた」

エニシの言葉。まさに光のような素早い動きで翻弄されました。なので、私も素早さを徹底的に鍛え上げました。人間の世界で車を追い越せるようになったところで、始めて彼を倒すことが出来ました。

「そして今、確実に私を追いつめつつある」

キザンが言いました。エニシよりも早く、カゲキよりも猛々しく、そしてシナイとミズホよりも正確な動き。

それでも、毎日戦うことで、ようやく彼の動きも見えてきました。何度も勝てる気がしては負けていますが、確実に、彼を追いつめている。

「もつとも、あいつは私より遥かに強いが……」

目を閉じながら言われました。そして、彼の方を見ます。

一人だけ、ここから離れた場所におり、いびきを掻いて眠っている。

「どの道、私を倒さない限り、奴には辿り付けない」

「分かっています……続けましょう」

横になっているうちに体力も回復しました。また立ち上がり、構えます。

が、

「もう時間だ。さすがにもう帰った方が良い。明日起きられないよ」
シナイが言ってきました。

少し惜しいのですが、仕方ありません。

「分かりました。例によって次はいつになるかは分かりませんが、また次回に」

「ああ。梓もすっかり仕事しろよ。次の決闘の大会、楽しみにしてるからな」

カゲキに手を振られ、私も手を振りながら、精霊世界を後にしました。

そして、自室に戻ってすぐ私はお風呂で汗を流し、布団に体を預けました。

……

……

……

朝を迎え、いつものように大谷さんに起こされた時です。

「家元、あなたにお手紙が」

「手紙？」

まだ少し眠気は残っておりましたが、すぐにその手紙の封を開き、内容を確認します。

「……」

……！

「こ、これは……！！」

その内容に、眠気が一気に吹き飛んでしまった。

……

……

……

視点：？？？

いつ見ても美しい。ネオドミノシティの摩天楼。

この光の一つ一つが現在いまにある平和の象徴であり、人々が生きているという証でもある。一つ一つ色が違うように、人もそれぞれ違っている。まさに、人と言う名の光の芸術。

そうしみじみ思いながら、摩天楼を眺めていた時です。

『長官』

コールセンターの女性スタッフの声。そして、目の前の画面にその顔が表示される。

『お電話です』

『どなたから？』

『水瀬梓様と』

ほう、来ましたか。

「繋いで下さい」

そう話し掛けると同時に、女性の顔が消え、代わりに美しい顔の出現と共に、高い少年の音が響きました。

『レクス・ゴドウィン長官ですか？』

「はい」

『初めまして。水瀬梓と申します。こんなに夜遅くの時間でのご連絡、お詫び申し上げます』

ふむ。こちらから呼び掛けたにも関わらず、その応え方に対する謝罪。評判通り、とても礼儀正しいようだ。

「お気になさらず。お呼び立てしたのはこちらです」

『では、さっそくですが本題に入らせて頂きたい』

彼はそう言うと、足元から一枚の手紙を取り出した。

『これは一体どういうことなのでしょう？』

いぶかしげに聞いてきている。それも当然でしょう。

なぜなら……

「手紙に書いてある通りです。近日行われる決闘者の祭典『デュエル・オブ・フォーチュンカップ』。それに水瀬梓さん、あなたを出

場者として招待したい」

私のその言葉で、更に表情が強張りました。

視点：梓

わけが分からない。この男は何を考えているのか。

「私は決闘などしたこともありません。知ってはおりますが、カードにすら触ったことも無い。招待する人間を間違えているではありませんか？」

私は決闘を行わない。私は数ある教室の先生というだけの人間。それを、治安維持局長官が、知らないはずはありません。

『ふむ。そうおっしゃるかと思いました。では、私からも一つ、お尋ねしたい』

質問？ 一体何を？

『……サイレントフラワー』

！！！

『ご存知ですか？』

「……聞いたことはありませんね」

内心かなり驚いています。どうにか無表情を維持することが出来ました。

『毎夜どこかで開催される非公式の決闘大会。そこに、かなりの力を持つ決闘者がいると言います。その決闘者の名がサイレントフラワー。そして、彼はどういうわけか、夜に行われる非公式の大会のみに出場し、ここ三ヶ月に行われた大会で全て優勝を攫っているという話です』

「ほお、それはそれは……」

く、この男……

『非公式大会であるため記録は残りませんが、それを見ていた大勢の人達からの情報を得ました。そして、ある非公式大会でカメラを

設置させて頂き、その映像を入手しました』

そう言いながら、写真を一枚こちらに見せてきました。

『これは、あなたですね』

「……帽子とサングラスでよく顔が見えませんよ。こんな格好なら私でなくとも誰でも可能なはずです」

『証拠はこれだけでは無い。決闘中の音声も録音し、あなたの声と照合しました。百パーセント、あなたの声と一致しています。何より、この写真の顔も既に解析済み。あなたであることは疑いようが無い』

……

『何なら、次の非公式大会で、彼を拘束しても良い。大会に出てこなくとも、それはこの電話を受けたから、と、受け取れますからね』

……く、

「……目的は何ですか？」

「ここまでの証拠を揃えられては、私もこれ以上は何も言えません。私を脅迫でもする気ですか？」

『まさか。このことは私と、信頼出来る一人の部下しか知りません』

「では何のために？」

『誤解はしないで頂きたい。私はただ純粹に、あなたを決闘者として招待したいだけのこと』

「……」

本音を言えば、願っても無い申し出。しかし、

「大会概要を見ましたが、私には出場する時間などありません。私は毎日、いくつもの教室を回っている身。代わりの先生も存在しない。それを休みにすることなど出来ません」

大会は三日間、全て真っ昼間の時間帯に行われる。私の開く教室とは完全に時間が重なってしまっている。私が大会に出場する時間など、全く無い。

しかし、ゴドウィン長官は微笑を浮かべました。

『それは重々理解しています。しかし、同時にあなたには、それほ

ど時間も残されていないのでは？」

「時間？」

「あなたのお父様のために、決闘者となる。そのための時間です」

「！！！」

なぜ、そのことを！？

「どこでそれを！？」

「ある情報網から入手しました」

そんなことを知っている人間は、私や父以外には……

「大谷さん？」

隣に立っていた大谷さんに尋ねます。

「違います！ 私は何も話していません！」

真剣な顔で必死に否定している。

「敢えて私からも言わせて頂きましょう。彼ではありません」

ならば一体誰に……彼の情報網はそれほど物だということか……

「あなたはまだ十六歳でありながら、現在の地位に立つまで毎日血を吐くほどの努力をした。しかし同時に、決闘者になることを幼い頃から望んでいた。そして、お父様からデツキを受け取り、ようやく決闘者を目指せるまでに至った」

「しかし、水瀬家二十一代目頭首として、表立った行動は取れない。正直なところ、私も驚きました。日本一の名家、水瀬家の現頭首が、人知れず決闘者として動いていたことには」

「……………」

「もちろん、表立って行動出来ない理由も分かっています。仕事上普通の大会に出られないことももちろんですが、何より多くの教室の生徒達の手前、その先生が決闘者であるなど口が裂けても言えない。何より。水瀬家の内部では今でも、あなたを快く思わない方が多数派であることも把握しております。もし決闘者であることがばれれば、今度こそ言い訳は出来ない。間違いなく、現頭首の座を追われる恰好の口実を与えることになる」

く…………この男は、どこまで私のことを調べて…………

『しかし、決闘者を目指しているのならば、こういった大きな表舞台もいつかは通る道。いつまでも非公式の大会では、それが記録として残ることも無い。おまけにあなたのお父様の余命は約半年。この機を逃せば恐らく、あなたの雄姿をお父様に見せる機会は永遠に訪れない。そうなれば、お父様との約束は、永遠に叶えることは出来なくなる』

「……………」

『だからこそ、私はあなたにきつかけを与えたかった。あなたの志には感動しました。何より、決闘を始めてたった一ヶ月で、初めての決闘に勝利し、その後の三ヶ月間も負け無し。あなたの決闘者としてのレベルはかなりのもの。私の見る限り、キング『ジャック・アトラス』にも引けを取らないタクティクスを持っている』

「な……………」

キングにも、引けを取らない……………」

『それだけの姿を、あなたは見せたいとは思いませんか？ フォーチュンカップは世界中に放送される大会です。間違いなく、あなたのお父様も見ることが出来るでしょう。あなたとお父様の、決闘者になる夢を叶えるという約束、それを、見せることの出来るチャンスなのです』

「お父さんに、私の雄姿を……………」

「家元」

…………… 今までは、非公式での大会でしか腕を振るえなかった。変装したとしても、有名になれば、いずれは必ず正体がばれてしまう。それだけは許されなかった。生徒の皆さんを失望させてしまうかもしれない。何より、それが原因で現頭首の座を辞されれば、お父さんにも申し訳が立たなくなってしまう。

しかし、いつまでも非公式大会に出ているのは、その姿を見せてあげられない。それも分かっていた。いつかは公式での大会に出なければならぬ。分かっていたことです。それも、その姿を、病院に

いるお父さんにも確実に見せてあげられる、そんな大きな大会に。
そしてそれが、目の前……。

『もちろん強制は致しません。最終的に決めるのはあなただ。出場するにしろ辞退するにしろ、またご連絡を頂ければこちらで手続きは済ませます』

『では、これで……』

そう話しながら、彼は電話に手を掛けようとした。

「……待って下さい」

私がそう話し掛けたことで、彼も手を止めます。

「……一つだけ、許して欲しいことがあります」

『ふふ……お聞きしましょう?』

「……」

『そのくらいは構いません。こちらもそのように取り計らいましょう』

「……感謝に堪えません」

『いいえ。私はただ、あなたの純粹さを応援したかっただけです。それでは、大会でお会いしましょう。水瀬梓さん』

そして、今度こそ電話を切りました。

「家元……」

「……大谷さん……私に、許されるのでしょうか?」

「……」

「私が……大勢の生徒達を抱える私が……水瀬家頭首である私が……」

……こんなことを、許されるのでしょうか……」

フォーチュンカップへの出場を、決意してしまった……

決闘者としての姿を披露すると、決意してしまつた……
身分や生徒達のことを差し置き、決意してしまつた……

「私は……そんなことをして……許される人間だと思えますか？」
夢を叶えたい……

生徒達に申し訳ない……

お父さんに見て欲しい……

私には身分がある……

様々な思いが交錯しても、目の前の誘惑を振り払えなかつた。私に与えられた、恐らく最初で最後の機会。それを、掴むことしか考えられなかつた。

しかし、決めた後で、後悔が私を襲つた。私に、許されるのかと。

「その答えは、家元が見つける他ありません」

大谷さんはそう答えました。

「私としては、あなたは今まで、十分過ぎるほど努力をしてきた。そんなあなたが、夢を持つてはならないなど、あつて良いはずはない。しかし、あなたがそれを許せないと思う限り、それは永遠に否定されるしかない。あなたがあなた自身を許して差し上げられない以上、私には、何も言うことは出来ません」

「私が、私自身を……」

考えたこともありませんでした。ずっと、自分を否定的にしか見られなかつた私が、そんな私自身を、許すなど……

『梓』

突然、複数人分の声と気配。そちらを見ると、六人分の影。

『何を迷つてんだ？』

『僕達がいるじゃない』

『そんな姿は、梓らしくありません』

『自分に正直でいればいい』

『私達は、梓のどんな思いにも従う』

『そういつこつた。一人で苦しむなよ』

「皆さん……」

……そうですね。私は、決闘者であると同時に、あなた方の主でもある。

まだ、決意は揺らぐ。

迷いも消えない。

私を許せる自信が無い。

けれど、あなた方が、私を許して下さいと言っのなら……

「……フォーチュンカップ、そこで、あなた方の力を私に！」

『おう！』

六人の力強い返事と同時に、私は改めて、決意を強めました。

「家元、また独り言ですか？」

視点：レクス・ゴドウィン

さて、彼を招待することが出来た。彼がシグナー達にどのような影響をもたらすか、私にとっての駒となり得るか、見せて頂きますよう。

第四話 花はやがて成熟し（後書き）

お疲れ〜。

ちなみに真六武衆の性格は適当だよ。マスターガイドとかにも色々書いてあるけど、めんどい。これでいく。

あと気付いてるろうけど、こっちはあっちに比べてギャグ少なめなあれだから。

以上。次話まで待っててね。

第五話 開幕、デュエル・オブ・フォーチュンカップ（前書き）

フォーチュンカップだ。

やっと原作の展開が来たね。待たせたんならごめんね。

まあいいや。長話はそれこそ毒だ。

行ってらっしゃい。

第五話 開幕、デュエル・オブ・フォーチュンカップ

視点：梓

「はあ……はあ……」

「……くっ」

私の前には、キザンが顔を歪ませている。

鎧を着ていますが、その手に刀は無い。

当然です。彼の刀は、彼の遙か後ろに刺さっているのですから。

そして、そんな丸腰のキザンに対し、私は刀を突き付けている。

「私の……勝ち……ですね……」

「……ああ」

もつとも、息はとうに上がり、足は震え、刀が大変重く、もはや体中がだるい。正直、あと一撃でも受ければ簡単に倒されてしまうでしょう。

しかし、それでも、

「大会前に、間に合いました……」

「まさか、本当にやってのけるとはな」

フォーチュンカップの開催は明日。デッキは完成している。後に思い残していたのは、キザンに勝つこと。そして……

「く、うう……」

さすがに体力の限界が訪れ、ひざを着いてしまった。

「はあ……はあ……これで、あと、一人……」

呟きながら、その一人を見た時、いつも寝ていた彼は目を覚まし、刀を手に取りました。

「まだやれるよな？」

「当然……」

返事をしながら、どうにか立ち上がりました。

「ちょっと、待って！ さすがにもう限界だよ！」

「やめて下さい梓！ 今彼と本気でやりあったら、大会どころでは

無くなります！」

シナイとミズホが制止しますが、

「止めても無駄です……私は、一度も彼とは刃を交えていない……そんな状態で、彼を従える資格など、ありません……」

「……なるほどな。ずっと私を決闘で使ってくれなかった本当の理由はそれか」

「はい……だから、どうしても……大会前に……あなたに辿り着きたかった……あなたは強い……だからせめて……私があるへ届いた時でなければ……あなたと戦う資格など……持つことは出来ないから……」

「そうか。そう思うなら、さっさと来な」

「鎧は、着ないのでですか？」

「このままで十分だ」

「舐められた物です……」

返事を言い切らないうちに、踏み込みを入れました。そして、一気に彼の目の前へ、そして刃を振り下ろす！

ガキッ！

当然受け止められません。彼がこの程度で終わるはずが無い。先程の言葉もハツタリでないことは、今の一撃でよく分かりました。

「はあああああー！！」

ガキガキガキガキガキ……

大声を上げながら、間髪入れず斬撃を加える。しかし、彼はそれを全て受け止めてしまう。

「うおおおおー！！」

ガキガキガキガキガキガキガキガキガキガキ……

更に速度を上げる。だがやはり、全てを受け切られる。

「すつげえ。まだあんな体力が残ってたのかよ」

「……体力だけの問題では無いだろうな」

「ああ。奴と戦える。その事実こそが、梓の中で力となっている」

「さすが僕らの主、てことかな？」

「しかし、あれだけの攻撃全てを受けている彼もかなりのものですね」

「あああああああ！！」

ガキガキガキガキガキガキガキガキガキガキガキガキガキ……

「ふふふ……」

くっ！ どれだけ攻撃しても、全く当たる気がしない。

「何で当たらないか教えてやろうか？」

「は……？」

声を出した直後、足を掛けられ、派手に転んでしまった。

「お前は速さはあるが、腕力が無いんだよ」

「腕、力……？」

「ああ。今までの五人には、腕力が無い分速さを鍛えて、手数を増やしてどうにか戦えてた」

五人を見ながらそう言った。

……自覚はしていました。私は生まれつき、女性並みの筋力しか持ち合わせていない。そのために、今までの武道も、力に頼る必要の無い技術を身に付け、人より、より早く動くこと。それしか無かった。

だから……今更そんな物は必要無い。

「なら、その腕力を凌ぐだけの、速さと技を……」

「お前じゃ今が限界だ」

「なら、その限界を、超えれば良いだけのこと……」
そう。それだけです。

「限界など、今まで、何度も感じてきた……そして、その度に、それを、乗り越えた……だから、今回も、そうするだけのこと！」

「……よく言った。それでこそ、私達の主だ」
「違う。それが主には必須なのです」

「……ふ、そうだな。じゃあせっかくだ。私が一つ、特別に教えてやるよ」

「教える？」

聞き返した時、刀をかざし、構えました。

「え！？ いや、ちよつと……」

「まさか、あれをやる気か！？」

「よせ！ 梓を殺す気か！？」

「心配するな。梓なら、死にはしないだろう」

「何を……」

「踏ん張れよ！ 覚悟しないと本当に死んじまうぞ！」

やけに興奮した様子で叫んできました。

その直後、ただならぬ力を感じました。尋常ではない圧力が私を襲う。

しかし、逃げてはならない。ようやく見られるのです。彼の本気を。

「死ぬんじゃないぞ……！ 梓……！」

「ぬう……！」

……

……

……

……
「も……」

……
「い……もと……」

……
「えもと……」

……
「家元！」

目を擦り、眠く重たい体を持ち上げた時、体中が痛んだ。

「うう……」

「家元！ 大丈夫ですか！」

「はい……」

大谷さんに返事をした時、汗と土の臭いが鼻を突きました。どうやら、お風呂にも入らないまま、眠ってしまったようです。

「今は何時ですか？」

「もうすぐ朝の六時です」

「そうですか」

良かった。まだまだ余裕があります。

「まずはお風呂に入ります。すみませんが、布団を干しておいて頂
けますか？」

大谷さんが頷いたのを見て立ち上がり、お風呂へ歩きます。

シャワーを浴びながら、私は考えていた。

昨夜のあれは、私を襲った彼の斬撃と衝撃は、全て夢だったのでしょうか？

いや、体の節々に残る痛みが、そして、この胸に残る緊張と恐怖が、間違い無く現実であったと教えている。

「……そうです。私はようやく、彼に辿り着いたのです」

これでやっと、あなたと戦う権利を得ることが出来た。私はやっと、あなたの主へと上り詰めることができた。

「……辿り着くだけでは終わらない。私は必ず、あなたを超える！」

……

……

……

視点：外

ドン！

ドンドン！

『エブリバディリッスン！！ いよいよ！！ デュエル・オブ・フオーチユンカップ！！遂に開幕！！』

『わあああああああああああああああ！！』

MCの声と同時に起こる大歓声。血気と興奮、上気と激昂、それらの言葉が相応しい、熱気に包まれた大空間。

その熱気に彩られた視線は、一様に一点に集中されている。その熱気を盛り上げるMC、そして、そのMCの前に広がる空間に。

『現れたのは、「レッド・デーモンズ・ドラゴン」だー！！そしてこのホイール音は！？』

より一層、歓声は大きくなった。日本の中心都市、ネオドミノシティ。世界中を熱狂させる物、決闘モンスターズ、その決闘モンスターズで頂点に君臨する男、それが『ジャック・アトラス』という男。彼らの熱気も必然だった。

轟音と蒸気の発生と共に、彼は現れた。世界に類を見ないリング状のD・ホイール、そこに跨^{またが}る黄金に輝く髪と白のスーツ。何より、それらとは対照的だが、だからこそその存在を際立たせる禍々しい赤と黒、キングの象徴『レッド・デーモンズ・ドラゴン』。

「キングは一人、この俺だ！！俺と決闘するのは誰だ！」

『キングとのドリームマッチを賭けて、幸運のチケットを手に入れた決闘者達よ！ いざここに！』

その言葉と同時に、MCの前の空間の床が開く。そして、そこから床がせり上がってきた。そこに立つのは八人の決闘者。MCの言った通り、この式典のために世界中から選ばれた、八人の精鋭決闘者。

それぞれが様々な表情を浮かばせる。静かだが、確かな闘士を浮かばせる青年もいれば、興奮に笑みを浮かべる子供、そして、一切感情のうかがえない少女。

そしてそれは顔だけに限らず、服装に現れる者もいる。これから戦いに出陣しようとする者が放つ鎧の輝き。一切の表情と姿を隠してしまうフード。そして、同じく一切の表情を隠す、面を着けた、着物の人間。

目の前の画面にそれぞれの顔が順に映される。だが、最後の一人

の顔が映された時、一気に場の雰囲気が変わった。

「お、おい、マーカー付きがいるぞ」

「お、ほんとだ」

「あんな奴を選ぶくらいなら、俺らを選んで欲しいよな」

「誰かの招待状、盗んできたんだろ？」

そして広がる、冷たい空気と吹聴。あからさまな野次や非難こそ起きない物の、もはや誰も、目の前の光景を楽しもうとする者はいない。だが、それも当然と言えた。

マーカー。顔に刻印される黄色のライン。それは、その人間が犯罪者とみなされた証。社会不適合者として、シティへの居住権を破棄された者の証。それはイコール差別の対象。ゆえに、普通にシテイやトップスで生きていた人間からすれば、最下級区域である『サテライト』の人間と同じほどの不快感を及ぼせる存在。

「ゆ、遊星……」

「気にするな……」

そして、空気と吹聴にも、八人共に表情は違った。不快感を露わに、もしくは無表情に、ただ一人の子供は恐怖を浮かべながらあたふたとし、非難を浴びている張本人は何も気にせず子供に話し掛けている。

だがそんな中、一人の男が動いた。八人の中で最も体格の良い、長髪の男。彼はMCからマイクを奪い、前に立った。

『お集まりの諸君！』

その声と同時に、全員が無言となり、注目がまた一点に集中した。

『私の名はボマー。ここに立つ決闘者として、諸君が一体何を見ているのか問いたい』

『この男は我々と同じ条件で選ばれた、紛れもない決闘者だ。カードを持ってば、マーカールがあるうが無かるうが皆同じだ。この場に立っていることに、何ら恥じる物は無い。むしろ下らぬ色眼鏡で彼を見る諸君の言葉は、暴力に他ならない!』

それだけ語ったところで、マイクをMCに返した。

その直後、一人の男が手を叩く。ネオドミノシティの安全を守る治安維持局。その長官『レクス・ゴドウィン』。必然的に街で最上の地位に立つ男が拍手をしたことで、それに釣られるように他の人間も拍手をした。それに気を良くし、MCも笑顔になり拍手を行った。

そして、ゴドウィンも立ち上がり、話しを始めた。

『……決闘者は、身分も貧富の差も関係ありません。真の平等がここにあるのです』

彼の語った話しに対し、また歓声と拍手。手の平返しとはこのことだろう。結局のところ、彼らはその理由がプラスであれマイナスであれ、盛り上がるきっかけさえあればそれに乗り、盛り上がることで楽しむ人間達。人が傷つくうとも、そうすることで愉悦を感じ、一時の喜びを得る。それが、見ていることしか出来ない人間の残酷さだった。

(不快な場所だ……)

……

……

……

「不快な場所だ」

開会式、第二試合の『十六夜アキ』と『ジル・ド・ランスボウ』、そして直前に行われた『不動遊星』と『死羅』の決闘。それらを思いながら、漏らした一言。

『まあ、観衆つてもんは大体あんなもんだ。理由はどうでも良い。とにかく盛り上がりに来てるんだよ』

「誰かを傷つけることになってもですか？」

『そう。むしろ、傷つけることで楽しんでいると言っても良い。大体の人間は、自分よりも下の人間の存在に心地良さを感じる。そして人にもよるけど、そういう人達を傷つけることを楽しいって思うのさ』

「……分かりたくもないのに、身に覚えがあり過ぎるのが余計に腹立たしい。どんな人間であれ、自分が傷つく行為が、相手をも傷つけてしまうことなど分かっているはずなのに……」

『身に覚えがあるのですか？ あなたにも？』

「ええ。私もずっとそうでした。傷つけられ、蔑まれることが日常でした。そしてそれに慣れてしまった。私になら、今更何を言われようとも構わない。なのに、それが他人なら、こんなにも腹立たしいのか……」

『それが普通の反応だ。非難を浴びていた、『不動遊星』だったか。彼も同じだったんだろう。慣れてしまって、今更苦痛にも感じなかったのだろうな。そしてお前は人一倍優しい。傷つく痛みを誰よりも知っている。他人の痛みを自分の痛みとして感じる事が出来る。だが現実には、そんな人間は少ない』

「そんな物は感じたくもない。人が傷つく所など見たくもない。誰もがそう思えば必然的に無くなるはずなのに、私以外の人間は、そう思わないのか……」

『誰でもそう思っている。だが、あれが本音だ。ずっと優しくはいられない。自分が周りに優しくなるために、誰しもが誰かを傷つけてしまう。そして、それが大勢の人間に嫌われてる人間なら、必然的に自分も傷つけるんだ』

ラー！「プロフェッサー・フランク」！」

『対するは、経歴は一切不明！しかしその強さは折り紙つき！
謎の仮面決闘者！「静花^{しずか}」！』

「何だあいつ！」

「うわあ、何だよあのお面」

「悪趣味ねえ」

『不動遊星』や『黒薔薇の魔女』の存在からその存在感は薄くなつていたが、『静花』という名の決闘者の存在もまた、観衆達には不快感を与えていた。

紫の着物を着ている。それ自体は普通のこと。服装が問題では無い。

先程も言ったように、決闘者の気概はその服装にも表れる。そして、その気概を敢えて隠すための格好をする者もいる。そして、静花もそれを隠すためか、MCの紹介した通り仮面を着けていた。

だがその仮面が問題だった。白く、悲しみに歪み、角を生やした女性。知識の無い者には、しばしば単なる鬼と呼ばれるだけの、『般若』の面。それは、見慣れていない人間には不快感しか与えない様相だった。

「なぜそのような面を被っているのか、それは分かりませんが、この決闘で、あなたの深層意識に隠された、本当のあなたを見つければしょう」

「……私は、この決闘を楽しむことは出来ない。あなたには申し訳ありませんが、すぐに終わらせて頂く」

「ほお……」

『それでは、始めて貰おう！ 決闘、スタート！……』

『決闘！！』

フランク

LP：4000

手札：5枚

場：無し

静花

LP：4000

手札：5枚

場：無し

「私のターン、ドロー」

フランク

手札：5 6

「私は『L シンメトリー Rロールシャッター』を召喚」

『L Rロールシャッター』

守備力1200

「『ロールシャッターテスト』というのはご存知ですね。この如何様いかようにも見えるモンスターを見て、どのように感じるかによって、あなたの抱える不安、心配、問題などを解き明かすための手掛かりを得る、心理テストです。さあ静花さん、あなたはこのモンスター、何に見えますか？」

「……………」

「……まあ良いでしょう。カードを二枚伏せ、ターンエンド」

フランク

LP：4000

手札：3枚

場：モンスター

『L Rロールシャッター』 守備力1200

魔法・罫

セット 2枚

「……私のターン、ドロ」

静花

手札：5 6

「……速攻魔法『サイクロン』を発動。対象は左のカード」

「ならば、破壊前に発動。『深層へと導く光』。相手はデッキの上からカードを五枚墓地へ送り、六枚目のカードをお互いに確認して手札に加える。そして、そのカードをプレイしなかった時、2000ポイントのダメージをあなたは受ける」

「さあ、カードを……一枚……二枚……三枚……四枚……五枚……六枚目は……」

「……永續魔法『紫炎の道場』。このまま発動させます」

静花のカードの発動と共に、フィールドは巨大な道場へと姿を変えらる。

「永續魔法『紫炎の道場』は、フィールドに『六武衆』と名の付くモンスターが召喚、特殊召喚される度、このカードに『武士道カウンター』を一つ乗せる。そして、そのカードを墓地へ送ることで、

乗っている武士道カウンターの数以下のレベルを持つ『六武衆』または『紫炎』と名の付くモンスターをデッキより特殊召喚出来る。まさに、武将達のための試練場。互いに仲間を呼び合い、助け合い、力を引き出し合う真剣勝負の場」

「……手札より、『真六武衆・カゲキ』を召喚」

『真六武衆・カゲキ』

攻撃力200

『紫炎の道場』

武士道カウンター：0 1

「攻撃力200、そんなモンスターで何を……」

「このカードが召喚に成功した時、手札の六武衆と名の付くモンスター一体を特殊召喚出来る。『真六武衆・エニシ』を特殊召喚。更に、カゲキは同名カード以外の六武衆が場にいる時攻撃力を1500ポイント、エニシは攻撃力を500ポイントアップさせます」

『真六武衆・エニシ』

攻撃力1700+500

『真六武衆・カゲキ』

攻撃力200+1500

『紫炎の道場』

武士道カウンター：1 2

「そしてこのカードは、フィールド上に『六武衆』と名の付くモンスターが二種類以上いる時、特殊召喚出来る。『真六武衆・キザン』を特殊召喚」

『真六武衆・キザン』

攻撃力1800+300

『紫炎の道場』

武士道カウンター：2 3

「ここで、『紫炎の道場』の効果が発動。効果は先程あなたの言った通りだ。説明は不要ですね」

「一気に四体とは、恐ろしい展開力だ……」

「私はデッキから、レベル2のチューナーモンスター、『六武衆の影武者』を特殊召喚」

『六武衆の影武者』チューナー

守備力1800

「チューナー!? まさか、シンクロ召喚を!?!」

「……参ります!」

顔を上げ、声を上げた静花の顔は見えない物の、その声は、間違い無くこれまで以上の興奮を感じさせた。

(行きますよ)

(『やつと出番か。ずっと待ってたぜ。この時を』)

(……ええ。私もです)

「レベル3『真六武衆・カゲキ』に、レベル2『六武衆の影武者』をチューニング!」

宣言された二体のモンスターが宙へ飛ぶ。そして、カゲキは光と化し、影武者は光の輪となり、光のカゲキを包んだ。

「紫色しいろの獄炎じくえん、戦場いくさばにて剣こゑを纏まとう! 武の精魂せいこんよ、天上凱歌てんじょうがいがの調べを刻め!」

「シンクロ召喚! 紫色しいろの剣はね! 『真六武衆・シエン』!」

静花の声と同時に、周囲は炎に包まれる。そして、その中から現れたのは、その炎よりも真つ赤に光る、深紅の鎧。

『真六武衆 - シエン』

攻撃力2500

「これが、あなたのエースモンスター……」

「さあ、バトルです！ 『真六武衆 - エニシ』、……私には、般若の顔に見えている、『L Rロールシャッター』を攻撃！ 斬光閃！」

「ぐう！」

「続いて、『真六武衆 - キザン』でダイレクトアタック！ 漆凱の剣勢！」

「ぐああ！」

フランク

LP：4000 1900

「これで最後です。『真六武衆 - シエン』、ダイレクトアタック！
「まだだ！ 永続罠『ゲシユタルト・トラップ』！ このカードは相手モンスターの装備カードとなり、効果を無効化し攻守を0とする！」

発動と同時に現れた鉄の枷。それが、シエン目掛けて飛んでいく。
「ならば、シエンの効果を発動！」

静花が叫ぶと同時に、『ゲシユタルト・トラップ』の枷が破壊された。

「な！ これは！？」

「『真六武衆 - シエン』は一ターンに一度、相手の発動した魔法・罠の効果を無効にし、破壊する効果を持ちます」

「まさか、そんな効果が……」

「攻撃を続行！ 『真六武衆・シエン』！ 紫流獄炎斬！！」
「ぐあー！！」

フランク

LP：19000

「これほど虚しい勝利も無い……」

静花はそう呟くと、残り一枚の手札をデッキに納めた。

「な、あの動き！」

「どうしたの？ 氷室のおっちゃん」

「六武衆デッキに、今のあいつの動き……間違いなえ。俺が最後に地下で決闘をした決闘者、『サイレントフラワー』」

「今の動き！」

「ああ、俺も見たことがある！」

「間違いない。あいつは、最近の非公式大会を荒らし回ってる……」

「サイレントフラワー」

「サイレントフラワー！？」

「サイレントフラワーだ！！」

「奴が表舞台に出てきたんだ！！」

「シンクロモンスターを連れて、表の世界に登ってきやがったー！！」

一気に彼の存在が、会場中に知れ渡った。

「フフフフ……まさか、あなたが噂のサイレントフラワーだったとは……」

倒れていたフランクは立ち上がり、静花に向かって話し掛ける。

「……このテストは、あなたが意識の底で恐れている物を露わにす

るためのもの……あなたが恐れたのは、今付けている面と同じ、般若。怒り、悲しみ、憎悪、そのいずれか、またはそれら全て。いずれにしろ、あなたは恐れている。そんな、人ならば誰もが持っている負の感情、それに苛まれることを……」

フランクの言葉を聞いた後で、静花は決闘場を後にした。

視点：梓

誰もいない場所で、般若の面を外す。非公式大会にも関わらず、既にあれだけの人間に知られていたのは意外でした。これで、『サイレントフラワー』の存在は完全に表に出てしまいましたね。もっとも、さすがに素顔までは知られていないようで安心しましたが。

しかし、プロフェッサー・フランクの語った言葉。

「あなたは恐れている。そんな、人ならば誰もが持っている負の感情、それに苛まれることを……」

「……………くっ！」

……………そうだ。私は怖い。怒りが、悲しみが、憎悪が、そんな物に私の心と感情が支配されてしまうこと。私には、そのようなことがあつてはならないのに。

『よっ。梓』

突然、後からシエンの声が聞こえました。振り返ると、そこにはいつもの着物を着た、シエンら真六武衆達。

『どうだった？ 私の初陣は』

「……………あなたの戦いが、良くないはずがありません。ここまで来るのに、大変な時間を要してしまったことを、改めてお詫びしたい」
『気にするなよ。久々に戦えて、それに、お前の役に立てて、嬉しかったぜ』

「……そうですか」

返事をした後も、私の気分は優れない。何度も彼の言葉が、私の中で繰り返される。

「……すみません」

「ん？」

決闘を終えた後になって気付いた。私のしてしまったこと。その意味を。

「……怒り、憎しみ、そんな物を感じてはならないと、いつも自分に言い聞かせているのに、私は結局、その感情を抑えることができなかった。シエンの言葉に従い、怒りをぶつけてしまった。本来なら、そんなことはしないと、あなたに言わねばならないはずだったのに……」

「……」

「誤解はしないで下さい。シエンは何も悪くは無い。そうすると、決めたのは私なのだから。怒りなど、憎しみなど、真に人を思いやれていないから感じる物だ。それを感じるなど、私が人を思いやれていない証拠だ。そう自分に言い聞かせ、耐えてきたのに……」

「私は怖い。あの人の言った通りだ。そんな、負の感情を持つことが、そんな負の感情に苛まれる自分が……」

どうして人を憎める……どうして怒りなど覚える……どうして私は、こんなに……

ポン

その時、私の肩に、手を置かれる感触が。

「お前、凄いな」

「シエン……実体化できたのですか！」

『俺達の中ではシエンだけだ』

そう、カゲキが説明した。

「あのな、梓。誰かに怒ったり、誰かを憎んだり、そんな感情、誰

だって感じる物なんだぜ。私だって、最初梓に感じてたんだ」

「……………私にですか？」

「ああ。他の五人が戦ってるの見て、私も戦いたかった。お前は然るべき舞台上で私を使いたいって言うってたけど、正直理解できなかったし、どうでも良いから戦わせろって思った。それでも使ってくれなくて、結構傷ついてたんだぜ」

「あ……………」

どうして気付かなかった？

彼は武将だ。なら、それが戦えないということが、どういう意味を持つのか、それを、なぜ気付かなかった？

「シエン……………」

「おっと、謝らなくていい。もう怒ってないからな」

「……………どうして？」

「毎日お前が仕事や修行で頑張る姿を見て、そんなバカな考えも無くなったんだ。何より、私を使わなかった本当の理由も聞いたしな」

「

……………」

「そういうもんだ。私だって、お前を憎いつて思ったんだ。けどそれは、お前とは違って、自分にとって都合が悪かったからだ。けどお前は、自分のことじゃ絶対に怒らない。さつきも言ってたけど、慣れちゃったからな。なのに、あの二人への観衆の態度には激怒した。初めてだったんだろう？ 自分以外の誰かが傷つくのを見るの」

「……………」

……………ええ。その通りです。

毎日自分ばかりを傷つけられ、始めこそどうして私ばかりがこんな目に、そう思い、多くの物を憎みました。しかし、それに慣れてしまい、感じなくなつた。こんなこと、私以外の人間にあつてはならない。だからせめて、私だけは多くの人々への思いやりを、そう考え、怒りも、憎しみも捨てた。

しかし、捨てたのは、いや、捨てることができたのは、自分に対

してのそれだけ。

「皮肉な話ですね。誰かのことを思いやると言っておきながら、他人が苦痛に耐える姿を見たことが無い。見たことが無いから、初めてみた瞬間不快に感じた」

「まったく。どこまで私と言う男は……」

「最低だ。何が人を思いやるだ。初めからそんなこと、出来るはずが無かったのに……」

自分の苦痛ばかりを見て、他人の苦痛を知らずに、何をバカなこととを……」

「そんな純粋なお前だからこそ、私達は仕えたいって思ったんだぜ」

シエンの声が聞こえました。顔を見ると、笑っていた。後ろにいる五人も、笑っている。

「誰かを思いやる事が出来ない？ バカ言うなよ。お前ほど誰かを思いやれる人間はいねーよ」

「……なぜ、そう言えるのです？」

「例えばさ、さっきの話。お前は五人に勝って、私と戦えるようになるまで、自分には私を使う権利は無い。そう思ったって言ったよな」

「それは……私の勝手な都合です」

「勝手でも何でも、お前はそうやって、必死で私を目指してくれた。それは、私に相応しい人間になりたいって、私のことを思いやつてくれたからだろう？」

「……」

「それだけじゃない。お前が決闘をしたキツカケは、親父さんに喜ばせたかったから。本当はそんなこと関係無く決闘をしたくてたまらない。なのに、自分以外の人達のためにずっと我慢した。けど、親父さんと決闘者になるって、その姿を見せてやるって約束して、やっと決闘に手を伸ばせた。全部自分じゃなくて、誰かのためにや

ってる。他人を思いやれない人間が、そんなこと出来るかよ」

「……」

「お前はいつだってそうだ。自分のためじゃない。いつだって誰かのために戦ってる。人にはとても優しく、自分には最高に厳しくいられる。そんなお前だから、私達は仕えたくなくて姿を現したんだ。お前を、守りたいって思ったから」

「……」

「お前が、怒ることに否定的なのはよく分かった。怒ることが怖いって思うのも分かった。けどな、怒ることだって大切なんだ。それが他人のためだって言うのならなお更だ。お前は今までずっと、人に優しくいられた分、もっと怒ったって罰はちは当たらねーよ」

「シエン……」

「それでも怖いって思うなら、私達がそばにいてやる。誰かのために戦いたいのなら、私達が力を貸してやる。お前は私達の主なんだ。だから胸を張れ。どんな理由であれ私達を頼れ。どんな時だって、私達が支えてやる」

「……」

言葉が出なかった。

嬉しかった。

否定することしか出来なかった、否定されることしか知らなかった私を、この人達は、正面から肯定してくれた。そして私を、主だと言ってくれた。自分達を頼れと、言っ下さった。

今この瞬間、私はようやく、あなた達の主となれた。

ようやく、あなた達と戦う、本当の権利を得ることが出来た。

あなた達と共に立つ、資格を得ることが出来たのですね。

嬉しくて、思わず目の前の、シエンに抱き付いてしまった。また年甲斐も無く、誰かに甘えたい、そう感じてしまった。

「……私と共に……これからも共に……戦って、くれますか？」

「ああ、任せる。これからも、一緒に戦っていこうぜ」

シエンの言葉を聞いた直後、触れることは出来ませんが、カゲキ、シナイ、ミスホ、エニシ、キザン、五人の温もりも感じた。

精霊に触れたのは初めてですが、こんなにも暖かかったのですね。

あなた方が共にいれば、私は何も怖くない。

共に行きましょう。今はまだ形すら見えぬ、しかし確かに存在する、私達の目指すべき場所へ。

第五話 開幕、デュエル・オブ・フォーチュンカップ（後書き）

お疲れ〜。

シエンのシンクロ口上、考えるのかなり苦労したんだが、どうかな？
ひよっとしたら今後ちよつとずつ変化するかも分らないけど、まあ気にするな。

ほなオリカ。

『L Rロールシャッター』

光属性 魔法使い族

攻撃力1200 守備力1200

このカードが相手モンスターを戦闘破壊した時、相手のデッキの一番上のカードをめくり、お互いに確認する。

その後、めくったカードをデッキの一番上に戻す。

微妙としか言えん。攻撃力低いし、めくっただけでそれをどうこう出来るわけでも無いし。
使い道としては『徴兵令』とのコンボくらいかな。だとしても打点が低すぎるわ。

『真相へと導く光』
通常罫

相手はデッキからカードを5枚墓地へ送る。

その後、相手はカードを1枚めくり、お互い確認した後で手札に

加える。

相手にもよるけど、相手を喜ばせる結果にしかならないと思うのは俺だけか？

墓地を五枚肥やす上に一ドローですよ奥さん。

詳しくは言えんが、ぶっちゃけ大海のデッキに使われたらウハウハだよ。

『ゲシユタルト・トラップ』

通常罠

このカードは装備カードとなり、相手モンスターに装備する。

装備モンスターは攻撃力、守備力が0となり、効果は無効化される。

一応、『デモンズ・チェーン』の上位互換と呼べるのかな。攻撃力0に出来るから今回も相手がシエンじゃなきゃ迎撃できてたことだし。かなり便利と言ってもいいと思う。

こんなもんか。んじゃ、次もなるだけ早く上げれるよう頑張るよ。

それまで待っててね。

第六話 花と花を摘み取る者（前書き）

こっちじゃお久〜。

今回も、例によって決闘無し这回ですじゃ。

決闘を待ってる人がいれば、少々待ってておくんなんし。
ほなまあ行ってらっしゃい。

第六話 花と花を摘み取る者

視点：梓

「はあ……はあ……」

今日も、シエンを前に刀を構えている。昨日ようやく彼のもとへ辿り着いた物の、彼を超えることはまだまだ不可能のようです。

「くう……まだ、勝てないのか……」

「よく言っぜ。俺以外は五人がかり相手でも勝っちゃってるって言うのに」

……シエンの言う通り。

私の後ろには、鎧を着たキザン達五人が座り込むか、寝転がっている。彼と対峙する前に、五対一をお願いし、そして倒した直後なのです。

「……まさか、五人がかりでも負けちゃうとはな……」

「梓って本当に人間？ 短期間で強くなりすぎじゃない……？」

「彼自身の努力もあるでしょうけど、ここまでの力はさすがに想定外……」

「悔しいが、俺達五人じゃ勝てなくなっちゃったな」

「……これが、私達の主の覚悟か……」

「まだダメです。あなたを超えてこそ、主となる意味がある」

そして、昨日のシエンと同じ構えを作ります。

「ん？ おい、まさかお前……」

あまり話しかけないで頂きたい……集中できません……

「……マジかよ、昨日一度見せただけだぜ」

「おいおいおいおい！」

「ちよっと、いくら何でも……」

「まさか、本当に!」

「やるつもりなのか? 私達にも出来ない、シエンだけの技だぞ!」
「だが、梓ならあるいは……」

「……」

……

……!

「はあああああああ!」

ドオン!!

……

「大丈夫か?」

……シエンの呼び掛けに、どうにか頷く。

私の放ったそれは、見当違いの方向に飛んでいった拳句、体ごと吹き飛ばされ地面が大きくへこんでいます。

「にしてもすげーな。たった一度見ただけでそこまでマネ出来るなんてよ」

「……すみません……あなたの技なのに……」

「謝ることねーよ。教えてやるって言っただろう。けど、この調子なら俺が教えなくてもすぐに出来るかもな」

そうなれば良いのですが……

……ダメですね。一度出しただけで、体力が……

「帰るか?」

……素直に頷きます。今日は、これ以上は不可能です……

「立てるか? 無理なら送ってってやるが」

「……」

私は腕に力を込め、刀を杖に、どうにか立ち上がりました。

「また、明日の決闘でも……」

「そのことなんだがよ……」

急に、シエンは深刻な顔を見せました。

「はい？」

「あの、『十六夜アキ』だっけ？ お前、止めた方が良いんじゃないか？」

何を言い出すかと思えば……

「冗談のつもりですか？」

たとえシエンと言えども、言つて良い冗談と悪い冗談がありますよ。

「冗談に聞こえるのか？」

……

「本気で言っているのですか？」

「ああ。あいつはやばい。決闘が強いのは当然だが、それ以前に……」

「実際に私が傷付けられるから止めておけ、そう言いたいのですか？」

「ま、そういうこつた」

そんな弱気なことを。

「あなた方も同じ意見なのですか？」

後ろで座り込んでいる五人に話し掛けました。

「……そうだね。彼女には、何か不吉な物を感じるんだ。精霊の力を引き出している訳でも無し、あんなマネができるなんて」

「正直、私達も、彼女と戦うのが怖いのです」

そんな……あなた方が怖いと……

「……では、一つだけ聞かせて頂きたい」

「あん？」

「確かに彼女の力は強大だ。私とて、無事に済むかは分かりませんが、分かりませんが、私がそう簡単に倒されてしまう人間に見えますか

「？」

「……」

「……」

『……』

『見えない！』

「でしょう」

そう言うと、六人とも笑いしました。

「そりゃそうだな。決闘以前に、これだけ強いお前が、簡単にやられる奴じゃないか」

そうですねよカゲキ。私はあなた方にも勝っているのです。

「むしろ、あのくらいで倒されちゃう君の姿なんて想像もできないよ」

そうですねシナイ。自分で言うのも何ですが、私は強いのですよ。

「いらぬ心配をしてみましたそうですね。そうですね。梓は無敵です。無敵は言い過ぎかもしれませんが、ミズホ、心配は無用です。

「何より、俺達だっているんだ。俺達が梓を守ることできる」

エニシ。心強い言葉です。

「……主がそう言う以上、私達が恐れる物は無い。共に戦える」キザン。ええ。私も、あなた方がいれば何も怖くありません。

「悪かったな。私としたことが、あの程度のことではビビっちゃまってよ。梓なら大丈夫だな」

良いですよシエン。あなたも、私のことを思っていて下さったのですから。

「確かに、彼女は強い。そして危険かもしれない。私も全く怖くない訳でもありませんが、あなた方がいるから、恐れず立ち向かえる」

『……』

「私はあなた方の主。あなた方と共に強くある人間です。あなた方が恐れるなら、私を頼れば良い。私も、あなた方を頼っているから戦える。互いに支え合えば良いのです。私達は、友なのですから」

「友……」

「ええ。友です」

『……………』

「何だか新鮮な感覚だ。今まで僕達を、そんな風に思ってくれる人なんていなかったのに」

「友か……それも良い」

「分かった。もう止めねーよ」

分かって下さいましたか。

「じゃ、今日はもう帰んな。体が限界だろう」

「ええ。そう致します」

ずっと立っていました、正直もう限界です。

いつも通り刀を杖に、どうにか歩いて精霊世界を後にしました。

……

……

……

「家元」

今日も、大谷さんの声で目が覚めました。

「おはようございます」

挨拶をしながら体を起こします。

「家元、実は少し言い辛いことなのですが……」

……ああ、何となく分かりました。

「今日の試合……」

「棄権は致しませんよ」

「……やはりそうでしょうね」

「分かっていたのならわざわざ言わずとも良いでしょう」

「そうはいきません。家元をお守りするのも私の務めです。せん越ながら、『黒薔薇の魔女』について、私なりに調べさせて頂きました」

調べた？

「私は決闘は分からないので知りませんが、彼女は『ダイヤモンドエリア』において、あのダメージを実体化させる能力を使い、多くの決闘者を痛めつけてきたそうです」

「……」

「中にはそれが原因で入院し、意識不明になった者もいると」

「……」

「お分かりでしょう。もし、家元もその方々と同じように……」
「なるとお思いですか？」

大谷さんが言い切る前に、六人にしたのと同じ質問をしました。

「私が、そう簡単にやられてしまう人間に見えますか？」

「家元……あなたは確かに強い。しかし、それは決闘^{デュエル}と、決闘^{けつとう}においてのこと。あのような異質な力に対しては……」

「大谷さん！」

大声を上げてしまったことで、大谷さんは目を見開きました。

「異質とは何ですか？ 彼女が普通ではない、そう言いたいのですか？」

「……ええ、その通りです。はっきり言って、彼女は普通の人間ではない。ほとんど化け物じみた……」

バチッ

思わず手が出てしまいました。

「……手を出したことは謝罪します。しかし、あなたは今、人として言うてはならないことを言いました。決して許されないことを」

大谷さんはまだ驚いた様子で、私の顔をジッと見ています。私自身、訓練や修行意外で誰かを殴ったのは、実は初めての経験なので

す。

「私とて、彼女が普通ではないことは認めざるを得ません。しかし、いや、ならば私はどうです？」

「……！」

その問い掛けに、大谷さんはまた目を見開く。

「私とて、普通とは全く違う生き方をしてきた。普通なら文字を読める年齢で、一切の読み書きが出来なかった。普通ではないと認めます。しかし、少なくともこの家に来るまでは、それが私にとっての普通だった。あなた方が普通ではないと感じる事柄こそが、普通とは言えない方々にとっての普通であることくらい、分からないあなたでは無いはずだ」

「……」

大谷さんは何も言いませんが、私の顔をジッと見て、考えて下さっている。

「何が普通と呼べて、何が普通では言えないか、それに境界など無い。あつてはならない。なぜならどんな人も、そうやって生きているのです。だから、彼女を人として扱わない発言は、絶対に許しません」

「……」

やはり何も言いませんが、大谷さんは、頭を下げました。

「申し訳ありませんでした」

「……分かって下さったのなら良いです」

頭を上げましたが、顔色はあまり変わっていない。

「彼女が化け物だとはもう言いません。しかし、準決勝が危険であることもまた事実。家元が例え強くとも、それは変わりません。だから敢えてもう一度言わせて頂きたい。準決勝はどうか、棄権して下さい！」

心配して下さるのはとても嬉しいことですが、

「……私には、彼女の気持ち分かる気がします」

「分かる？」

「ええ。私も、大勢の人間から蔑まされた人間でしたから」

また大谷さんは目を見開きました。

「名前以外の蔑称で日々呼ばれ、人では無いように扱われてきた。当然です。私は元々ゴミだったのですから」

「家元、まだ自分をそのように！」

「事実です。私は親に、ゴミとしてサテライトに捨てられた存在です。ゴミの中から着る物と食糧を探しだし、十年間生きてきました。そんな生き物を、ゴミと呼ばずして何と呼びますか？」

「あなたは人だ！ 第一、たった今、人として扱わない発言は許さないと言ったではないか！」

「そうです。私のことは、どんな風に言い、扱おうと構わない。しかし、私の前で、私以外の誰かを傷つける発言は決して許しません」

「そんな……」

「もちろん、それであなたが怒って下さる気持ちも分かります。私のことを、それだけ思っただ下さっているのですから」

「家元……」

「先程言ったように、私には彼女の気持ち分かれます。私は未だ自分のことを、人に変わった生きたゴミ。そう思ってしまう。私がどこで拾われたかは知られていませんが、それでも、私の中で、私と言う生き物はゴミでしか無い。あの十六夜アキも、きっと似たようなことを思っているのだと思います」

「……」

「彼女が何を思い、決闘をするのか。何を思い、生きてきたか。何を思い、あそこに立っているのか。それはきっと、彼女の前に立てば分かること。彼女のことは放っておけない。とはいえ、私にはおそらく何も出来ることは無いでしょう。しかし、彼女の気持ちを感じることは出来る。決闘において何をすべきか、考えるのはその後からでも遅くは無い」

「……分かりました」

ようやく、大谷さんは分かったという顔をしてくれました。

「そこまでの覚悟がおりなら、私に止める理由はありません。ただ、絶対に無事で戻って下さい」

「もちろん」

「それともう一つ」

それは、今まで以上に真剣な顔でした。

「あなたが自分をどんな風に思おうと、私にとって、あなたは人だ。水瀬梓という、一人の人間だ。それだけは変わりません。あなたが自分をゴミだと思おうと、私のあなたに対する思いは変わることは無い。それだけは、覚えておいて頂きたい」

「……ええ。分かりました」

大谷さんの思いは分かっています。その気持ちだけで十分です。こんなゴミを愛してくれて、いつも感謝しているのです。

「それと、話しは変わるのですが……」

また急に顔が変わりました。

「何か？」

「実は家内で、あなたの急な活動の停止を不審に思っている者達があります……」

「……」

フォーチュンカップの開催中である三日間、私は出場するためにあらゆる教室を休みとし、その三日間は一切の約束を講じないよう手を尽くしました。教室の生徒や、その他の顔見知りの方々にも決闘のファンは大勢います。ですので、その間は全ての教室を休みにすると言った時、特に不審には思われず、むしろ喜んで下さる生徒達もありました。決闘に興味を持たない方々や、練習熱心な方々には疑問を持たれたようですが、さすがに決闘の人気は知っているため納得して下さいました。

とはいえ、さすがにそれだけの理由で休みにするのも、不自然に思われたようです。

「その方々は、何か詮索でも？」

「いえ。不審には思っているようですが、だから何かを調べようとしている動きは見られません」

「そうですか。このまま、フォーチュンカップが終わるまで何事も無ければ良いのですが」

「と言いますと、あなたは優勝を狙って……」

「もちろんです。ここまで来たのなら、頂点を狙わなければ嘘をつくことになる」

「確かに」

大谷さんは微笑んで下さいました。私の気持ちを察して下さいました。ようだ。

「では、すぐに着替えます」

「はい」

……

……

……

着替えも終わり、デッキの調整も済ませ、会場に向かっていきます。いつもは専用の運転手が運転するのですが、出場が漏れないよう大会中は大谷さんに運転をお願いしています。

ですが……

「家元……」

「分かっています。念のため、昨日より一時間早く家を出て正解でしたね」

家を出た時から、後ろに黒い車がついてきています。見覚えがあるのです。おそらくは親戚の誰かでしょう。

更にそれ以外にも、離れてもう一台。あれは見たことがあります。マスコミの力が借りて、私を陥れようとしているようです。

「どうなさいますか？」

「……仕方がありません。まずは構わず真っ直ぐ走っていただけますか」

「はあ、一体何を……」

「大丈夫です。私を信じて下さい」

少しだけ笑いながら、大谷さんに言いました。

思えば、私は彼らにずっと良いようにされてきましたが、私から何かをするのは初めてですね。

そう考えると、また私の中に年甲斐も無く、一種の悪戯心という物が湧いて参りました。

視点：女

まったく。何度思い出しても忌々しい……

どうしてあんな、どこの馬の骨とも分からない奴が、栄華ある水瀬家の頭首の座に着いているの……

そりゃ、あたしだってあいつの仕事ぶりは分かってるわ。少なくとも、あたし達の誰よりも努力して、仕事も多くこなして、水瀬家を先代の時以上に大きくした。お陰であたし達だって、それまで以上に贅沢な暮しができたし、仕事や事業に何の不自由もしなかった。けど、そのせいで職場ではあいつの話ばかり。顧客やお得意様と会話していれば、二言目には二十一代目頭首、あいつの話ばかりしてくる。あたしがあんな達のためにどれだけ苦労して、骨を折ってきたと思ってるのよ。そんなあたしが、どうして棚ぼたで頭首の座に着いた、あたしよりずっと年下なうえに赤の他人のクソガキの話をしなきゃいけないわけ？

……

ふざけんじやないわよ!!

あんたが水瀬家の正式な子供だつて言うならまだ我慢出来たわ！
けど、あんたは養子でしよう!! しかも捨て子じゃない!!
あたし達は由緒ある家系なのよ!! あんたが水瀬家の何だつて言
うのよ!!

歴代最高の神童!？ 拾われたばかりの時はひらがなの読み書き
も出来なかったガキが何言ってるのよ!!

歴代一の水瀬家の功労者!？ だったら今日まで頑張ってきた私
達は何なわけ!？

運良く先代に拾われて!!
才能に恵まれて!!

ちよつと努力と苦勞をただだけで簡単に地位を得て!!
五年間であんたが立てた地位に立つために、私達が何年間苦勞し
たと思ってるわけ!？

もう何度こう思ったかしらね…… 未だに怒りは治まらないわ……

ふざけるな……

ふざけるな……!

ふざけるな!

ふざけるな!!

ふざけるなああああ!!

ドン!!

怒りとイライラに、運転中だけど思い切りドアを叩いた。

あいつだけは、絶対に許さない。

水瀬家頭首から失脚させて、私達の感じてきた屈辱全部を償わせてやる！

失脚だけじゃ済まさない。何が何でもあいつの後で私が頭首の座に着いて、あいつを一生私の奴隷にしてやる。

飼って刈って狩って飼って、自分から殺して欲しいって言いたくなるくらい働かせて、殺して欲しいって懇願したら殺す。もちろん簡単には殺さない。

痛めつけて傷めつけて苦しめて、なぶっていたぶってもてあそんで、正気でいられなくなるまで遊んで楽しんで、そうやって勝手に死ぬまで殺す。死なない時は、あたし専用の肉人形にするのも悪くないわね。忌々しい奴だけど、顔だけは良いからね。

見てなよ水瀬梓。もうすぐで、あなたは頭首じゃない、水瀬家の奴隷になるからね。

あんな仕事だけは真面目なクソガキが、フォーチュンカップ中だからって三日間も休みにするなんて絶対におかしい。頭首のくせに去年の年末年始や、お盆の行事でもずっと仕事で顔を出さなかったような人間が、そんな下らないことで教室を閉めるわけが無い。

これはあたしの勘だけど、多分あいつは決闘のファンなんだ。いくら頭首って言っても、所詮は十六になったばかりのクソガキだからね。大きな大会が催されるって知って、今まですっと我慢してた好奇心を抑えられなくなつて、人知れず見に行ってる。大方そんな感じでしょう。証拠に昨日も家にいなかったし、今日は見張ってみればこの通り。こっちは思いつきり会場の方向よ。

けどね、あんたは水瀬家頭首なのよ。日本一、和の心を重んじてる一族の頭首が、そんな西洋被れの紙束遊びにうつつを抜かして良いわけ無いでしょう。まして紙束遊びなんて、子供か、いつまでも子供心の抜けないバカ共の遊び。頭首が興味を持っていいはずが無いわ。

どうしてそんな紙束遊びにプロなんてものがあるうえ、その一番強い奴がネオドミノシティの名物になってるのか未だに理解不能よ。見ているだけでイライラしてくる。あたしが頭首になったら、治安維持局を買収して、ネオドミノシティで、いいえ、日本で一切の紙束遊びを出来なくしてやるうかしら。キングとか言う奴を公衆の面前で殺して、もしやってる奴がいたら問答無用で国から追い出すか、殺すようにしてね。何が決闘よ。そんな物で遊ぶ時間があるなら働きなさいよ。

まあ、今はそんなことどうでも良い。とにかく、『水瀬家二十一代目頭首が、実は決闘にうつつを抜かす子供』。こんな面白い話には無い。あいつは大恥を搔いて、頭首の座を辞さずを得なくなる。そのため知り合いに頼んでマスコミまで呼んだんだから。仮にその勘が外れていたとしても、あいつを失脚させる特ダネさえ撮れればこっちの物よ。キツカケは何でも良いの。あいつを下ろして、殺すキツカケさえあればね。

フフフフフフ……

……

……

……

会場が見える場所まで来た。やっぱり目的は会場か。そう思ったけど、手前のカーブで曲がった。ちょっと、そっちは会場と真逆の

方向よ。勘が外れたかしら。

まあ、とにかく追いかけるしか無いわよね。そう思って、私もそっちへ曲がった。

バキバキバキ……

「うわ！」

キキーツ！！

目の前で、かなり大きな木が倒れていた。急ブレーキを掛けてギリギリの所でぶつからずに済んだわ。

「な、何なのこれ……」

目の前の大木を見ながら呟いた、その直後、

コンコン

車の窓を叩く音。そっちを見ると……

ちよつと……

「双葉さん、大丈夫ですか？ ケガはありませんか？」

水瀬梓……憎らしい顔が、こっちを心配そうに見つめてきてる。

腹が立つけど、無視するのも逆に怪しまれそうだし、仕方なく窓を開けて顔を出す。

「え、ええ。大丈夫」

「良かった。見覚えのある車だったので急いで引き返したのですが、本当に良かった……」

ちよつと、なに涙目なんて見せてるのよ。そんなことで……

「大丈夫ですか！？」

な！ あんた達まで出てきてんじゃないわよ！！

「あなた達は？」

「私達は、その……」

後ろの男をギツと睨みつける。余計なこと言ったら、間違い無く殺す……

「ああ、もしかして、お二人はマスコミの方々ですか？」

「え？ どうして……」

「以前取材を受けた時に見た覚えがありました。違いましたか？」

「いや、まあ、間違ってますが……／＼／＼」

なに赤くなってるのよ！ いくらこいつの笑顔が綺麗だからって

……

「実は、この先にある双葉さんの経営する料亭に行こうと思っただところなのです」

「は？」

あたしの料亭？

……あたしの仕事は料亭の経営。自慢じゃ無いけど、シティ内にはいくつもチェーン店を出してる。メニューも私が決めてるし、その材料をどこで取り寄せて、何を使うかとかも決めてる。確かに、私が女将と板長を兼任してる本店はこの先にあるけど……

「もしよろしければ、お二人もどうですか？」

「え？ いや、生憎料亭で食べられるようなお金は……」

「ご心配なく。私がお出します」

「良いんですか!？」

「ええ。一度行ってみたいくて、それに食事するなら、たくさんいた方が良いでしょうから」

……嘘ね。

あんたがあり得ないくらい小食なのはみんな知ってるわよ。

それが、私の店に来てみたかった？ 嘘にもほどがあるじゃないの……

「ありがとうございます!！」

けど、この二人はそんなことは知らないから簡単に信じてる。

ちよっと、目的を忘れてない？

「けど、あいにく予約するのを忘れてしまって、四人は入れますか？」

「は？」

その言葉で嘘が百パーセント確実にあった。あんたほどの男が、高級料亭に予約を入れ忘れるなんてこと、あるわけがない。

それが分かったのに……くそ！ ムカつくけど、仕方ないから今日のを確認する。

「……大丈夫。今なら四人、入れるわ」

いつも話す時も、露骨に嫌な態度は見せられない。あくまで冷静に、けなす時だってそうしてるしね。こんな奴に感情を逆なでされても仕方ないわ。

「良かった。では行きましょう。木は既に退かしてあります」

マスコミの二人が笑顔を見せる。

この役立たず共が……え？

「あ、え？」

見ると、さっきまで確かに道路を遮ってた大木が、道路の外に出てる。

「では、参りましょう」

二人は何も疑問に思わずはいはいついていった。く、もういいわよ

……

……

……

料亭に着いて、水瀬梓と秘書の大谷、そして役立たずのマスコミ二人。

「おい、水瀬梓さんだ……」

「うわあ、いつ見ても綺麗……」

「初めて生で見たわ……」

このクソガキと一緒に入っただけでそんな声。ここの主人はあたしよ。そのくらいあんた達も知ってるでしょうが……

「じゃあ、せっかくだから四人は特別席に連れて行ってあげるわ」

「ありがとうございます」

笑顔でお礼を言ってる。

言っとくけど、あんたにも、役立たず二人にも、ご馳走なんてしてやらないよ。捨てるはずだった使い物にならない食材使って、金だけは普段通り取ってやる。そのくらいは構わないわよね。本当なら毒を入れたいくらいなんだけど、ここで死なれても困るからね。

……

……

……

「さあ、出来たわよ」

注文された料理を、笑顔で持ってくる。普通なら料亭では料理は一品ずつ持ってくるもんだけど、面倒だから一度に持ってくる。こんなクソガキ共に礼儀を掛ける必要無いわよ。

「美味そう」

「これが高級料亭の料理か」

役立たず二人は普通に喜んで。さっさと食べてさっさと帰ってちょうだい。このクソガキに敷居をまたがせてるっただけで怖気が走るのよ。こいつらが帰ったらすぐに業者を呼んで掃除させないと……

「……妙ですね」

急に、水瀬梓が口を開いた。

「このお米、高級米にしては妙に香りが薄いですね。古いのではな

いですか？」

……は？

「この味噌汁も、鰹^{かつお}の出汁の香りがしますが、逆に香りがきつ過ぎます。これも随分古いようですが……」

え？ ちよ……

「このお豆腐も、お魚も、お豆も、色が普通の物よりもあせています。料亭なら捨てるべき食材のはずでは」

ちよっと！ 本当のことだからって何言ってるのよ！？

「まさか双葉さん、普段からこんな食材を使用して料理を作っているのですか？」

「はあ！？」

「ちよ、本当ですか？ 双葉さん？」

「マジで？」

二人の役立たずも興味を持ってきた。

「ちよっと、そんなわけ……」

「信じられない。私はあなたのお料理の腕は尊敬していました。なのにその腕で、捨てる食材を使用して、その上で格安というわけもなく、普通に料金を取っていたなんて……」

「そんなわけ……！！」

「うわ、マジかよ」

「信じらんねえ」

二人の役立たずが、悲しんでるクソガキを見ながらあたしを見ている。

ちよっと、あんた達が見るのはこいつでしょう！ 水瀬梓でしょうが……！！

「……すみませんが、私は帰らせて頂きます。正直、ショックが大き過ぎます」

何なのよ！！ これじゃあたし一人が悪者じゃない！！

「行きましょう。大谷さん……」

そう言って、大谷を連れて部屋を出て行こうとドアへ。

「そんなわけ無いでしょう!! 今日のはたまたま捨てる食材を多く使っただけよ!! 普段は少ししか使っらないわよ!!」

そう叫んだ直後、水瀬梓はドアを開いた。

「なっ!!」

そこには、常連さんを含む大勢のお客が。多分、水瀬梓見たさで覗いてた奴ら……

「マジかよ、捨てる食材って……」

「いつも楽しみでここに来たけど、そんなもん食わされたのか……」

「もうここには来ないようにしましょう……」

「ちょっと! 違う!!」

「双葉さん」

役立たずの声が聞こえた。何よ、その目は。

「水瀬梓さんの特ダネが撮れるって言うから来てみたけど、こんな特ダネが撮れるとは思いませんでした」

「ありがとうございます」

そう言っつて、部屋から出ていく。

「ぐう……梓さん!!」

叫んでクソガキの名前を呼んだけど、もうとっくにいなくなつてた。

「梓……クソガキ……んん!!」

ふざけんじゃ!!

「ないわよおおおおおおおおお!!」

……

……

……

視点：梓

これで、彼女の料亭は閉店せざるを得ない。シティ内の全てのチェーン店も閉店。最終的には、水瀬家から追われることになるでしょう。

しかし……

「やり過ました……」

自分でそうしておいて何ですが、今になって罪悪感が湧いてきました。

本来なら、道路の大木を斬り倒し、彼女の料亭に入って料理を食べた時点で、簡単な取材を受けてマスコミ達を返す予定でした。しかし、その料理があまりにも酷過ぎた。最初は今日だけ、私に対してだけだと思いましたが、あの香りや見た目は、昨日今日捨てる食材を扱って出せる物では無かった。普段から使用して、そのことをごまかすことに慣れていなければ出来るものではない。なので、つい口走ってしまった。

「気にする必要はありませんよ。双葉さんも自業自得です。実際に、あなたの言ったことをしてきたのですから」

「それに、双葉さんは確かに料理の腕前は一級で、普段は大変穏やかですが、気性の激しさは水瀬家でも有名でした。彼女を指摘した大勢の弟子達は、ほとんどが理不尽な理由で酷い扱いを受けました。そのせいで辞めていった料理人は大勢います。おまけに彼女の機嫌を損ねた弟子は、必ずと言っていいほど、二度と料理ができなくなるほどの大ケガを負っている。証拠は無くとも、彼女の仕業であることは疑いようが無い。彼女もその罰を受けるべきなのです。あなたに対する嫌がらせの分も」

……確かに、彼女にも、水瀬家に来たばかりの頃から様々な嫌がらせを受けてきました。

しかし、やはりその仕返しという形となると、良い気持ちはしない。

「やはり、納得できませんか？」

「……そうですね。あそこまでする必要が本当にあったのか、どうしても疑問に感じます。どれだけ酷いことをしてきたとしても、それが彼女のあり方。私にそれを否定する権利は無いのですから」

「……きつと、彼女はあなたを一生許しはしないでしょう。しかし、あなたは彼女の全てを許してきた。周囲の人間に許されず、自分自身も許すことが出来ず、それでも全員を許し、ゆえに大勢の人間に許されてきたあなたと、決して許されないことをしてきたにも関わらず、そんな自分だけは許し、一人を許すことも出来ない双葉さん。その差はこれほど大きいということです。人や、自分を許すということは、それほどの違いをその個人に与えるということです。今のあなたと、今の双葉さんがそれです」

「……私一人が許しても、それは無意味と言うことですか？」
「残酷ですが、それが現実なのです」

……

これも、仕方ないという一言で済ませて良いことなのか……
ああする必要は、本当は無かったのではないか……

周囲に許されない行為。それは、周囲に許されなければならない。それは分かっています。だから、私もずっと自分を許せなかった。水瀬家の人々に、許されなかったから。

それでも、教室の生徒達や、大谷さん、お父さんが許してくれた。だから今日まで生きてこれた。

皆さんに許された私と、自分だけを許していた双葉さん。その差とは一体何なのでしょう。

「……」

いくら考えても分からない。

それでも、彼女が私を一生恨むと言うなら、私はそれも受け止めます。

世の全員が双葉さんを許さずとも、私一人は許します。それしか、私が彼女へ償いとして出来ることは無いのだから。

だから、双葉さん。私のことは、どうぞお気の済むまでお恨み下さい。全て受け止めますから。何をされても、私だけは、あなたを許しますから……

……

……

……

会場に着き、今回も誰にも顔を見られないよう個人用控室へ。

昨日はいつもの着物で決闘場に立ちましたが、双葉さん以外にも私を疑っている者がいる可能性は高い。そうになると、この着物はやはり目立ちますね。見る人が見ればそれだけでばれてしまいかねません。

仕方が無いので、般若の面だけは変えず、服装を変えることにしました。

もっとも、これも少しのごまかしに過ぎませんが。

第六話 花と花を摘み取る者（後書き）

お疲れ〜。

梓ほどで無いにしろ、大勢の人間から存在を許される人間になりた
いもんだよね。

自分で自分を許せるようになるほど、簡単で難しいくせに無意味な
ことも無いし。

周りに許してもらうのが確実だよ。一番大変だけど。
じゃ、次話が決闘だから。待っててね。

第七話 『黒薔薇の魔女』 対『静かなる花』 ～静花～（前書き）

第七話）。

なお、この決闘ではかなりのカードが原作効果になってますゆえ先に謝罪。後書きで説明するから、ん？ と思ってもスルー願う。じゃ、行ってらっしゃい。

第七話 『黒薔薇の魔女』 対『静かなる花』 静花

視点：外

熱気と興奮。好機と激情。

相変わらず、この空間を支配しているのはそれらの感情だった。巨大なスタジアムの円を中心に、その外側の巨大な円の中に集まった人々の視線、表情、そして歓声。

それが一つとなり、中心の巨大な円、決闘リングにぶつけられている。

『二回戦第二試合！ 決闘者は、この二人だー！！』

MCの言葉と同時に、前回と同じように床がせり上がった。そしてそこに、二人の影。

『一回戦の衝撃が未だ生々しい！ 圧倒的な力で一回戦を勝利した美少女！ 『黒薔薇の魔女』、十六夜アキ！！』

十六夜アキ、その紹介と同時に、会場からは直前までとは違う声が響く。

「帰れー！！ 魔女めー！！」

「魔女が出てくるんじゃないー！！」

「引つ込めー！！」

昨日の一回戦で、彼女の決闘を見た者は皆、彼女のことを攻め立てていた。彼女と決闘したことで重傷を負った決闘者を思っただけ、その衝撃に巻き込まれた自分達の都合か、はたまたこれもただの道楽や次鯉満足か、理由はどうあれ上げ、彼女を罵倒する者達。

ただ、それらの野次罵倒にも、彼女の表情には一切の変化は見られない。

『対するは、こちらも一回戦を圧倒的な力でワンターンキルを行った、「サイレントフラワー」、静花!!!』

「おお！ 昨日とは服装が違う！」

「昨日は着物だったけど、今日はカジュアルなのか」

静花の登場と共に、そんな声が聞こえた。般若の面だけをそのままに、紫の着物から、紫のワイシャツと革のズボンという外見へ変わっていれば、それも当然の反応と言えるだろう。だが、それ以上に、

「頼んだぞ静花ー!!!」

「魔女を倒せー!!!」

「いつそ殺せー!!!」

目の前のおぞましい生物を抹殺して欲しい。自分達の前から排除して欲しい。

そんな共通の思いを、目の前の人間に押し付ける形となる叫び。

普通の人間なら、そんな声だけで間違いなく不快な気分となる呼び掛けの嵐。だが静花の場合は、般若の面をしていることから、その表情は全くうかがえない。

『さあ行くっ！ 決闘スタート!!!』

『決闘』

静花

LP:4000

手札：5枚
場：無し

十六夜

LP：4000

手札：5枚

場：無し

「私の先行、ドロー」

静花

手札：5 6

「……永續魔法『六武衆の結束』。フィールド上に『六武衆』と名の付くモンスターの召喚、特殊召喚に成功する度、最大二つまで『武士道カウンター』をこのカードに乗せる。『真六武衆・シナイ』を守備表示で召喚」

『真六武衆・シナイ』

レベル3

守備力1500

『六武衆の結束』

武士道カウンター：0 1

「そしてこのカードは、場に『真六武衆・シナイ』がいる時、手札より特殊召喚できる。『真六武衆・ミズホ』を特殊召喚」

『真六武衆・ミズホ』

レベル3

守備力1000

『六武衆の結束』

武士道カウンター：1 2

「『六武衆の結束』を墓地へ送り、このカードに乗った武士道カウンターの数だけカードをドローする。武士道カウンターは二つ。よって二枚ドロー」

静花

手札：3 5

「カードを二枚伏せる。これでターン終了」

静花

LP：4000

手札：3枚

場：モンスター

『真六武衆・シナイ』 守備力1500

『真六武衆・ミスホ』 守備力1000

魔法・罫

セット 2枚

(二人とも守備表示とは、らしくありませんね)

(私とて、攻めることしか考えていないわけではない)

(まあ、君がそうしたいなら、僕らは従うさ。何より、僕もミスホとは同じが良いしさ)

(もう、シナイったら／＼／＼)

(あはは……)

(…………あの二人、決闘中なのにイチャついてる…………)

「どうした？ 龍可？」

「何でも無い」

「…………私のターン」

十六夜

手札：5 6

「…………フィールド魔法『ブラック・ガーデン』を発動」

十六夜のカード発動と同時に、二人の立つ空間は一回戦と同じ、ドーム状に広がる赤黒いバラと鋭い茨いはらに囲まれた。

「速攻魔法『偽りの種』。手札から、レベル2以下の植物族モンスターを特殊召喚する」

(…………彼女の狙いは…………)

「速攻魔法『サイクロン』。『ブラック・ガーデン』を破壊」

彼女がモンスターを特殊召喚する直前、カードを発動し竜巻が起こる。その竜巻に、薔薇と茨は巻き込まれ、空中へと飛ばされた。

「…………『イービル・ソーン』を特殊召喚」

『イービル・ソーン』

レベル1

攻撃力100

「『イービル・ソーン』の効果を発動。このカードをリリースし、相手に300ポイントのダメージを与える」

『イービル・ソーン』の楕円部分が暴発し、そこから針が四方に飛散する。その一部が、静花の顔目掛け飛んできた。

「……」

しかし、静花は軽く頭をずらすことで顔への針を避け、残りは全て、当たる寸前指で受け止め防いだ。

静花

LP：4000 3700

「きゃー！！」

「うおー！！」

「……っ！」

針の飛散は客席にまで広がっていた。観客達から悲鳴が上がる。それに静花は、慌てて後ろを振り返った。

「その後、デッキから二体までの『イービル・ソーン』を、効果を無効にし特殊召喚する」

『イービル・ソーン』

レベル1

攻撃力100

『イービル・ソーン』

レベル1

攻撃力100

周囲の被害など構わず、十六夜は淡々とプレイを続ける。

「魔法カード『フレグランス・ストーム』。フィールド上の植物族モンスターを一体破壊し、カードを一枚ドローする。『イービル・ソーン』を破壊し、一枚ドロー」

十六夜

手札：2 3

「……ドローしたカードは、植物族モンスター『ローズ・テンタクルス』。ドローしたカードが植物族だった時、お互いに確認することでもう一枚ドロー出来る」

十六夜

手札：3 4

「ドローしたカードは『薔薇の妖精』。このカードはカード効果によって手札に加わった時、フィールドに特殊召喚できる」

『薔薇の妖精』

レベル3

守備力1200

「そして、永続魔法『アイヴィ・シャツクル』を発動。私のターンの間、お前のフィールドのモンスターは全て植物族となる」

十六夜が説明を終えた瞬間、二人の真六武衆の足元からツタが伸び、体に絡みついた。

「最後の『イービル・ソーン』をリリース。『ローズ・テンタクルス』をアドバンス召喚」

『ローズ・テンタクルス』

レベル6

攻撃力2200

「バトル。『ローズ・テンタクルス』は、相手フィールド上の植物族モンスターの数だけ攻撃できる。『真六武衆・ミズホ』に攻撃。」

ソーン・ウィップ1」

巨大な薔薇の怪物が、タコ足の如くツルを伸ばし、ミスホを破壊した。

「『ローズ・テンタクルス』が植物族モンスターを破壊した時、相手ライフに300ポイントのダメージを与える」

「……」

ミスホの破壊と同時に、巨大なツルが静花目掛け飛ぶが、それもまた静花は静かに避ける。

静花

LP：3700 3400

「シナイに攻撃。ソーン・ウィップ2」

「……」

静花

LP：3400 3100

「カードを伏せ、ターンエンド」

十六夜

LP：4000

手札：0枚

場：モンスター

『ローズ・テンタクルス』 攻撃力2200

『薔薇の妖精』 守備力1200

魔法・罫

永続魔法『アイヴィ・シャックル』

セット 1枚

静花

LP：3100

手札：3枚

場：モンスター

無し

魔法・罫

セット 1枚

「……この決闘で、傷つくのは私だけで良い」

静花が呟くように話し掛ける。面によって表情は読めないものの、その口調には明らかな怒気が含まれている。

「……それはあなたの都合よ」

「……私のターン」

静花

手札：3 4

「永続魔法『六武の門』。六武衆と名の付くモンスターの召喚、特殊召喚に成功する度、このカードに『武士道カウンター』を二つ乗せる。『真六武衆・カゲキ』を召喚」

『真六武衆・カゲキ』

レベル3

攻撃力200

『六武の門』

武士道カウンター：0 2

「『真六武衆・カゲキ』は、フィールドにカゲキ以外の『六武衆』

と名の付くモンスターがいる時、攻撃力を1500ポイントアップさせる。更にカゲキの召喚に成功した時、手札の六武衆を特殊召喚できる。『真六武衆・エニシ』を特殊召喚」

『真六武衆・エニシ』

レベル4

攻撃力1700

『六武の門』

武士道カウンター：2 4

『真六武衆・カゲキ』

攻撃力200+1500

「ここで『六武の門』の効果。武士道カウンターを四つ取り除き、デッキから六武衆と名の付くモンスターを手札に加える。『真六武衆・キザン』を手札に」

『六武の門』

武士道カウンター：4 0

静花

手札：2 3

「そして、このカードはキザン以外の六武衆が場にある時、特殊召喚可能」

『真六武衆・キザン』

レベル4

攻撃力1800+300

『真六武衆 - エニシ』

攻撃力1700 + 500

『六武の門』

武士道カウンター：0 2

「エニシとキザンは、同名カード以外の六武衆と名の付くモンスターが二体以上存在する時、エニシは500ポイント、キザンは300ポイント攻撃力をアップさせる。更に『六武の門』の効果。武士道カウンターを二つ取り除き、エニシの攻撃力をエンドフェイズまで500ポイントアップさせる」

『真六武衆 - エニシ』

攻撃力1700 + 500 + 500

「バトル。『真六武衆 - エニシ』、『ローズ・テンタクルス』を攻撃。斬光閃ざんこうせん」

「.....」

十六夜

LP：4000 3500

「『真六武衆 - カゲキ』、『薔薇の妖精』を攻撃。雷刃四方破斬らいじんしほうはせん」

「.....」

「『真六武衆 - キザン』、『ダイレクトアタック。漆凱の剣勢しつがいけんせい」

十六夜

LP：3500 1400

「ターンエンド」

静花

LP：3100

手札：2枚

場：モンスター

『真六武衆 - カゲキ』 攻撃力2000 + 1500

『真六武衆 - エニシ』 攻撃力1700 + 500

『真六武衆 - キザン』 攻撃力1800 + 300

魔法・罫

永続魔法『六武の門』 武士道カウンター：0

セット 1枚

十六夜

LP：1400

手札：0枚

場：モンスター

無し

魔法・罫

セット 1枚

「いいぞー！！ 静花ー！！」

「そのままやっちまえー！！」

「魔女を倒せー！！ ぼこぼこにしてやれー！！」

静花の優勢に、観客は直前までの恐怖が嘘のように、新たな熱気に包まれた。

そしてその様子に、無言でほくそ笑む二人。

「よろしいのですか？ あまりにも一方的な展開ですが」

「彼女はシグナーです。この程度で終わるはずがありません」

「……皮肉な物だ」

「……？」

「お互い、仮面で素顔を隠す者同士、なのに反応はここまで違う。何があなたをそうさせた？ 今見せているその顔も、あなたの真の顔ではない。そうですね」

「……私のターン」

十六夜

手札：0 1

(……応えてはくれませんか……)

十六夜のカードドローと同時に、『アイヴィ・シャックル』の効果
果が適用され、三体の真六武衆に再びツタが絡みつく。

「二枚目の『フレグラン・ストーム』を発動する。フィールド上の
植物族モンスター一体を破壊し、カードを一枚ドロウ。破壊する
のは、お前の場の『真六武衆・エニシ』」

(くっ……このカードの発動は、まだ早い)
「すみません。エニシ……」

十六夜

手札：0 1

「ドローカードは植物族モンスター『ロードポイズン』。よって更
に一枚ドロウ」

十六夜

手札：1 2

「…………チューナーモンスター、『ナイトローズナイト夜薔薇の騎士』を召喚」

『夜薔薇の騎士』チューナー

レベル3

攻撃力1000

(チューナー…………来るか)

「更に、『夜薔薇の騎士』の召喚に成功した時、手札からレベル4以下の植物族モンスター一体を特殊召喚できる。『ロードポイズン』を召喚」

『ロードポイズン』

レベル4

攻撃力1500

「……………」

「レベル4の『ロードポイズン』に、レベル3の『夜薔薇の騎士』をチューニング……………」

十六夜の静かな詠唱。それと同時に、『夜薔薇の騎士』は三つの星に変わり、同時に光る『ロードポイズン』を包む。

「冷たい炎が、世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け……………」

「シンクロ召喚。現れよ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』」

薔薇の花弁が幾つも重なって出来たような、真っ赤な翼を広げ、高らかな咆哮を上げながら、その竜は姿を現した。

『ブラック・ローズ・ドラゴン』

レベル7

攻撃力2400

(グオオオオオオオオ！！)

『ブラック・ローズ・ドラゴン』。その降臨は、同時に会場を嵐で包んだ。

「きゃあー！！」

「うわあー！！」

「ぐっ……！！」

「くう……！！」

「痛い……！！」

そしてそれは同時に、別々の場所にいる三人の人間に、同じ反応を示させた。

「……………」

だが、ほとんどの観客が脅え、体を小さくする中、たった一人、静花は仁王立ちのまま、静かに『ブラック・ローズ・ドラゴン』を見据える。

「……………そうですか。この竜は……………この竜こそが、あなたの悲鳴なのですね」

「……………！！『ブラック・ローズ・ドラゴン』の効果、このカードの特殊召喚に成功した時、フィールド上のカードを全て破壊する。ブラック・ローズ・ガイル」

十六夜の宣言に従い、『ブラック・ローズ・ドラゴン』は更に翼を広げる。そこから更に巨大な風が巻き起こった。

「その効果の発動を待っていました。罨発動『六尺瓊勾玉』むさかにのまがたま」
静花の宣言、その直後、『ブラック・ローズ・ドラゴン』の頭上に勾玉が現れた。それを見ながら『ブラック・ローズ・ドラゴン』は、翼をたたみ、静かに消えていく。

「これは……」

「カウンター罨『六尺瓊勾玉』むさかにのまがたまは、自分のフィールド上に六武衆と名の付くモンスターが存在する時、カードを破壊する効果を無効にし、それを破壊するカード。よって、『ブラック・ローズ・ドラゴン』の効果を無効にし、破壊しました」

「……」

「すげー！ やりやがったー!!」

「魔女の操る竜を倒しちゃったー!!」

「そのまま魔女を、化け物を倒せー!!」

「……」

相も変わらず、観客達からは十六夜を否定する言葉の山。

それを聞きながら、静花はゆっくりと足を、肩幅に開いた。そして、

ズバァ

実際に音がしたわけではない。しかし、ここにいる誰もがそんな擬音を耳に感じた。

静花が足を開いた瞬間、静花の後ろの足元から、観客席の最前列にある高い仕切り、その頂点に至るまで、まるで地面がぱっくりと裂けたような跡が生まれた。そしてその数秒後には、それが静花の仕業であると誰もが理解する。なぜなら静花の手には、先程までその存在を認知できなかった、そもそも存在自体考えてもいなかった、鞘に収まった長く伸びる日本刀が握られ、その柄には、静花の右手

が添えられていた。

「少し黙っていて下さい」

それは、面によって声がかもり、雰囲気は静かながら、声量のあ
る、会場中に響く、威圧感を感じさせる声。

「私は、十六夜アキと決闘をするためにここ立っている。あなた方
の言う、魔女を倒すためにここ立っているわけではない。彼女のこ
とを否定することしか考えないあなた方に、応援される筋合いは無
い。これ以上の彼女への暴言は、私に対する暴言でもあると受け取
ります。彼女ほどでは無いにしろ、私にも多少の力があります。こ
の会場を、あなた方もろとも破壊する程度には」

絶大な説得力。絶大な圧力。絶大な恐怖。一瞬にしてそれらが会
場を支配した。静花の言葉に、刀に、そして割れた地面に、誰もが
同じ思いを心に抱いた。

この男を怒らせてはならない。

この男に逆らってはならない。

この男なら真にやりかねない。

この男はハツタリを言わない。

敢えて言葉にする必要は無い。それらの言葉が一瞬にして本能に
刻み込まれ、恐怖として、会場全体に伝染していった。

「……ようやく静かになりました。まだあなたのターンです」

「……なぜ？」

突然、十六夜が咳くように尋ねた。そもそも今の静花の言葉には、
ある意味観客達以上に、十六夜自身が驚いていた。

「……私達の決闘を邪魔されなくなかった。それだけのことです」
「……」

十六夜はまた無言になった。だがすぐに静花を見据える。

「この瞬間、畏カードを発動する」

「罨……しまった！」

「永続罨『ウィキッド・リボーン』。800ポイントのライフを払い、墓地のシンクロモンスターを特殊召喚し、このカードを装備する。この効果で特殊召喚したモンスターは、このターン攻撃することはできない。『ブラック・ローズ・ドラゴン』を特殊召喚」

十六夜

LP：1400 600

『ブラック・ローズ・ドラゴン』

攻撃力2400

(グオオオオオオオオ！！)

再び咆哮を上げる黒薔薇の竜。それはまるで、先程墓地へ送られたことでの怒りの慟哭のようだった。

「特殊召喚に成功したことで、『ブラック・ローズ・ドラゴン』の効果を発動。ブラック・ローズ・ガイル」

また暴風が巻き起こる。先程のように観客席からは悲鳴が上がり、静花はただ仁王立ちでいる。だが、面に隠れながらも、彼の中の焦りは間違いなく表に現れていた。

バキバキバキ……

突然、後ろからそんな音が聞こえた。振り返ると、先程静花の斬り裂いた床がせり上がり、鉄の地面が剥がれかけている。そして、

バキイ

鈍く響く音と共に、鉄の床が剥がれ、暴風に巻き上げられた。

「っ！」

静花は誰よりも早く反応した。そして、決闘をそのままに、巻き上げられた鉄の板に向かって走る。

地面を蹴り、壁を蹴り、客席前の仕切りを蹴り、鉄に向かって飛び上がり、刀を抜いた。

スパア

また、実際に音がしたわけではないが、全員が聞こえた気がした。そして、それを感じた時には、観客に向かって落ちてくるはずだった鉄の板はこま切れにされ、会場の元ある床へと流れるように落ちていく。

その直後、静花が観客席に降り立った。

「ケガはありませんか？」

先程、自分達を脅迫した男には似つかわしくない言葉。しかし、その男は今や、自分達を救った英雄と化している。そんな現実に、誰一人として応えを返すことが出来ず、ただ呆然と静花を見ていることしか出来ない。

「……」

ピシッ

観客を見降ろしながら、そんな音が、静花の耳の随分と近くから聞こえた。

「……」

一瞬のうちに、それが何の音か理解した静花は面に手を添え、その感触を確かめる。

（今の衝撃でヒビが……まあ良い）

静花は再び決闘場へと舞い降りた。そして、一瞬のうちに元いた場所へと移動し、十六夜と向かい合う。

「御覧の通り、彼らには一切のケガを負わせません。だから、全力で来てください」

「……」

「もつと語り合いましょう。私は、本当のあなたを知りたい」

また十六夜は呆然としていたが、またすぐに決闘に目を戻す。

「このエンドフェイズ、『ウイキッド・リボン』の効果以外で特殊召喚されたシンクロモンスターが破壊されたことで、同じシンクロモンスターを墓地より特殊召喚できる。『ブラック・ローズ・ドラゴン』、再び特殊召喚」

(グオオオオオオ!!)

十六夜

LP：600

手札：0枚

場：モンスター

『ブラック・ローズ・ドラゴン』 攻撃力2400

魔法・罫

無し

静花

LP：3100

手札：2枚

場：モンスター

無し

魔法・罫

無し

（彼女との決闘……ここからが本番、ですね）
「私のターン」

第七話 『黒薔薇の魔女』対『静かなる花』 ～静花～（後書き）

お疲れ～。
ほな原作効果。

永続魔法『アイヴィ・シャツクル』

永続魔法ってなってるけど、OCGでは永続罫だから注意ね。

永続罫『ウイキッド・リポーン』

800ライフを払ってシンクロモンスターを特殊召喚するっていう基本は同じだけど、原作では効果は無効にされず、このカードの効果以外で破壊されたターンのエンドフェイズ時に無条件で特殊召喚させる効果もある。

強すぎでしょう。どう考えても。

『ブラック・ローズ・ドラゴン』

おそらく説明は不要だろうけど、ブラック・ローズ・ガイルがシンクロ召喚限定じゃなくて、特殊召喚全般で使用可能。ついでにこじや書かれてないけど、ローズ・リストラクションが守備表示だけでなく攻撃表示モンスターにも使えるらしい。

かなり強いなこれも。

こんなもんか。忘れてるのがあつたらまた追加するわ。気が付いたら教えてくれたらありがたい。

んじゃ、次話で決闘完結だから待ってて。

第八話 『黒薔薇の魔女』 対『静かなる花』 〔黒薔薇〕（前書き）

まず言っておきたいことが一つ。

決闘の中で一か所、致命的なミスがある（もしかしたら一か所じゃないかも分からんが）。直そうかとも思ったけど、無理だった。

どこかは後書きで説明するよ。

あと今回も原作効果が主だから。他にも処理のおかしいところもあるけど、演出だと思ってスルーして下さいな。

じゃ、行ってらっしゃい。

第八話 『黒薔薇の魔女』 対『静かなる花』 ～黒薔薇～

視点：外

静観、沈黙、今、会場を包んでいるのはそれだった。本来多くの人間の声援によって包まれるはずの会場。しかし、そこには一切の声が無い。誰もが一言の言葉も、ないし息遣いによる呼吸音さえ発生させてはならないと感じ取り、沈黙を余儀なくされている。

それは、目の前で決闘をする、静花という存在によるものに他ならない。

「私のターン」

静花

手札：2 3

（……………真六武衆は既に五人が墓地にある……………かなり、部が悪いですね）

「チューナーモンスター『六武衆の影武者』を準備表示」

『六武衆の影武者』チューナー

レベル2

守備力1800

「カードを一枚伏せます。ターンエンド」

静花

LP：3100

手札：1枚

場：モンスター

『六武衆の影武者』 守備力1800

魔法・罫

セット 1枚

十六夜

LP：600

手札：0枚

場：モンスター

『ブラック・ローズ・ドラゴン』 攻撃力2400

魔法・罫

無し

(次のターンまで、持ち堪えることができれば……)
「私のターン」

十六夜

手札：0 1

「……」

「……『フェニキシアン・シールド』を守備表示で召喚」

『フェニキシアン・シールド』

レベル2

守備力0

(これならば……)

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』、モンスター効果発動。墓地の

植物族モンスターを除外し、相手フィールド上の守備モンスターを攻撃表示に変更し、エンドフェイズ時まで攻撃力を0にする」

「くっ……！」

「墓地の『イービル・ソーン』を除外。ローズ・リストラクション」

『ブラック・ローズ・ドラゴン』のツルが、座っていた影武者を縛り、無理やり立ち上がらせた。

『六武衆の影武者』

4000

「ブラック・ローズ・フレア」

「ぐああ……」

影武者を、そしてその一帯まるごとが炎に包まれ、必然的に静花も炎に包まれる。

静花

LP：3100 700

ピシッ

「……？」

その空間から炎が晴れた時、アキは疑問の表情を浮かべた。そこにはぼろぼろになりながらも、仁王立ちでいる影武者の姿があった。

「バカな、なぜ破壊されない？」

「ぐう……ダメージステップ時、手札の『紫炎の寄子』を墓地へ送り、効果を発動させていました。このターン、攻撃された六武衆と名の付くモンスターは、戦闘では破壊されません……」

静花

手札：10

「……ターンエンド」

十六夜

LP：600

手札：0枚

場：モンスター

『ブラック・ローズ・ドラゴン』 攻撃力2400

『フェニキシアン・シールド』 守備力0

魔法・罫

無し

静花

LP：700

手札：0枚

場：モンスター

『六武衆の影武者』 攻撃力400

魔法・罫

セット 1枚

(『フェニキシアン・シールド』の攻撃力は800、攻撃表示で出されれば終わっていましたね)

「私のターン」

静花

手札：0 1

「罫発動『六武衆推参!』。墓地の六武衆と名の付くモンスターを

一体、特殊召喚。このターンのエンドフェイズ時、破壊される。私は『真六武衆 - カゲキ』を特殊召喚」

『真六武衆 - カゲキ』

レベル3

守備力2000

「合計のレベルは5……」

「レベル3の『真六武衆 - カゲキ』に、レベル2の『六武衆の影武者』をチューニング」

「紫色の獄炎、戦場にて剣を纏う。武の精魂よ、天上凱歌の調べを刻め」

「シンクロ召喚。紫色の剣、『真六武衆 - シエン』」

『真六武衆 - シエン』

レベル5

攻撃力2500

十六夜の『ブラック・ローズ・ドラゴン』。静花の『真六武衆 - シエン』。二人のエースモンスターが向かい合い、今まで以上に強烈な空気が流れた。それは普通のモンスター同士のバトルでは流れることの無い、選ばれたモンスター同士だからこそ纏う闘気によるもの。決闘者に、最強のパートナーであると選ばれた者だからこそ、そのモンスター自身、そして、決闘者自身の闘気が混ざり合うことで流れる激流。

「バトル。『真六武衆 - シエン』、『ブラック・ローズ・ドラゴン』を攻撃。紫流獄炎斬」

紫の炎を纏った武將の刃が、深紅の薔薇の竜を斬り裂いた。

十六夜

LP：600 500

「カードを伏せます。これでターンエンド」

静花

LP：700

手札：0枚

場：モンスター

『真六武衆 - シエン』 攻撃力2500

魔法・罫

セット 1枚

十六夜

LP：500

手札：0枚

場：モンスター

『フェニキシアン・シード』 守備力0

魔法・罫

無し

(このまま押し切ることができれば……)

そしてまた、そんな二人を見ながら、微笑を浮かべる者達がいた。「まさか彼がこれほどの決闘を見せるとは、さすがに予想外ですよ」「彼女の方も、十分に刺激を与えることができたようです。彼には悪いですが、ここでご退場願いますよ」

「え？」

「私のターン」

十六夜

手札：0 1

「魔法カード『貪欲な壺』を発動。墓地のモンスターを五枚デッキに戻し、カードを二枚ドロウする」

「（この局面で、ドロウ強化カードを……！）シエンの効果を……」

「……発動しません」

シエンの効果。相手の魔法・罫の発動を一度だけ無効にする効果。その効果を、静花は敢えて発動しなかった。

「この五枚をデッキに戻す」

『イービル・ソーン』

『イービル・ソーン』

『夜薔薇の騎士』

『薔薇の妖精』

『ブラック・ローズ・ドラゴン』

十六夜

手札：0 2

「……『フェニキシアン・シールド』の効果。フィールド上のこのカードを墓地へ送ることで、手札の『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』を特殊召喚する」

「なっ！」

『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』
攻撃力2200

(まずい！ あのカードの効果は！)

「『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』が破壊され墓地に送られた時、相手ライフに800ポイントのダメージを与える」

(私のライフが残り700、彼女が500……)

「通すわけにはいかない。速攻魔法『六武衆の理』！ フィールド上の六武衆と名の付くモンスターを墓地に送り発動。墓地の六武衆と名の付くモンスターを特殊召喚する。『真六武衆・シエン』を墓地に送り、『真六武衆・エニシ』を特殊召喚！」

『真六武衆・エニシ』
攻撃力1700

「あの人何やってんの！ 攻撃力2500の強力モンスターを！」

「……いや、ああするしかない」

「え？」

「『真六武衆・エニシ』の効果。墓地の六武衆と名の付くモンスター二体を除外し、フィールド上のモンスター一体を手札に戻す。この効果は、相手ターンにも発動できる。墓地の『真六武衆・シナイ』、『真六武衆・ミズホ』を除外し、『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』を手札に戻して頂く」

「……」

エニシの効果により、『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』はゆっくりとその姿を消していった。

十六夜

手札：1 2

「アマリリスの効果でダメージを受けるのは、そのカードの破壊時のみ。手札に戻った場合なら、ダメージは発生しない」

「そうか！ そのためにエニシを！」

「だが、同時に静花は切り札を失った」

「あ……」

「『ボタニカル・ライオ』を召喚」

『ボタニカル・ライオ』

攻撃力1600+300

「『ボタニカル・ライオ』はフィールド上の植物族モンスター一体につき、攻撃力を300ポイントアップさせる……」

「エニシを超えるモンスターを、握っていましたか……」

「『ボタニカル・ライオ』で、『真六武衆・エニシ』に攻撃。ゾーン・ファンゲ」

『ボタニカル・ライオ』の牙が放たれ、エニシは串刺しとなる。

「くう……エニシ……」

静花

LP：700 500

トコッ

「はっ！」

バキイ

すんでの所で飛んできた牙を避けることができた。だが一瞬反応が遅れ、牙が面にかすれ、左の角が飛んだ。

「ターンエンド」

十六夜

LP:500

手札:1枚

場:モンスター

『ボタニカル・ライオ』 攻撃力1600+300

魔法・罫

無し

静花

LP:500

手札:0枚

場:モンスター

無し

魔法・罫

無し

「私のターン……」

静花

(く……もう面は限界ですね。次に何かあれば……)

「この……この化け物！！ 静花に何てことしやがるんだー！！」

「！？」

「俺達の命の恩人にケガさせるんじゃねー！！」

「静花にこれ以上何かしたらタダじゃ済まさねーぞ！！」

直前まで守られていた沈黙が、一気に爆発した。静花の脅迫により、一切の声を立てなかつた者達。しかし、その脅迫者の静花は、同時に命の恩人でもある。その恩人が目の前で傷つけられること。これが、保たれたい沈黙という見えざる掟を破壊してしまった。

「皆さん……」

「……随分な人気ね」

「……？」

突然、初めて十六夜の方から声を掛けられ、静花は不思議そうに顔を向けた。

「さっきお前は、仮面を着けている者同士、反応が違うと言っていた。しかし素顔の私は罵声を浴び、仮面で素顔を隠すお前はこれほどまでに大勢の人間に愛されている。そのくせさっきから自分の素顔を見られることを恐れている。昨日とは服装まで変えて、少しヒビが入る度に仮面に手を掛けて」

「……」

「何から何まで、私とは真逆の場所にいる人間が、本当の私を知りたいなんて……笑わせるわね」

「……そうですね」

十六夜に返事をしながら、静花はゆっくりと立ち上がった。
そして、

ガアン！！

鞘に収まった刀で地面を叩く。たったそれだけで、会場中に響く轟音が生じた。

そして、それにより、また観客達は沈黙した。

「皆さんにお聞きしたい」

先程と同じように、雰囲気は静かながら、よく通る声で呼びかける。

「私と彼女、これほどの扱いの差とは何なのでしょう？」

『…………』

大声での質問に、観客達は誰も答えない。

「私は確かにあなた方を助けましたが、よく考えて頂きたい。あの瓦礫は、彼女が力を発生させる以前に、私が傷つけた床から生じたもの。つまり、私もある意味で言えば皆さんに被害を与えた。そうではありませんか？」

『…………』

その問い掛けにも、誰も答えない。

だが、誰もが思っていた。

それは別問題だ。関係無い。静花のせいじゃない。静花は自分達を守ってくれた。

と。

「それでもあなた方は、私にそんな言葉を掛けて下さるのですか？」

『…………』

「では更に聞きたい。私がサテライトの人間であるとすればどうです？」

『え！？』

「そう。私は、サテライトで生まれ育った人間だ。あなた方の嫌いな、サテライトの人間だ」

その発言と同時に、明らかに空気が変わった。

「サテライトって…………」

「マジかよ…………」

「静花が、サテライト出身…………」

「だからあんな仮面を…………」

「うわぁ…………」

「…………最悪…………」

また、開会式の時と同じ、起こったのは冷たい空気と吹聴。直前まであれほど、命の恩人だ、英雄だと持ち上げていたにも関わらず、彼が蔑むべき場所の生まれだと知った途端、あからさまに手の平を返す。

先程の静花の姿に、静花が嘘をつく人間ではないと分かったこともあったのだろう。観客達を脅迫したこともあるのかもしれない。とにかく、観客達の中に直前まであった静花への思いは、皆無となってしまうた。

「これで、少しはあなたと同じになれたでしょうか」

「…………そのために、そのことをばらしたの？」

「ええ。あなたが素顔でそこに立っているのに、私だけが全てを明かさずにいるのは、確かに不公平だ。そんなことをしているうちは、あなたのことを知る資格など無い」

「……どうかしてる」

「心配して下さっているのですか？」

「……」

十六夜は答えないが、その表情は、完全に混乱に染まっていた。今まで、ここまで自分と同じ目線に近づいてくれる人間は、一人しかいなかった。自分を見つけ出し、導き、変えてくれた存在、デイベイン。彼もまた、自分と同じ力を持っていた。だから、同じ力を持つ人間としても信頼できた。

なのに、目の前に立つ静花は普通の人間だ。先程から人間離れしている部分もあるが、特に特殊な力を有しているわけではない。そんな、普通の人間が、自分と同じ場所へ、自分から近づこうとしている。ただ、自分のことを知りたいがために。

「どうしてそこまで……お前も、傷つくのは同じはずなのに……あなたは、平気なの？」

それは徐々に口調が変わりながら、顔には同情の念が浮かんでいた。

「……十六夜さん。あなた、変わりましたね」

「……私は何も変わらない」

「そうですか……それがあなたの、本来の姿なのかもしれませんね」「バカなことを言うな……」

「では言わせて頂く。あなたは今、その思いに揺らいでおります！」「右手に残った一枚のカード。それで十六夜を刺しながら、言い放った。」

「……黙れ……黙れ……」

「カードを伏せます。これでターンエンド！」

静花

LP:500

手札:0枚

場:モンスター

無し

魔法・罫

セット 1枚

十六夜

LP:500

手札:1枚

場:モンスター

『ボタンカル・ライオ』 攻撃力1600+300

魔法・罫

無し

「私は変わらない……揺らぎなどしない……！ 私のターン！」

十六夜

手札:1 2

「十六夜さん！ 思いの無い人は、何かを恐れることはありません。

あなたは何に脅えているのです？ 傷つけることですか？」

「魔女である私に、脅えなど無い！ 私には、ブラックローズウィッチデイバインがいる。

だから全て許される！ 『ブラックローズウィッチ黒薔薇の魔女』を召喚！」

『黒薔薇の魔女』 チューナー

レベル4

攻撃力1700

「このカードの召喚に成功した時、カードを一枚ドロウする！ 互いに確認し、モンスター以外の場合、『黒薔薇の魔女』は破壊される！ ドロウ！」

十六夜

手札：1 2

「ドロウしたカードはモンスター『薔薇の妖精』！ カード効果でドロウに成功した時、特殊召喚する！」

『薔薇の妖精』

レベル3

守備力1200

「レベル3の『薔薇の妖精』に、レベル4の『黒薔薇の魔女』をチユーニング！」

再び同じ光景。『黒薔薇の魔女』が四つの星に変わり、『薔薇の妖精』を包む。

「力を恐れ、自分を恐れ、そんな自分を誰かに許されたいと願ったのは、あなたが人である証だ！」

「……………っ！ 冷たい炎が、世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け……………」

「笑い、憎み、怒り、震え、また笑う……………」

「胸を張れ！ あなたは誰より人らしい！！！」

「っ！！ シンクロ召喚！！ 現れよ！！ 『ブラック・ローズ・ドラゴン』！！」

『ブラック・ローズ・ドラゴン』
攻撃力2400

「それ以上喋るな！！ 聞きたくない！！ 『ブラック・ローズ・ドラゴン』！！」

(グオオオオオオオオ！！)

「全てを壊せ！！ ブラック・ローズ・ガイル！！」

ビュオオオオオオオオ

「きゃあ！！」

「うわあ！！」

バキバキバキバキ

再び巻き起こる突風。破壊される会場。そして、上がる悲鳴。

「これ以上、あなたの手で誰も傷つけさせない。罨発動！ 『諸刃の活人剣術』！！」

「っ！！」

「墓地の六武衆と名の付くモンスター二体を、攻撃表示で特殊召喚する！ 『真六武衆・エニシ』、『真六武衆・シエン』を特殊召喚！！」

『真六武衆・エニシ』

攻撃力1700

『真六武衆・シエン』

攻撃力2500

「エニシの効果発動！ 墓地の『真六武衆・カゲキ』、『真六武衆・キザン』を除外！ 『ブラック・ローズ・ドラゴン』を、手札ではなくエクストラデッキに戻して頂く！！」

先程の『フェニキシアン・クラストー・アマリリス』と同じ。『ブラック・ローズ・ドラゴン』が、ゆっくりと消えていく。

しかし、ブラック・ローズ・ガイルの衝撃は、もはやモンスター効果のみで止められるものでは無くなっていった。いくつもの巨大な瓦礫が宙に舞い、客席にこそ届いていないものの、二人の頭上に集中している。そして、『ブラック・ローズ・ドラゴン』が完全に姿を消した瞬間、支えを失った瓦礫は重力に従い、静花らに向かい落ちてきた。

「きゃあ！！」

「うわあ！！」

その光景に、自然と観客達は悲鳴を上げた。これから起こるであろう悲劇に、固まる者、思わず目を覆う者、目を見開く者と多数。そして、十六夜もまた、その光景を無言で見つめることしかできない。

「くっ……やるしかない」

静花は刀を、目前に構えた。

(……おい、まさかやる気か！？ 昨夜ゆうべの失敗を忘れたのか！？)

「忘れたわけではない。しかし、これしか、あれをどうにかする手段を私は知らない」

(……！)

(……どんな強固な力を身につけても、どんな綺麗事を嘯うたいても、私は、よく知っている。力とは、所詮は誰かを傷つけるためにあるもの。誰かを守るなどできない……)

(それでも、人を守りたいと願うなら、その罪を背負い、そして、それを償う覚悟を……)

……っ！！

「刃やいばに咎とがを！！ 鞘さやに贖あがないを！！」

静花が叫び、上へ向かって飛び上がり、その場から消えた、その瞬間、

ブアアアアアアア

空中に集まっていた巨大な瓦礫は、音も無く、一瞬にして粉々となった。それはまるで、空高くに存在する雲が、一瞬にして広がる光景にも似ていた。そして数瞬後、砂となったそれが決闘場に振り注いだ。

そして、鞘に収まった刀を手に、静花は同じ場所へ舞い降りる。

「これがあなたの罪だ……」

そして、その姿は今までと同じのようで、般若の面のヒビはもはや全体に広がり、いくつもの破片が地面へ落ちていた。

「……ターンエンド」

十六夜のエンド宣言。観客を助け、自分さえ助けた静花の姿。何より、フィールドの状況的にも、自分に勝ちは無い。それを察し、完全な敗北を認めて行ったエンド宣言。

しかし、その瞬間、静花のフィールド上の二体のモンスターは、徐々に煙となり消えていく。

「これは……」

「……『諸刃の活人剣術』の効果で特殊召喚された六武衆達は、そのターンのエンドフェイズに破壊される。そして私は、その六武衆達の攻撃力の合計分、ダメージを受ける」

静花

LP：5000

パラパラパラ……

「あなたの勝ちだ。十六夜アキさん」

静花が話している最中も、面は破片となり、地面に落ちていく。ちょうど下半分が落ち、笑みを浮かべる口元から、鼻先にかけてまで露わになった。

それでも、静花は話すことをやめない。

「良き決闘を、感謝致します」

その一言の直後、面は完全に剥がれ落ちた。

ずっと、面に隠されていた静花の素顔。それが、露わになった。

第八話 『黒薔薇の魔女』対『静かなる花』 ～黒薔薇～（後書き）

お疲れ〜。

前書きで言ってたミスだけど、

『六武衆の理』で『真六武衆・シエン』を墓地に送って『真六武衆・エニシ』を特殊召喚したところ。エニシの効果で『フェニキシアン・クラストー・アマリス』を手札に戻したけど、あれ、場にエニシ以外の『六武衆』がいないと効果の発動出来ないんだわ。

作中じゃ静花のフィールドにはエニシだけだった。そのこと見落として修正不可能になってしまった。こっちも原作効果ってことでスルーしといて。今後も直す自信無いから。本当にごめんなさい。

んじゃ、原作効果。

『黒薔薇の魔女』チューナー

ここで使った効果は、OCGじゃ「フィールドにカードが存在しない時に召喚に成功した時」ってなってる。おまけにOCGじゃ特殊召喚できないし、カードがモンスターじゃなかったら墓地に送んなきゃいけない。

かなり弱体化されてるね。『フルモンスター』くらいでなきゃ活躍の場が無い。

一応『薔薇の妖精』とのコンボは可能だけどき。デッキ操作せないかんが。

ついでに、十六夜が今回使った『貪欲な壺』と『ボタニカル・ライオ』。

他に良いカードが無くてアニメでも使っていないカードを使わせた。
気分を害した人には謝罪します。

じゃ、次もいつになるかは分からんが、なるだけ急いで書きあげますわ。
待っててね。

第九話 花の行き先（前書き）

第九話）。

ちよこつと展開飛ぶけどまあ堪忍してくれ。
んじゃ、行ってらっしゃい。

第九話 花の行き先

視点：外

その日の海は荒れていた。空からはそれほど強くはないものの、傘を刺さねばならない程度の雨が降り、風も吹き、それによって波が踊っている。普段の穏やかな姿を考えれば、十分に荒れていると言っている。

そんな海を前に、一人の女性が立っていた。

長く伸びる黒髪と褐色の肌、紫色の服を着たその姿は、年齢特有の貫禄と雰囲気醸し出し、その中に確かな優しさと厳しさを感じさせる中年女性。

そんな女性が荷物を片手に、海を眺めながら何かを待っていた。

（とは言っても、大丈夫かねえ。あれだけの騒ぎになって、本当にここまで来れるのか心配だよ）

そう、女性が考えた直後だった。

バシヤ

「うわ！」

突然の出来事に、それなりに長年を生きた身と言えど驚きを隠せない。

眺めていた海から突然人の手が現れ、それが埠頭の縁へりを掴めば誰でも驚くだろう。

始め右手だけだったのが、左手も現れ、両手になったところで体が持ち上げられ、全体が現れた。

「ふうー……」

黒のウエットスーツとゴーグルを着け、長髪を小さくまとめている。少年は海から上がり、呼吸を整えた。

「こりゃ驚いた。ここに来るとは聞いていたけど、まさか泳いでく

るとはね」

女性が話し掛け、少年はまとめた髪をほどき、ゴーグルを取り、美しい素顔を晒したところで女性を見た。

「初めまして、ですね。マーサさん」

「そうなるかね。梓」

……

……

……

視点：梓

「おい、あの顔……」

「どこかで見たような……」

「……梓、先生？」

「知り合いかい？ 龍可ちゃん」

「知ってるも何も、あの人俺達が毎週通ってる習字教室の先生だよ！」

「習字教室？」

「梓……まさか、水瀬梓か！？」

「水瀬梓だって！？」

「そつだあの顔、水瀬家頭首の水瀬梓だ！」

「何でそんな人が決闘なんてしてるんだ！？」

「パパ、ママ、見て！ 梓先生だ！」

「梓先生!？」
「うそ!？」

「間違いない、梓先生だ!」
「何で梓先生が、決闘なんか……」

「おい、あれ……」

「え……梓さん!？」

「梓さんが、決闘を……?」

「それより、さっきサテライト出身で言わなかったか?」

ガシャン!

「あ、梓……」

「何やってんだ、あのガキ……」

「何で……頭首のくせに……そんな格好で、そんな所で何してるんだ!! ああ!？」

「あつちやー、遂にやっちまったか。けど面白くなってきた……」

「家元……」

「水瀬梓だー!!」

「水瀬家の頭首の、水瀬梓だー!!」

何やらデジャブを感じますね。私がサイレントフラワーだと分かった時もこんな反応ではありませんでしたか？　しかし、当然ですね。水瀬梓が、決闘などしていれば。

「……なぜ、お前のような人間が……」
十六夜さんに話し掛けられました。まあ、当然の疑問かもしれませんね。

「昨日、誰かが言っていました。カードを持てば、マーカーがあるうが無かるうが皆同じだと。そして、貧富の差や身分があるうと無かるうと同じことだと」

「……」
「あなたとの決闘、とても楽しかった。もしまた決闘したくなる日があれば、私を訪ねて下さい。今日と同じ、決して、あなたに人は傷つけさせませんから」

「……！」
その会話の直後、膨大な数の足音が聞こえて参りました。

パシャパシャパシャパシャ
パシャパシャパシャパシャ

シャッター音と共に、大量のフラッシュが私を照らしました。

「水瀬梓さん！」

「インタビュ―させてー！」

シャキッ

ズバア

向かってくる報道陣の方々の中心目掛け、刀を抜きました。そして、良い具合に地面と共に、道を塞いでいた方々が左右に割れました。

「道を塞ぎ、通行の妨げになることは、あまり感心できません」
刀を納め、私はその中心に向かい歩きます。報道陣の方々も、さすがにそんなことをされれば怖かったのですね。目の前を歩く私に、誰も話し掛けようとせず、シャッター音も聞こえません。

「あ……あの！」
そう思ったのですが、女性の声が聞こえ、こちらに近づいてきました。

「あなたは本当に、水瀬梓さんなのですか？」
マイクを向けてきます。もうここまで来れば、下手に隠し立てしても無意味でしょう。

「ええ。私は真正正銘、水瀬家二十一代目頭首、水瀬梓です」
笑顔で答えると、それをキツカケに他の方々も押し寄せ、シャッター音も再会しました。

「なぜあなたほどの人がここに？」
「なぜ決闘を？ これも活動の一つなのでしょうか？」
お決まりの質問ばかり。こう言うては何ですが、あまり面白くありません。

「決闘中に言っていた、あなたがサテライト出身であるという発言は？」

その質問が聞こえ、私は足を止めました。
「……今日私の行った発言に、嘘は一つもありません」
それだけ答え、私は走りました。

「き、消えたぞー！」

「さつきも決闘しながら姿消してたし」

「足速え……」

「水瀬梓って、イメージと違って肉体派だったのか」

「……とにかくこれは、大スクープだわー!!」

……
……
……

まあそれからが大変でしたよ。

大会もちょうど終わった時でしたし、そのすぐ後に取材陣が家に押し寄せてきたのですから。

「梓さん、一言お願いします！」

「サテライト出身ということについて詳しく！」

「困ります。お帰り下さい」

「中にいるんでしょう？ 出てきて下さいよ」

「本当にサテライト出身なら、あなたはあなたの開いている教室の生徒達全員を騙っていたということですか？」

「生徒の皆さんに謝罪の言葉は？」

部屋にいてもそのような声が聞こえてきます。

生徒の皆さんへの謝罪、か。サテライト出身というだけで、こうも違うものなのですね。先程から電話も鳴っていますが、留守番電話に残るのはマスコミの方々からの質問や、親戚の方々からの苦言がほぼです。だから必要だと感じた物以外は出ないようにしています。

そんな時、携帯電話が鳴りました。

「もしもし」

『よ。梓』

「お父さん……」

病院にいるお父さんからの電話です。私の携帯番号を知っているのは、父と大谷さんだけですし。

『やっちまったなー。今部屋にいるけど、こっちにもマスコミの数がすげえこと』

「……すみません」

「そうだ。今日のこと、最も苦しむことになるのは父ではないか。良いよ謝らなくて。お前がああしたくてしたことなら、俺には何も言うことはない」

「しかし……いえ、言い訳はやめます。私はああしたくてやった。その通りです」

「ああ。偉いと思うぜ。ああまでして、あの十六夜って女の子に近づこうなんてな」

「私には、ああする以外にあの人のことを知る方法が思いつきませんでしたから」

「お前らしいな」

「私らしい、ですか。」

「まあ、そうやって何事も楽しむお父さんも、あなたらしいです。」

「とは言え、さすがにこのままじゃまずいだろう。しばらくは身を隠した方が良い」

「そう、でしょうか？」

「ああ。マスコミもそうだが、何より親戚達が黙ってないだろうな。ここぞつてばかりにお前を潰しに掛かるはずだ。何を言ってくるかわからねえ」

「そうでしょうね。決闘をしていたうえに、サテライト出身となれば」

「ただでさえサテライトの人達に人権は認められていない。だから彼らも、これまでのような遠慮はしないでしよう。」

「マスコミは俺の方で何とかしておくから、お前はしばらく安全な場所にいろ」

「そんな！ そんなこと、お父さんをお願いできません」

「大丈夫だ。俺も取材には慣れてる」

「けれど、あなたは病の身だ」

「取材を受けるくらい体力くらいあるっての」

「しかし……」

『それに、お前が今更何を話したところで変わらねーよ。お前のことをどうするか。それは、周りが決めることだ。辛いだろっが、今はそれを、黙って待つしかないだろう』

「それは……そうですね」

『ああ。親戚、シテイの人間、お前の生徒、そいつらがどんな答えを出すか。それは、お前には決められない。今は待ってる。それしか、できることは無いって』

「……分かりました」

「お父さん」

『ん？』

「その……それでは、また」

『ああ』

そして、電話を切りました。

……

……

……

その翌日、決勝戦で十六夜さんが敗れ、不動遊星さんが優勝。その直後に、キングであるジャック・アトラスを倒し、新たなキングに。そのおかげで私の家の前に張り込んでいたマスコミ達は全員そちらへ行き、家から出る事が出来るようになりました。

「家元、逃げるのならば私も一緒に」

「大谷さんは残って下さい。家の留守をお願いしたい」

「しかし……」

「それに、あなただけなら、親戚の方々が受け入れてくれるかもしれません」

「は……家元、それはどういう意味で……」

「あなたが他の家の人から誘いを受けていたことは、知っています」
「……!!」
「私のことは構いません。あなたはそのお誘いを受けて、これから水瀬に……」
「私は！ あなたの秘書です！！ 水瀬梓の秘書ですぞ！！」
「……」
「……」
「その言葉だけで、私は十分報われました」
「そんな……」
「あなたは優秀な人だ。それが、こんな男のもとにいつまでもいてはなりません」
「……」
「だから、あなたはきちんとした人のもとで、あなたのお仕事を行って下さい」
「……」
「今まで、ありがとございました」
「……お礼はやめて下さい。あなたが何と言おうと、私はあなた以外に仕える気は無い」
「大谷さん……」
「だからあなたがどこかに隠れると言うのなら、私も共に」
「その気持ちは嬉しい。しかし、
「あなたでは無理です」
「それなぜですか！？ 私は今まで、あなたと時には危険な目にも遭ってきた。今更どんなことがあるうと同じこと！」
「あ、いや、そういう意味では無くて、その……」
「家元？」
「その……物理的に不可能と言うか、むしろ私くらいしか出来ないというか、その……」
「はつきりお言い下さい！ 一体何なのです!？」
「その……そうですね。十分間、無呼吸運動が可能でしょうか？」

「……………は？」

……………
……………
……………

そして今、私はここにいます。

さすがに大谷さんも、私がサテライトへ、泳いで行くと言った時は黙ってしまいました。シテイからサテライトまでは結構な距離があります。その間の海を、酸素も無しに泳いで渡るなど狂気の沙汰だ。おまけに常にセキュリティの監視船も出ているため、一定の距離は潜水で泳ぐ必要がある。大谷さんからも本気で止められました。が、むしろ私だから大丈夫だという思いの方が強かったようです。まああまり自信過剰な発言はしたくありませんが、こんなことが可能なのは、少なくともシテイでは私だけだと確信しています。そんな私も、さすがにここへ来るまでにまる一日掛かりましたが。

そして、さすがに荷物を持って泳ぐことは不可能なので、出発の前日に必要な物をマーサさんの施設へ送り、ここまで運んで頂いたということ。まあ、荷物と言っても、少しの現金に、数日分の下着と着物一着、そして傘に、デッキという、カバン一つに治まる程度の荷物ですが。

「とんだご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした」

ウエットスーツから着物に着替えながら話しました。程良く降る雨が体の塩を洗い流し、体を拭くだけで済みました。

「良いよ。あなたには本当に世話になってるからね。むしろ頼ってくれて嬉しいよ」

マーサさんがそう言った直後、私も傘を刺します。

「ありがとうございます。それと、荷物の中に一緒に送っていたお菓子は受け取って下さいましたか？」

「ああ。子供達全員喜んでくれてるよ」

「良かった。和菓子なので子供達のお口に合うか心配でした」
最後の心配ごとでも無くなりました。

「本日は誠にありがとうございました。では、私はこれで」
そう言い、その場を去ろうとしましたが、

「え？ ちょっとお待ちよ」

「はい？」

なぜか、呼び止められました。

「うちに来るんじゃないのかい？」

……はい？

「いいえ。私はただ、あなたに荷物を預かって頂いて、ここまで運んで頂いただけです」

「その後は？」

「その後と言いますと？」

「どこに寝泊まりする気だい？」

なぜそのような心配を？

「ここはサテライトですよ。そんな場所はいくらでも見つけることができます」

過去に一つの都市が破壊されて生まれたサテライト。廃屋はもちろん、毎週運ばれてくるゴミなど、中には布団として扱える物もある。捨てられてきた傷んだ服や、小さく破けた布、新聞紙やチラシなどを集めて布団を作ったのは、今では良き思い出だ。

「私はてつきり、『マーサハウス』にしばらくいるもんかと思ったんだけど」

「まさか。すでにここまであなたには協力して頂いたのに、これ以上ご迷惑をかけるわけにはいきません」

「迷惑って、そんなこと……」

「このお礼は、また改めて。それではお元気で」

お礼を言い終え、私は走りしました。マーサさんが何やら言い掛けた気もしますが、今は気にしません。ちょうど雨も止みましたし、さて、まずは今日宿泊する場所ですね。

視点：マーサ

消えちまった。

てつきりうちを頼ってきたもんだと思ったら、始めから荷物以外は全部自分でどうにかする気だったとはね。

梓は、あの子が水瀬家頭首になる前、既にいくつかの教室を切り盛りしてる時に知った子だ。

ある日、マーサハウスに多額の寄付金を送ってくれた。どこからか見てみると、水瀬家当主の水瀬梓から。梓のことは有名だから知ってたけど、どうしてそんなことをしてくれるのか分からなかった。だからどうしてかを手紙で聞いてみると、自分も元々はサテライト出身だったから、自分と同じような境遇の子供達を放っておけない。そう返事がきた。

けど、最初はそれも信じられなかった。私は子供達のためにマーサハウスを創って、ずっと子供達の面倒をみてきた。そのためにサテライト中にいる子供達を見つけて、マーサハウスに入れたんだ。そして、梓の歳は、ジャックや遊星、クロウよりも年下だった。あの子達が子供の頃にはマーサハウスは建っていたのに、そんな中で私の知らない子供がいるなんて、にわかには信じられなかったよ。

でもそれは梓の方も同じだったらしい。マーサハウスなんてものが存在していること事体知らなくて、ずっと一人で生きてきてたらしい。そう言えば、クロウにそんな子がいるって話しは聞いたことがあった。可愛い女の子で、知らない子だったからマーサハウスに連れて行くこうとしたけど、見つけてすぐになくなったって。だからみんなが嘘だって笑った。私もその時はクロウの勘違いかと思っただけけど、きっとその子が梓だったんだね。

梓は手紙で、サテライトでずっと一人で生きてきて、最後には誘

拐されて売り飛ばされて、その時に今の水瀬の家に引き取られたってことまで教えてくれた。そして、手紙の最後にはこう書いてあった。

『もし私がマーサハウスの存在を知っていたら、生き方は完全に変わっていたでしょう。サテライトに対して、違う思いを抱いていたかもしれない。しかし正直に言えば、今の私はサテライトが憎くて仕方が無い。一生掛かっても、許すことができる自信が無い。しかし、だからこそ、そんな目に遭い、思いを抱くのは私一人だけで良い。サテライトが憎くとも、そこに生きる人達に罪はありません。まして、子供達には特に。』

『とは言え、今の私にはサテライトをどうにか出来る力はない。だからせめて、今はかつての私と同じ、今を精一杯に生きるしかない子供達の助けになりたい。そう考え、せん越ながら寄付金を送った次第でございます。私はただ、運が良かったから今のような地位にいる。本当ならばいつ終わっていたともしれない命。そんな、私のような子供達をこれ以上生みださないためにも、私にできることをさせて下さい。』

これが、ジャックや、クロウよりも年下の、十六歳の子供が書いた手紙だなんて、とても信じられないよ。もちろんこの手紙の内容は、マーサハウスの誰にも話してない。私と梓、二人だけの秘密さ。それから毎月寄付金を送ってくれて、手紙のやり取りも繰り返した。

そして昨日のことだ。いつもの寄付金と一緒に、たくさんのお菓子と小さな荷物。手紙には最後の方にこう書かれてた。

『明日、サテライトへ向かいます。どうか私の送った荷物を、港まで持ってきて下さい。着替えなどが入っています。同封したお菓子は、ぜひ子供達に食べさせてあげてください。』

荷物の中には、テレビでも使ってた、命よりも大切なはずのデッキまで入ってた。とても嬉しかったよ。それだけ私のことを信用してくれて。おまけに、今まで一方的に寄付金を受け取るしかなかった私が、初めて頼りにされたことも嬉しかった。だから、あの子と初めて出会うことは嬉しかったんだ。

けど、確かに手紙には、泊めて欲しいなんて一言も書いてない。荷物を届けて欲しいってだけ書いてある。きつと、今までもそういう生き方をしてきたんだね。決して人に甘えず、頼らず、そして完全には信用せず。と言っても、財布やデッキを同封して、中身を確かめずに行っちまったくらいだから信用しちゃくれてるんだろっけ。そもそも信頼してくれなきゃ、自分をサテライトの人間だなんて名乗るはずが無いからね。

それでもそうやって、何でも一人でどうにかしようとする所はやっぱり子供だよ。

いや、それとも、単に誰かに頼るっていう行為を知らないだけなのか。水瀬家頭首になるために努力をしてきたっていうのも手紙で読んだ。しかも単に習い事だけじゃなくて、文字の読み書きから始めてだ。クロウなんかは拾ったカードから文字の読み書きや計算を覚えたらしいけど、梓は決闘がしたくても、一枚だって拾えなかつたっていうからね。拾われた先で、ずっと誰にも頼らず努力してる姿が目に見えちゃうよ。とても辛かったらうね。

そしてその甲斐あって、今じゃあの歳で日本一の名家の頭首だ。何でも一人で解決しようとするはずだ。体面的にも、誰かを頼るなんてこと、出来ないだらうね。

だがいずれにせよ、放っておくわけにはいかない。梓からすれば、もっと幼い頃からここで一人で生きてきたわけだから、それと同じことをするだけだろうし、余計なことかもしれない。それでも、今までの恩を返したいし、何より梓に、もっと誰かを頼りにするって

ことを知って欲しいからね。

視点：梓

『水瀬家頭首、隠された真実！』

『水瀬梓の正体！「私はサテライト出身だ！」』

『水瀬家歴代最高の神童、自分の正体をフォーチュン・カップにおいて激白！ サテライト出身という大スキャンダル！』

瓦礫の上で、捨てられている雑誌や新聞を読む度、そんな文字ばかり。一面はジャック・アトラスさんの敗北や、不動遊星さんがキングになったこと、サテライト出身のキングということが載っていますが、そのすぐ後には私のことについて書かれている。

ただ、そのこと事体は構わなかったのですが、次の文字には、正直シヨックを受けました。

『サテライト出身という事実には、彼の生徒、顔見知り全員が大激怒！』

『生徒全員の怒り爆発！「決闘だけでも許せないのに、それがサテライト出身」』

『「私はずっとサテライトの人間に師事してきた。恥と屈辱以外の何物でもない」』

覚悟していたこととは言え、まさかこうも生徒達からの反応が変わるとは。

どれだけサテライトを嫌っているのか、嫌でも分かってしまいましたね。

正直、私もサテライトに対しては、今でも憎悪を抱いています。出来れば一生戻りたくはなかった。しかし、それには明確な理由がある。彼らにはそれがあるのでしょうか。ただ自分達の愉悦のためだけに嫌っているだけのようには感じられません。

『おおおお、偉い叩かれようだな』

声が聞こえました。

「カゲキ」

デッキは荷物と共にマーサさんに送ったので、一日ぶりの再会となります。

『今まで梓からずっと習ってきたくせに、何を言ってるんだか』

「仕方がありませんよ。これが、あなた方の言う、自分や自分の周囲のために、誰かを傷つける、そういうことなのでしょう」

『確かに。しかし、梓は彼らのために、毎日走り回り、指導してきました。彼らもそれには感謝していたはずなのに、この扱いは酷過ぎます』

「構いませんよ。むしろ元に戻っただけです。私は元来、こんな風に扱われましたから」

『だが、それはお前という存在を認めなかった者達からのものだった。それが今は、お前のことを認めていた者達に、こんなことを言われている』

「良いのです。彼らを裏切ったのは私の方です。そして、言い訳も説明もせぬままここまで逃げてきた。私を罵倒することで彼らの気が済むのなら、私はそれを甘んじて受けるだけです」

『だが、そうなればお前は……』

「ええ。そう遠くないうちに、私は水瀬家頭首ではいられなくなります。しかし、かつてはそれが怖かったのに、今はそれほど気にはなりません」

『意外だな。大会に誘われた時はあれだけ迷ってたくせによ』

私自身も驚いているのです。長年積み上げ、得ることが出来た、今の水瀬梓と言う人間でいられなくなることに。

しかし、失ってみて初めて分かりましたが、それ程惜しくは無い。多くの人々に憎まれ、蔑まれても、私の中に生まれたものは、清々しさだった。

「ずっと、多くの物を背負ってきました。それが全て無くなり、ある意味で言えば自由になれた。全てを失っても、私には父がいる。」

大谷さんがいる。そして、あなた方がいる」

真六武衆達に向かつて、言いました。

「何より、決闘者になるという、子供の頃から諦めていた夢を叶えることが出来たのです。今の私に、思い残すことは一つも無い。あなた方が私のそばにいる。それだけで、私は世界一の果報者であると、胸を張って言えます」

『梓……………』

『……………』

「それとも、皆さんも、私とは一緒にいたくはありませんか？　こんな、ゴミである私とは」

『バカ言ってんじゃねえ!!』

急にシエンが叫んできました。そして、真六武衆達全員が、厳しい顔を見せています。

『言っただけだ。俺達はお前を守りたくなくて現れたんだ』

『君はゴミじゃない。君がどんな人間で、どんな生き方を選んだとしても変わらない』

『あなたほど、仕えることができ誇らしいと感じた人はいません』

『私達こそはつきり言える。梓以上の主など、友などこの先現れることは無い』

『むしろ、これからもずっと、お前といたいと思っている……………』

『だから私達がお前から離れたいなんて、間違っても思わねえ。二度とそんなこと言っな』

全員が、真剣な顔で言っただけだった。私のことを、そこまで思っ
てくれているのですか。もう、頭首でも何でも無い、こんな私のこ
とを。

「ありがとう。カゲキ」

『おお』

「ありがとう。シナイ」

『うん』

「ありがとう。ミスホ」

『はい』

「ありがとう。エニシ」

「ああ。」

「ありがとう。キザン」

「……」

「ありがとう。シエン」

『ふん』

一人一人にお礼を言う。そうせずにはいられない。
心の底からありがとう。

こんな私を慕ってくれて。こんな私と共にいてくれて。

「見つけた！」

彼らと話しを終えた時、そんな声が響きました。

そちらを見ると、上に立たせたオレンジ色の髪に、顔には多くの
マーカー、そして黒いDホイール。

追い剥ぎでしょうか？ そう感じましたが、その隣にいる、青い
ライダースーツと赤いDホイールの男性がヘルメットを脱ぎ、違
うと分かりました。

「不動、遊星さん？」

そう言えば、彼も『サテライトの流れ星』という、サテライト出
身の方でしたね。ここにいても不思議はありません。しかし、その
隣の人は……

「あなたが水瀬梓だろうか？」

「え、ええ。確かに水瀬梓は私の名ですが」

「マーサにお前を連れてくるよう言われたんだ。一緒に来いよ。マ
ーサハウスにさ」

「え……」

そういうことですか。ということは、不動遊星さんもマーサハウスで育った人だということですね。

彼の顔を見ましたが、嘘はついていないようだ。

私は瓦礫から降り、彼らと向かい合います。

「俺は『クロウ・ホーガン』。こっちは知ってるだろうが不動遊星だ」

「お久しぶり、になるのでしょうか？」

「実際に話しをするのはこれが初めてだが」

怪訝な顔を見せていますが、それが彼の普段なのだと分かります。

「所でさ……」

そんな不動遊星さんを見ると、クロウ・ホーガンさんが話し掛けてきました。

「はい？」

「俺のこと、覚えてないか？」

そう話し掛けられました。はて、どこかでお会いしましたでしょうか……

「……まあいいや。それより、マーサがお礼も兼ねてマーサハウスに来て欲しいっていうんだ。一緒に来いよ」

お礼ですか。お礼をされるだけのことをした覚えは無いのですが。遠慮しておきます。こんな厄介者を迎え入れてしまっただけは、ご迷惑が掛かりますので」

「迷惑なんてこと無えって。どうせ子供^{がき}どもが大勢いるんだ。一人くらい増えたって変わらねーよ」

「だとしても、既にマーサさんにはご協力を頂きました。これ以上甘えるわけにはいきません」

「協力って、荷物運んだだけだろう」

「荷物を届け、お預かり頂き、それをわざわざ遠く離れた港まで運んで下さったのです。それ以上甘えるわけにはいきません」

「……どれだけ重労働だと思っただよ……」

呆れ顔を見せていますが、実際にあの年代の女性が、サテライト

の中心を、荷物を運びながら港までの道のりを歩くことを想像して
ごらん下さい。

「かなりの重労働ですよ。体力的にも環境的にも」

「大げさな。まあいいや。どうせ泊まる所無いんだろう。マーサも
本気で心配してるんだ。マーサのためにも来てやってくれって」

「そう言いながら、私に手を伸ばしてきました……」

「っ！！ やめて下さい！！」

手を振り払い、彼らから距離を取ります。

「な、何だよ……」

「どうした？」

「ふう…… お気持ちだけで十分です。ですから、あまり私に近づか
ないでもらえますか？」

「はあ？ どういう意味だよ……！！」

「待てクロウ」

クロウ・ホーガンさんがまた近づこうとしたのを、不動遊星さん
が制止しました。

「本人がここまで嫌がっているんだ。無理をして連れていくのも悪
い」

「冗談じゃねえ！ ここはサテライトなんだ。こんなところで子供
一人放つておく方がどうかしてるぜ」

「…… 水瀬に限って、危険は無いと思うが」

「何言ってるんだ！！」

……このまま二人を放っておいて、逃げるのも手ですが、それ
は解決になりませんね。

「分かりました」

私の言葉に、二人は私を見ます。

「クロウ・ホーガンさん、でしたね」

「あ？ ああ」

「私はあなたに決闘を申し込みたい」

「決闘？ 俺と？」

「ええ。あなたが勝てば、私はあなたの言う通り、マーサハウスへ行きましょう。ただし、私が勝てば、もう二度と私を誘うことはしないで頂きたい」

「な!？」

「水瀬……」

「こうでもしなければ、彼が潔く引き下がるとは思えません。こういう人は大抵決闘の結果には忠実なものですから。」

「……分かった」

「思った通り、承諾して下さいました。」

「ただし、決闘するにあたって、一つお願いがありあます」

「何だよ？」

「普通に決闘し、勝ったところで彼が納得するとは思えない。なので、彼が最も得意とするであろう条件、

「私とは、『ライディング決闘』で決闘して頂きます」

第九話 花の行き先（後書き）

お疲れ〜。

つーわけで、次はライディング決闘だ〜。上手く書けるか心配だ〜。
そんじゃ、待ってて。

第十話 花弁と黒羽の衝突（前書き）

ランニ……ゲフンゲフンッ！

ライディング決闘、アクセラレーション！！

の回です。

行ってらっしゃい。

第十話 花弁と黒羽の衝突

視点：クロウ

「私とは、『ライディング決闘』で決闘して頂きます」

……

「……はあ？」

何言ってるんだ、こいつは？

「ライディング決闘って……お前、『Dホイール』持ってるのか？」

「ありません」

「……そもそも運転出来るのか？」

「触ったことも無い」

「……」

わ、訳が分からねえ……

「そんなんでどうやってライディングで決闘するってんだよ」

俺がそう言った瞬間、

ヒュウ！

ヒュア！

水瀬梓は一瞬で消えたかと思うと、ずっと遠くに立って、そこからまた目の前に現れた。俺の顔に強い風が当たった。

「……」

「理解して頂けましたか？ むしろ私にとって言えば、下手な乗り物に乗る方が移動に時間が掛かってしまう」

「……」

目の前で起こったことが信じられなくて、言葉が出ねえ。

「……つまり、お前は走って、俺とライディング決闘するってことか？」

「あなたとあなたのDホイールがどの程度なのかは分かりませんが、

はつきり言つて、速度だけなら負ける気がしない」

こいつ、俺と『ブラックバード』を舐めてやがんのかよ。

「……いいぜ。やってやるよ。ただし、てめーも自分で言った言葉には責任持てよな」

「もちろん。ご安心ください。途中で中断させるような愚行は致しません」

綺麗だが余裕な笑顔が妙に勘に触りやがる。だいたい、人間の足で走ってライディング決闘なんて、聞いたこともねえ。さっきはあんまり速いからビビったが、実際人間の足がDホイールに敵う訳がねえ。

すぐに引き離して、こいつをマーサハウスに連れていく。

……

……

……

「準備は良いか？ ライディング決闘は初めてなんだろう？」

「準備なら既に完了しています。いつでも始めて下さい」

「けっ。フィールド魔法『スピード・ワールド』、セットオン！」

声に出しながらスイッチを入れる。同時に水瀬も、自分の決闘デッキのフィールドカードゾーンに『スピード・ワールド』をセットした。

『決闘モードON。オートパイロット、スタンバイ』

「分かてるよな。これで俺達は互いにフィールド魔法を使用できず、『Sp』以外の魔法カードをプレイした時2000ポイントのダメージを受けるぜ」

「分かっています」

返事を聞いた後で前を向いて、おなじみのセリフを叫ぶ。

『ライディング決闘、アクセラレーション!!』

叫んだと同時にスタートを切る。

へへ。思った通り、水瀬は俺より遙か後ろにいるぜ。

「第一コーナーを取った方が先行だ！」

聞こえてるか知らねーが、大声で話し掛けながら、第一コーナーに近づく。貰ったぜ！

「……………」

ッ！！

「な、何だ！？」

確かに、さっき見た時は俺のずっと後ろにいた水瀬が、一瞬で俺の前に出てきた！？

梓

LP：4000

SPC：0

手札：5枚

場：無し

クロウ

LP：4000

SPC：0

手札：5枚

場：無し

「私のターン」

梓

手札：5 6

「私は『真六武衆 - カゲキ』を召喚」

『真六武衆 - カゲキ』

攻撃力200

「カゲキの召喚に成功した時、手札の『六武衆』と名の付くレベル4以下のモンスター一体を特殊召喚できる。『真六武衆 - エニシ』を特殊召喚。そしてカゲキは、カゲキ以外の六武衆が存在する時、攻撃力を1500ポイントアップさせます」

「真六武衆 - エニシ」

攻撃力1700

『真六武衆 - カゲキ』

攻撃力200 + 1500

「カードを一枚伏せ、ターンエンド」

梓

LP：4000

SPC：0

手札：3枚

場：モンスター

『真六武衆 - カゲキ』 攻撃力200 + 1500

『真六武衆 - エニシ』 攻撃力1700

魔法・罨

セット 1枚

マジかよ……走って先行を取った上に、走りながら器用にカードを引いて、多分手作りのバンドにカードをセットして、そこから決闘ディスクにカードをセットしてやがる。

くそっ！ 正直直前まで信じられなかったけど、本気で走りながらライディング決闘する気みてーだな。

（やるな。水瀬。だが、ライディング決闘では、彼の使う六武衆は本来の力を発揮できないはず……）

「俺のターン！」

クロウ

手札：5 6

梓

S P C：0 1

クロウ

S P C：0 1

今増えたのが、ライディング決闘で最も重要な要素、『スピードカウンター』。お互いのターンが来る度にこいつが一つずつ増えていって、一つ増える度にDホイールの速度も上がっていく。

って、自分の足で走ってる水瀬には関係無いことだがな。

「俺は『BF - 蒼炎のシュラ』を召喚！」

『BF - 蒼炎のシュラ』

レベル4
攻撃力1800

「そしてこのカードは、自分フィールド上に同名カード以外の『BF』と名の付くモンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる。チューナーモンスター『BF - 疾風のゲイル』を特殊召喚！」

『BF - 疾風のゲイル』チューナー
レベル3
攻撃力1300

「『BF - 疾風のゲイル』のモンスター効果発動！一ターンに一度、相手モンスター一体の攻守を半分にする！対象は『真六武衆 - エニシ』だ！」

『真六武衆 - エニシ』
攻撃力1700/2
守備力700/2

「バトル！疾風のゲイルで、『真六武衆 - エニシ』を攻撃！ブラック・スクラッチ！」

ゲイルの羽がエニシに飛んでいく。まずは一体減ったぜ。

「手札から『紫炎の寄子』を墓地へ送り、効果を発動。攻撃されたモンスターは、このターン戦闘では破壊されません」

梓
手札：3 2

エニシの前に槍を持った子猿が現れて、ゲイルの羽を受け止めやがった。

梓

LP:4000 3450

ちっ、予定が狂っちゃった。仕方ねえ。まずは少しでも多くライフを削るぜ。

「なら、蒼炎のシュラでもう一度エニシに攻撃だ！」

梓

LP:3450 2500

「メインフェイズだ！ 俺のエースモンスターを見せてやるぜ！」

「エース……」

「レベル4の『BF - 蒼炎のシュラ』に、レベル3の『BF - 疾風のゲイル』をチューニング！」

「黒き旋風よ、天空へ翔け上がる翼となれ！」

「シンクロ召喚！ 『BF - アーマード・ウイング』！」

『BF - アーマード・ウイング』

レベル7

攻撃力2500

「アーマード・ウイング……随分と面倒なモンスターが来たものだ

……」

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ！」

クロウ

LP:4000

SPPC:1

手札：3枚

場：モンスター

『BF-アーマード・ウィング』 攻撃力2500

魔法・罠

セット 1枚

梓

LP：2500

SPC：1

手札：2枚

場：モンスター

『真六武衆-カゲキ』 攻撃力2000+1500

『真六武衆-エニシ』 攻撃力1700/2

魔法・罠

セット 1枚

へへ。テレビを見て強いってのは分かってるけど、ライダーで決闘で勝ちを譲るわけにはいかねえ。大人しく負けてもらっぜ。

「私のターン」

梓

手札：2 3

梓

SPC：1 2

クロウ

SPC：1 2

『スピードスベル』
『SP-エンジェル・バトン』を発動。スピードカウンターが二

つ以上ある時、カードを二枚ドロし、その後一枚を墓地へ捨てる」

『スピードスベル』
Sp

フィールド魔法『スピード・ワールド』の支配下でのみ発動できる魔法カード。こいつ以外の魔法カードをプレイすれば2000ポイントのダメージを受けるってんで、実質それまで使ってた魔法カードは使えなくなる。専用の魔法カードとのコンボを前提としたデッキはまるで機能しなくなるってのが、このライディング決闘の怖いところの一つでもある。

そしてこいつの『六武衆』デッキは、テレビで見た限り展開力は俺の『BF』デッキに匹敵するが、ほとんどが専用魔法カードを前提としたコンボ。つまり、このライディング決闘と、あいつの使う六武衆は相性最悪ってわけだ。

そんなんで俺に勝とうなんて、やっぱ無理な話だぜ。

「私はチューナーモンスター『六武衆の影武者』を召喚」

『六武衆の影武者』チューナー

レベル2

守備力1800

「チューナー！ そつちも来るか！」

「レベル3の『真六武衆・カゲキ』に、レベル2の『六武衆の影武者』をチューニング」

「紫色の獄炎、戦場にて剣を纏う。武の精魂よ、天上凱歌の調べを刻め」

「シンクロ召喚。紫色の剣はね、『真六武衆・シエン』」

『真六武衆・シエン』

レベル5

攻撃力2500

「レベル5で攻撃力2500。かなり強えな」

だが、攻撃力はこつちと互角。何より『BF・アーマード・ウィング』は戦闘では破壊されず、戦闘したモンスターに、攻撃力0にする楔を打ち込む。そいつじゃこいつは倒せねーぜ！

「ここで私は、『真六武衆・エニシ』の効果を発動します」
あ？

「フィールドにエニシ以外の六武衆と名の付くモンスターが存在する時、墓地の六武衆と名の付くモンスターを二体除外することで、フィールド上のモンスター一体を手札に戻します」

「なに！？ てことは!？」

「墓地のカゲキと影武者を除外。アーマード・ウィングは手札に戻して頂く」

「なあ！ 何だよそのインチキ効果は!？」

「……人のこと、言えますか？」

「え?」

そりゃあ……

「……エニシを守備表示に変更。バトル！ シエンでダイレクトアタック！ 紫流獄炎斬！」

「うわああ!!」

クロウ

LP：4000 1500

SPC：20

「一枚カードを伏せ、ターンを終了」

梓

LP：2500

S P C : 2

手札 : 1 枚

場 : モンスター

『真六武衆 - エニシ』 守備力 7000 / 2

『真六武衆 - シエン』 攻撃力 2500

魔法・罫

セット 2 枚

クロウ

L P : 1500

S P C : 1

手札 : 3 枚

場 : モンスター

無し

魔法・罫

セット 1 枚

くっそ……今の一撃でライフも、スピードカウンターまでくっそり持っていかれちゃった。スピードカウンターはライフに1000ポイントのダメージを受けることに一つ減らされるからな。

けど、そのせいでDホイールの速度が低下したとはいえ、水瀬の野郎は速度の衰えを感じさせねえ。ていうかむしろ、決闘が進む度に速くなってねえか？

これが、あの時女の子だと思って見つけた奴なのかよ……

……

……

……

ガキの頃、俺はいつも同じように、マーサハウスからここまで遊びにきて、カードを探したり、ゴミの中に使えそうな道具が無いかを探したりしていた。そういうのがあれば売って金にすることも出来るし、何よりマーサに喜んで欲しかったんだ。

そんな時だった。そいつは俺と同じ年か、一、二歳違っくらい。服は汚えし表情はかなり暗かったけど、めっちゃくちゃ綺麗な女の子だった。それまで見たこと無い子だったし、どうしてもマーサハウスに連れて行きてえって思って、話し掛けようとしたんだ。

けど、その子に見とれちゃまって、恥ずかしくて中々話し掛けることができなかった。そうやって迷いながら女の子を眺めてる内に、気が付くと、女の子は大勢の大人達と一緒にどこかへ行っちゃまった。マーサハウスに戻ってすぐそのことをみんなに話したんだが、誰にも信じちゃもらえなかった。そりゃそうだ。小さい女の子一人がサテライトで生きていけるわけが無えし、なによりあの時の気持ち思い出すと、恥ずかしくて詳しく説明できなかったしな。

それ以来、時々探してみたけど、その時の女の子には二度と会うことは無かった。今だから分かったけど、多分あれが、俺の初恋だったんだ。

だから一年前、雑誌で水瀬のことを見た時は驚いたぜ。一目であの時の子だって分かった。そしてそいつが、日本一の家の、一番偉い人間になつてたんだからな。ちなみにそれが女じゃなくて、男だって知つたのもその時が初めてだ。さすがに少しシヨクだったけどさ、あの時の俺の目も、初恋も嘘じゃなかったんだって知って、嬉しかった。

それで、そいつが今サテライトにいて、マーサハウスに連れてくるようマーサに言われて、また嬉しくなった。あの時はできなかったけど、今なら話し掛けることができる。男だと分かったから恋人にはなれねーが、代わりに男同士、仲間にはなれるだろうからな。

そう考えて、ちょうど帰ってきた遊星と一緒に、セキュリティを片づけたその足で水瀬を見つけ出したんだ。

……
……
……

それが今、俺はDホイールで、水瀬は自分の足でライディング決闘をしてる。あの時の弱々しかった姿が嘘みてーに、常にDホイールに乗った俺の前を走ってやがる。さつきからどれだけスピードを上げてても一向に距離は縮まらねえ。疲れを見せる気配すら無え。どうやったのか知らねーが、強くなっただんな、水瀬。あの時よりも遙かに。

……けど、けどよ、俺だってあの時の、話し掛けることもできなかった自分とは違うんだ！

「俺のターン！」

クロウ

手札：3 4

梓

S P C：2 3

クロウ

S P C：0 1

「手札から『S p - オーバー・ブレスト』を発動！ このターン、自分のスピードカウンターを四つ置き、エンドフェイズに一つにする！」

「……シエンの効果を発動。一ターンに一度、相手の魔法・罠の発

動を無効にし、破壊します」

狙い通りだ！

「相手フィールド上のみモンスターが存在する時、このカードはリリース無しで通常召喚できる！」 『BF - 暁のシロツコ』を召喚！」

『BF - 暁のシロツコ』

攻撃力2000

「更に、このカードは同名カード以外のBFが存在する時、特殊召喚できる！」 『BF - 黒槍のブラスト』を特殊召喚！」

『BF - 黒槍のブラスト』

攻撃力1700

「ここで罨カード『ブラック・リターン』！ 相手フィールド上のモンスター一体を選択し、選択したモンスターの攻撃力分のライフを回復し、更に選択したモンスターは手札に戻る！ さっきのお返しだ！」

「……カウンター罨発動、『盗賊の七つ道具』」

「げ！」

「ライフを1000ポイント支払い、罨カードの発動を無効にし、破壊します」

梓

LP：2500 1500

「なお、これはダメージではないためスピードカウンターの減少もありません」

くそお、初めての割にライディング決闘の特性を活かしてやがる。

ライディング決闘じゃ、罨カードの使い方が勝敗を決めるって言っても良いからな。

だが、こっちもまだ終わりじゃねーぜ！

「暁のシロツコのモンスター効果発動！ 自分フィールド上の『BF』と名の付いたモンスター一体を選択して発動！ そのモンスターの攻撃力を、フィールド上のそのモンスター以外のBFの攻撃力分アップさせる！」 『BF - 黒槍のブラスト』を選択し、暁のシロツコの攻撃力分、攻撃力アップだ！」

『BF - 黒槍のブラスト』

攻撃力1700+2000

「バトル！ 黒槍のブラストで、『真六武衆 - シエン』を攻撃！

ブラック・スパイラル！」

「うっ！」

梓

LP：1500 300

SPC：3 2

「……シエンが破壊される時、フィールド上の六武衆と名の付くモンスター一体を代わりに破壊できる。エニシを破壊し、シエンを破壊から守る……」

「げ、そんな効果まであるのかよ！ ……どっちにしろ、この効果を使った暁のシロツコは、このターン攻撃できない。ターンエンドだ」

クロウ

LP：1500

SPC：1

手札：1枚

場：モンスター

『BF - 暁のシロツコ』 攻撃力2000

『BF - 黒槍のブラスト』 攻撃力1700

魔法・罫

セット 1枚

梓

LP：300

SPC：2

手札：1枚

場：モンスター

『真六武衆 - シエン』 攻撃力2500

魔法・罫

セット 1枚

直前までずっと俺の前を走ってた水瀬が、初めて俺の後ろを走った。ダメージの衝撃もあるんだろうが、体力的にもそろそろきつそうだな。

「もう勝負はほぼついてる。そっちの足も限界だろう。素直にマーサハウスに来いよ。悪いようにはしねえって」

仮に奴が攻撃を仕掛けてきたとしても、俺の残った手札一枚は『BF - 月影のカルート』。BFが戦闘を行うダメージステップ中に手札から捨てることで、戦闘するモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで1400ポイントアップさせる。

奴の残った伏せカードを警戒して前のターンは使わずに温存しておいたが、これで少なくとも攻撃してきたとしてもこいつを手札から捨てて反撃できる。そうなれば俺の勝ちだぜ！

「……………素直に……………悪いようにはしない……………」

（「可愛いねえ」）

（「良いからこっちにおいで、素直に俺達の言いつこと聞いてよお」）

（「悪いようにはしないからさあ」）

（「^^ ^^ ……」）

（『^^ ^^ ^^ ^^ ……』）

ギリッ

「ふざけるなああああああああああああああ！」「
「な、何だ！！」

いきなり叫んだかと思うと、後ろで走ってたはずの水瀬が一気に
速度を上げて、俺の横を並んで走りやがった！

「私はゴミだ……………」

（^^ ^^ ^^ ……」）

「人の形をしたゴミだ……………」

（^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ……」）

「だが！！…ゴミであっても！！…貴様らの玩具おもちゃではない！！…」

梓

手札：1 2

梓

S P C : 2 3

クロウ

S P C : 1 2

「『真六武衆 - シナイ』を召喚！！ シナイが場にあることで、『真六武衆 - ミズホ』を特殊召喚！！」

『真六武衆 - シナイ』

攻撃力1500

『真六武衆 - ミズホ』

攻撃力1600

「ミズホの効果発動！！ このカード以外の六武衆一体をリリースし、フィールド上のカード一枚を破壊する！！ シナイをリリース！！ 暁のシロツコを破壊！！」

暁のシロツコが！！

「シナイの効果発動！！ リリースされた時、墓地の六武衆と名の付くモンスター一体を手札に戻す！！ 『真六武衆 - キザン』を手札に戻し、効果で特殊召喚！！」

『真六武衆 - キザン』

攻撃力1800

『真六武衆 - キザン』！？ いつの間に墓地に……前のターンの『エンジェル・バトン』か！？ だが、俺の手札には……
「バトル！！ 『真六武衆 - ミズホ』で、黒槍のプラストを攻撃！！」

「なに！？ 攻撃力はこっちが上なのに！？」
向かってきて、結果普通に黒槍のプラストに破壊されるミズホ。

梓

LP:300 200

何やってんだ!? 何に怒ってるのか知らねーが自棄やけになったのか!?

「畏発動!! 『六武衆推参!』!! 墓地の六武衆一体を特殊召喚し、エンドフェイスに破壊する!! 『真六武衆・エニシ』を特殊召喚!! キザンと共に、自身の効果で攻撃力アップ!!」

『真六武衆・エニシ』

攻撃力1700+500

『真六武衆・キザン』

攻撃力1800+300

「エニシの効果!! 墓地の六武衆二体を除外しモンスター一枚を手札に戻す!! ミズホとシナイを除外し、黒槍のブラストを手札に戻してもらおう!!」

これが狙いか!! 手札の月影のカルートを読んでたつてのかわ?

「バトル続行!!」

そう叫んだと思ったら、水瀬はなお更スピードを上げた! そして、俺の前を走って、俺をずっと引き離したと思ったら、ウターンしてこっちに向かってきた!!

「エニシ、キザン、シエン、ダイレクトアタック!!」

絶叫しながら、向かってくる水瀬。その目を見た時、分かった。

あいつは、俺の手札を警戒なんかしてなかった。こいつは、このダイレクトアタックを決めるために、俺のフィールドを空にしたんだ。激怒させた俺に、ストレートな怒りを含んだ攻撃で、とどめを刺すために。

そして、向かってくる、三体の六武衆……

「うわあああああああああ！！」

クロウ

LP:1500 0

ブシューウウウウ

ライフが0になったと同時に、ブラックバードは煙を上げて、ブレイキが自動で掛かる。

ってやべえ！！ 目の前には水瀬が！！

そう思ったけど、水瀬はぶつかる寸前、高くジャンプして衝突を避けた。

そして、ブラックバードが完全に停止した時、水瀬はちょうど走ってた方向の真後ろにある、かなり高い瓦礫のてっぺんに降り立っていた。

「……………」

……………すっげえ綺麗。水瀬を見て、そう感じた。

あれだけ走つたのに、髪も服も乱れてねーうえ、息切れ一つ、汗一つすら流してねえ。

紫色に光ってる着物が、汚れた瓦礫の上に、何の汚れも無い状態で立ってる。その光景が何て言うか、とにかくめっちゃめっちゃ綺麗だって感じた。

けど、何より気になったのが、

「……………」

その目はさっきまでの、優しく人を見つめる目じゃ無くなっていった。それは、目の前の人間を、憎悪に睨みつける目だった。

そして、しばらくそうやって見つめ合った後で、水瀬は瓦礫の向こう側へ消えていった。

「何なんだよ、一体……」

決闘中の変化もそうだし、今の目もそうだ。

今までサテライトの人間を見下す奴は大勢見てきたけど、あそこまで純粹な憎悪を向けてくる奴を見たのは初めてだった。

水瀬も俺達と同じ、サテライトの人間だったはずなのに。

そんな水瀬に一体、何があつたつて言うんだ……

結局、考えても分かるわけねーし、俺はそのまま遊星の待つ場所まで戻った。

第十話 花卉と黒羽の衝突（後書き）

お疲れ〜。

ライディングは初めてだが上手く書けただろうか。
んじゃオリカ。

『スピード・ワールド』

フィールド魔法

スピードスベル

「Sp」と名のついた魔法カード以外の魔法カードをプレイした時、自分は2000ポイントのダメージを受ける。

お互いのプレイヤーはお互いのスタンバイフェイズに1度、自分のスピードカウンターをこのカードの上に1つ置く。（お互い12個まで）

また、1度に受けたダメージに対して、お互いのプレイヤーは自分用スピードカウンターを1000ポイントダメージにつき1つ減らす。

もはや説明不要のライディング決闘必須のカード。

『スピード・ワールド2』に比べて効果は少ないけれど、それゆえにシンプルな決闘ができる。だからある意味で言えば純粹に自分の力量を確かめられる。

皆さんはどちらが好みかな。

『Sp・エンジェル・バトン』

通常魔法

自分用スピードカウンターが2つ以上ある時発動できる。

デッキからカードを2枚ドロース、その後手札を一枚捨てる。

もはやライディング決闘じゃ必ずと言っていいほど見るカード。
もう説明はいらなかな。とにかく強力です。

『Sp-オーバー・ブースト』

通常魔法

自分用スピードカウンターを4つ置く。

エンドフェイズに自分用スピードカウンターを1つにする。

まあ一気に四つも増やせるのは強力だわな。

以上。Spはライディング決闘専用のカードだから説明できることが少なすぎる。

私のボキヤブラリーの無さが憎いわ本当。

まあとにかく、次もなるだけ早く仕上げるよ。ちょっと待ってて。

第十一話 憎悪は氷結と共に（前書き）

こんにちは〜。

第十一話できたよ〜。

時間掛かつちやってごめんね。

んじゃ、行ってらっしゃい。

第十一話 憎悪は氷結と共に

視点：梓

焚火たきびを焚き、燃え上がる火を眺めながら、先程の決闘を思い起こします。

いつかできる日が来ればと、ライディング決闘用のカードを用意しておいたのがあんなところで役に立つとは。もっとも、決闘の内容は酷いものでしたが。

とにかく、これで私は、マーサハウスに行くことも無くなりました。サテライトの人達に、近づかずに済みました。今でも私はサテライトの人達に、たとえそれが子供でも、近づくだけで先程のようになってしまう。もはや完全に恐怖として体に染みついてしまっている。

「梓」

火を眺めていると、シエンの声が聞こえました。シエンは実体化し、私の隣に座りました。

「何か？」

笑顔で返事をしました。しかし、シエンの顔は全く笑っていない。心配そうに、私の顔を見ている。

「お前、さっきの決闘……」

「……情けない話です。以前私は、人を憎みたくない、そう言ったのに、実際は、サテライトと言う場所と人達への、憎悪の塊が胸にある。その結果がああ決闘だ。人を憎むことを恐れていると言いながら、未だ幼少時代のトラウマが私を支配している」

「……」

だからせめて、サテライト以外の人々を憎まないようにと、そう心に誓っていました。そんな思いで長年生きてきたことで、私の仲

の憎悪も薄れていったかと思っただのに……

「何があつたのですか？」

ミスホの声が聞こえました。こんなどうしようもない主だというのに、心配して下さっているのですね。

「……あまり人に話せる程のお話ではありませんが」

「それでも、話しちゃえば以外と楽になるかもよ」

今度はシナイです。今更ですが、いつもあなた方は二人で現れま
すね。

「僕達夫婦も、お互い悩みがあつたら素直に打ち明け合つてるし。

ねーミスホー」

「シ、シナイ、梓の前ですよ／＼／＼」

肩を組まれ、顔をくつつけられて、ミスホは赤くなっています。

いつものことながら仲睦まじい。と言うか、梓の前という言葉も今更でしょう。

「構わないさ。何なら今悩みがあれば聞いてあげるよ。すぐに慰めてあげるから。ふう」

「あ、あああ／＼／＼」

はて？ 耳に息を吹きかけていますが、何かのまじないでしょうか？ それにミスホの顔が赤い。風邪……精霊も風邪を引くのでしょうか？

「ちよ、待ってシナイ、何もこんな所で……／＼／＼」

「僕は気にしないさ。それに、体は素直だよ」

体はつて……ミスホは嫌がつているように見えますが。シナイは左手で腰の辺りをさすり、右手は、足でしょうか？ 伸ばしていません。

「あ、ダメです梓／＼／＼ 見ないで！／＼／＼」

「はあ……分かりました」

あまり嫌がつてはいませんね。私としてはなぜかもっと見ていた
い気になりますが、まあ見るなど言われたので目を閉じます。

ゴッ

「じ？」

『もつ目を開けていいぞ。梓』

エニシの声です。そう言われたので目を開くと、エニシとキザンが拳を握り、その前でシナイとミズホは頭を押さえながらひざを着いています。キザンが二人に声を掛けました。

『……その辺にしておけ。そこから先は18禁だ』

「じゅうはちきん？」

『梓は気にしなくていいから』

カゲキが笑顔で話し掛けてきました。

「はあ……分かりました」

武士というものは難しいのですね。もっと多くを学ばねば。

「ウオツホン。話しが逸れたが、過去に何があったんだ？」

実体化したシエンと向かい合い、そう言われました。

「……私がサテライトの人間であるというのは、ご存知の通りです。大会の二日目、その早朝での大谷さんとの会話は聞きましたね」

「ああ」

シエンが頷き、後の五人も頷きました。

「既にご存知の通り、私は誘拐され、お父さんに拾われる十歳の頃まで、サテライトで、一人で生きていました。毎日ゴミの中から食糧と衣服を探し、今のように火を起こす術すべも知らず、寒くとも服を拾い集めて眠る毎日でした。そうやって私は、誰かに何かを習ったことが無い状態でも、毎日生きるためのことを学び、生き延びてきました」

私は普通に話しているだけなのですが、六人とも深刻な顔を見せています。本当に大した話ではありませんよ。

「しかし、今だから分かることなのですが、物心がつき、立ち上が

れるようになったばかりの子供が、普通はそんな環境で生きることなど、出来るはずが無い。当たり前のことですが、私には何も無かった。家も、両親も、お金も、何もです。そんな状態の子供がたった一人で、サテライトという無法地帯で生きるなど、普通は死んでしまう。ですが、私の場合、一つだけ持っていたものがありました。何か分かりますか？」

その問い掛けに、六人は顔を見合わせ、考え始めました。

「強さか？ お前かなり強いし」

「いいえ。あなた方が来た時ほどに強くなったのは、父に拾われ、武芸の稽古を習ったからです。私には生まれつき、女性並みの筋肉しか付いていないそうで、それまで喧嘩すら一度もしたことはありませんでした」

そう返事をする、また六人共に考え込みます。

「……分かん。何なんだよ？」

シエンが尋ねてきました。後の五人も分からなかったようで、私を見つめました。

「それは……容姿です」

その答えに、全員が何やら、力の抜けた顔を見せました。

「容姿って、顔か？」

「ええ。顔です」

「……どういこうだった？」

まあ、私も仕様の無い事実だとは思っていますが。

「これも拾われてから知ったのですが、私は生まれつき、美しい顔をしていました。多くの人が羨み、愛し、憧れて下さる、そんな男子だとは思えないほどの美しい顔を。サテライトの人間ということも関係無いほどの美しい顔を、私は持って生まれました」

「はあ……それで？」

「それで、そんな顔を持って生まれた子供が、無法地帯であるサテライトを一人で歩いていれば、どうなるか想像できませんか？」

その私の言葉で、六人はなぜか目を見開き、硬い表情を見せまし

た。

「多くの男の人達が、私に群がってきました。そして、全員で私の衣服を剥がし、それで、その……」

「もういい、話すな」

急にシエンが遮りましたが、私は続けました。

「それで、とにかくそうすれば私は生きることができると学び、私は毎日、男の人達のもとへ足を運びました」

「もういい……」

「中には終わった後、お金や、食糧を分けて下さる人達もいましたから。中にはすることを済ませてそれきりという人も大勢いました」

「もういい」

「そうやって私は、多くの人達の慰み者になることで生きてきたのです。時には無理やり襲われることもあり、そのお陰で今のようになり逃げただけは速くなりました。だから今考えれば、売られるために誘拐されることも必然でした」

「もういい!!」

遂にシエンは怒鳴りました。しかし、私の口は止まりませんでした。

「だからでしょうね。恐怖や、羞恥という感情すら知らず生きたはずなのに、父に拾われ、大切に育てられ、多くを学んだ時、知りませんでした。私は本当は、父に、いえ、誰かに愛されて良い子供ではないのだと言ったことを。どんなに綺麗な着物や飾りで着飾ろうとも、私は体中が汚れた、本当のゴミだ。ゴミの中で生まれ育ち、外側も内側も汚れ切った、本物のゴミなのです。ただでさえゴミであった私が、サテライトの人々によって、最低のゴミへ変えられた」

「……」

「だから……だから、私は許せない。例え私の意志だとしても、私をそんな体にしたサテライトの人達を、許すことができない。ゴミらしくも無い感情ですが、それでも私は……」

「違う！！ 梓は……」

シエンが立ち上がり、私に向かって怒鳴ってきた。

「へえー、そうだったんだあ」

妙に間延びした、女性の声が聞こえました。なぜか聞き覚えのある声。シエンが慌てて姿を消した後、その声の方を見ました。

そこには、黒いフードを目深に羽織り、顔を隠している、女性です。すね。

しかし、一瞬誰か分かりませんでした。ジッと見ていると、分かりました。

「あなたは、双葉さん！」

「お久しぶりねえ……梓！！」

そう叫びながら、勢いよくフードを取りました。やはり間違いない。双葉さんだ。

しかし、その顔は、最後に見た時とは変わっていました。

「どう？ これ、似合ってる？」

「マーカー……」

そう。顔には、犯罪歴があること、そして、シテイでは生きられないことを示す黄色の線、マーカーが刻まれていました。

「そ。マーカー。あんたが店に来たその日のうちにセキュリティに捕まっちゃってさあ。多分水瀬家の誰かの手回しでしょうねえ。そのまま裁判に掛けられて、ろくな調査も無しにマーカーを付けられてサテライトに追放。それで、働かされてた場所から逃げてきてこのザマよ」

「そんな……そんなこと、私は……」

「ええ。分かっているわ。バカが付くくらいお人好しなあんたが、そんなマネするわけが無い。第一、あの後あんたはすぐに大会の会場に行つて、そんなことする暇なんて無かつたらうしねえ。私の予想通りに……」

「……………」
「本当に……何であんたなんかのせいで、あたしがこんな目に遭わなきゃいけないのよ!!」

「……そうですね。あなたのその怒りは正しい。その怒りは正義だ。あなたには、その怒りを私に向ける資格がある。そして私も、その怒りの報いを受ける義務がある」

「よくもまあいけしゃあしゃあと……」

「私も、あなたを追い立て、後悔していました。どうすることが償いなのか、ずっと考えていました。そしてそれは、あなたの怒りを全て受け止める以外に無い」

「……分かってるんじゃない」

双葉さんはなお更笑いながら、徐々に私に近づいてきました。

「みんながみんな、あんたのこと恨んでるくせに、誰もあんたのことをどうにかしようって考える奴はいなかった」

「……………」

「あたしだけだった。他はみんな、ただの悪口とか、やってもぎりぎり許されるような陰湿な嫌がらせばかり。あたしだけよ。毎日先代のいない間にあんたを殴りもしたし、勉強の邪魔もしたし、食事には毒だつて盛った」

「……………」

「けど、いつまでたつてもあんたはへこたれないし倒れもしないし死なないし、へこたれてくれないし倒れてもくれないし死んでくれない。そんなことしてる間に、あんたは頭首になつてた」

「……………」

「今まで以上にやり辛くなった。あんたは頭首だもん。今までみたくいにあからさまな行動は取れないし、陰でやつてもあんたならどこかで気付くって思った。だから何も出来なくなつて。そんな時に教室を休みにするっていうもんだからさあ、追い出すための特ダネが手に入ると思つてさあ、あんたを尾行したのよ。そしたらこのザマ

だもん」

双葉さんは、私の前に立ち、目を合わせてきました。

「本っ当に……」

バチッ

喋りながら、私の顔をはたきました。

「何で!!」

バチッ

「このあたしが!!」

バチッ

「あんたの!!」

バチッ

「せいで!!」

バチッ

「こんな目に!!」

バチッ

「遭わなきゃ!!」

バチッ

「ならないのよ!!」

ドッ

最後は握り拳に変わり、顔に当てられ、私は尻餅を着いてしまい

ました。

「しかも、その後の決闘で正体がばれて、あたしが何もしてないのにこんな所にいてさ。何であたしが逮捕される前に正体明かさなかつたわけ？ 決闘してた上にサテライト出身者？ 追い出すのに絶好の特ダネじゃないのよ。どうしてあたしが追い出された後なのよ！ どうしてあたしがここに来る前に正体を晒さなかったのよ！」

大声で叫びながら、足や拳を使って何度も殴打を繰り返している。現実には、中年近くの女性の攻撃は、訓練や修行で鍛えてきた体には痛みさえ与えない。しかし、彼女のその一撃一撃が、漏らす苦言の一言一言が、私の胸に突き刺さり、ある意味で言えば打撃以上の痛みが襲う。ずっと、目を逸らし続けてきた、私が傷つけていた人の叫び。

私は本当にダメな人間だ。それを実感した。もしかしたら、彼女はこうならずに済んだのかもしれない。なのに、私は私のことを思いやってくれる人達にはかり目を向け、私を憎む人達に目を向けずにいた。大会の一日目、シエンに話したことそのままだ。ずっと後悔していた。なのに、それをどうにかしようとも考えず、ただ、目の前の人達ばかりを見て……

「けどね、あたしは諦めないよ。あんたをここでぶつ殺して、あたしをこんな目に遭わせて水瀬の人間に復讐してやる。誰か知らないから、水瀬の人間片っ端から、最後の一人までぶつ殺すのよ！ 先代もねえ！」

っ！！

「だからあんたはここで……」
「死ねや！！」

ゴッ

彼女が振り下ろした木材を頭に受けながら、私は立ち上がりました。米神に生温かい感触がありますが、気にはならない。

「あなたが憎むべき相手は私一人のはず。私以外の水瀬家の人は関係無いはずだ」

「甘いこと言ってるんじゃないよ!!」

ゴッ

また木材で殴ってきました。

「あたしは頭首のあんたのせいでここにいるんだよ!!」

ゴッ

「だったら、そんな頭首のいる家が憎くて当然だろうが!!」

ゴッ

「だから、あんたを殺して水瀬の人間全員殺すんだよ!!」

ゴッ

「さっさと死ねや!!」

ゴッ

ガシッ

最後にぶつけられたそれを受け止め、彼女の目を見ます。

「なら私も、あなたを許すわけにはいかない」

「はあ? たった今、怒りを全部受け入れるって言ったばかりじゃなかった?」

「そのつもりでした。しかし、その怒りが私一人ではなく、水瀬の全てに向けられていると言うのなら話しは別だ。私は既に頭首ではないかもしれませんが、それ以前に水瀬家の子供だ。水瀬を守る義務がある。そのために、水瀬を落とそうと考える人は許せない。たとえそれが、かつての家族であっても」

彼女に言いながら手に力を込めると、木材は音を立てながら砕けました。すると彼女はフツと笑いながら、砕けた木材を捨てました。「良いわよ分かった。ガキの頃と一緒にでどれだけ殺しても死ななそうだし、じゃあ、あんたが一番納得するやり方で殺してあげるわ」
そう言いながら、取り出したのは……

「決闘モンスター！？」

デッキと決闘ディスク！？」

「なぜあんたが！？」

「あんたのことを憎んで憎んで、気が付けば手に持ってたのよ。あんた、これが大好きなんでしょう？ 頭首のくせにさあ！！」

彼女が叫んだ瞬間、周囲が青い炎に包まれた。

「これは……！？」

「構えなよ！！ あんたの大好きな紙束遊びで決着つけてやるから！！ ただし、負けた方が消える、『闇の決闘』でさあ！！」

『闇の決闘』……いや、それ以前におかしい。直前までの彼女には、こんな禍々しさは無かった。なのに何です？ この、この世の物とも思えぬほどの、冷たい感覚は？

「もたもたするんじゃないよ！！」

状況を把握しようとする間に響く、双葉さんの絶叫。

「ほら！！ あんたの大好きな紙束遊びをしてやろうって言ってんだ！！ 相手待たせるのはマナー違反じゃないのか！？ ああ！？」
く、彼女に本当は何があったのか、確かめる暇も無い。正直まだ混乱の極みですが、仕方が無い。

私は彼女に言われるまま、ディスクを構えました。

「決闘！！」

梓

LP：4000

手札：5枚

場：無し

双葉

LP：4000

手札：5枚

場：無し

「私のターン、ドロー」

梓

手札：5 6

彼女がどんな戦術を使ってくるのかは分かりませんが、私はいつも通りプレイするしかありません。

「永続魔法『六武衆の結束』を発動。そして『真六武衆 - カゲキ』を召喚」

『真六武衆 - カゲキ』

レベル3

攻撃力200

『六武衆の結束』

武士道カウンター：0 1

「六武衆の召喚、特殊召喚に成功したことで、『六武衆の結束』に一つ、最大二つまで武士道カウンターが乗ります。更にカゲキの効果。召喚に成功した時、手札の六武衆一体を特殊召喚します。『真六武衆 - シナイ』を特殊召喚。カゲキ以外の六武衆が場にある時、カゲキは攻撃力を1500ポイントアップさせます」

『真六武衆 - シナイ』

レベル3

攻撃力1500

『六武衆の結束』

武士道カウンター：1 2

『真六武衆 - カゲキ』

攻撃力200+1500

「ここで結束を墓地へ送り、このカードに乗った武士道カウンターの数だけカードをドロウします。カウンターは二つ。よって二枚ドロウ」

梓

手札：3 5

「永続魔法『紫炎の道場』を発動させます。このカードも結束と同じく、六武衆の召喚、特殊召喚の成功時に武士道カウンターを一つ乗せます。そしてシナイが場にあることで、『真六武衆 - ミズホ』は特殊召喚できる」

『真六武衆 - ミズホ』

レベル3

攻撃力1600

『紫炎の道場』

武士道カウンター：0 1

「カードを一枚伏せ、ターンエンド」

梓

LP：4000

手札：2枚

場：モンスター

『真六武衆 - カゲキ』 攻撃力2000 + 1500

『真六武衆 - シナイ』 攻撃力1500

『真六武衆 - ミズホ』 攻撃力1600

魔法・罫

永続魔法『紫炎の道場』 武士道カウンター：1

セット 1枚

「なつが！ この紙束遊びってさ、そうやって相手を待たせる遊びなわけ？」

「それはプレイングにもよりますね」

「ああ嫌だ嫌だ。何が楽しいのこんなの。あたしのターン」

双葉

手札：5 6

「魔法カード『おろかな埋葬』を発動。デッキからモンスター一体を墓地へ送る。そして、たった今墓地へ送ったモンスターは、自分フィールドにモンスターがいない時、墓地から特殊召喚できる。」

DT ダイクチューナー デス・サブマリン』を特殊召喚」

『DT デス・サブマリン』ダークチューナー

レベル9

攻撃力0

「ダークチューナー!? 何ですかそれは!？」

そんなカード、聞いたことが無い!？」

「うるさい!! あたしが知るわけ無いでしょう!!！」

しかし、彼女は怒鳴って私の言葉を否定するのみ。

「更に二枚目の『おろかな埋葬』、デッキから『イピリア』を墓地へ送る。そして魔法カード『ヴァイパー・リボン』! 墓地のモンスターが爬虫類族の場合、墓地からチューナー以外の爬虫類族一体を特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。墓地の『イピリア』を特殊召喚」

『イピリア』

レベル2

守備力500

「このカードが召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、カードを一枚ドロ―!」

双葉

手札：3 4

「更に速攻魔法『地獄の暴走召喚』発動! 相手の場にモンスターがいて、自分が攻撃力1500以下のモンスターの特殊召喚に成功した時、同名カードを手札、デッキ、墓地から可能な限り特殊召喚。あんたも自分のモンスター一体を選んで特殊召喚できる! あたしは『イピリア』をデッキから二体特殊召喚!」

『イピリア』
レベル2
守備力500
『イピリア』
レベル2
守備力500

「二体の特殊召喚に成功したことで、カードを二枚ドロ―！」

双葉

手札：3 5

上手い。モンスターと魔法の組み合わせで無駄なく手札を補充している。これが初めてカードに触った人間の決闘か？

「さあ、あんたも暴走召喚の効果でモンスターを特殊召喚しなよ」

「……私はその効果を使用しません」

私のデッキには、真六武衆たちは一枚ずつしか入っていない。暴走召喚で特殊召喚することはできない。

それにしても、彼女のデッキは、どうやら『爬虫類族』のようだ。こう考えるのは失礼ですが、あまりにも、彼女に似合っている。

しかし、何より気になるのが、あのダークチューナー。見たところレベルは高いですが、攻守は共に弱々しい。一体どんな力が？

「ええっと、じゃあ、ここでシンクロ召喚するよ」

「シンクロ召喚……」

「そう。ただし、普通のじゃなくて、『ダークシンクロ』をね」

……え？

「あんた知らないだろうし、教えてあげる。ダークシンクロってね、シンクロ素材になるモンスターのレベルからダークチューナーのレ

ベルを引いた数値のレベルの、『ダークシンクロモンスター』を特殊召喚するらしいわよ」

「レベルの合計ではなく、レベルを引いて行うシンクロ召喚……」

「そう。レベル2の『イピリア』二体に、レベル9の『DT デス・サブマリン』をダークチューニング」

「これは……」

デス・サブマリンが星に変わり、二体のイピリアを覆う。そして、その光景は、

「レベルの光が、闇に……」

そして、

「二体のレベル2から、レベル9を引いた数値は……レベル、-5!? そんなモンスターは……!!」

私が全てを言い切る前に、双葉さんはカードを一枚取り出しました。

「あるわよ。レベル-5のモンスター」

「な……!!」

それは、今まで見たことの無いカード。シンクロモンスターとは対照的な、黒い縁取りに、普通のモンスターカードとは逆に並んだ黒い星。

「闇と闇重なりし時、冥府の扉が開かれる。光り無き世界へ」
考えている間に、彼女は言葉を言い終えた。

「ダークシンクロ! いでよ、『氷結のフィッツジェラルド』!!」
彼女のカード名の宣言。そして、現れたのは、氷の手足と、妖しい目を光らせる、氷の塊。

『氷結のフィッツジェラルド』

レベル-5

攻撃力2500

そして、現れると同時に、吹雪が巻き起こった。先程焚いていた

焚火も、そのせいで消えてしまった。

向かい合うだけで分かる。このモンスターこそが、彼女の私に対する憎悪の塊。その視線は私の胸を射ぬき、苦しめようとしているかのようだ。

これが、あなたの怒り。私を憎み、水瀬を憎み、この世の全てを否定した怒りの権化。何と冷たい怒りでなのしょう。

だとしても、私は、必ずあなたを止める。この憎悪を受け止めて、必ず。

第十一話 憎悪は氷結と共に（後書き）

お疲れ〜。

んじゃら早速オリカ行ってみよ〜。

『イピリア』

レベル2

地属性 爬虫類族

攻撃力500 守備力500

このカードの召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドローする。

遊戯王DMで、大下（BIG5の『深海の戦士』）が使用。ドロー「する」のか「できる」のかは分らんが、何気に強力な効果。

OCGでは特殊召喚限定でカードを引ける『聖鳥クレイン』てのがあるけど、その完全な上位互換だ。能力の低さも相まってサポートしやすいし、今回のようにデッキによっちゃ強力なドローソースに化けるろっね。

『DT デス・サブマリン』

ダークチューナー

レベル9

闇属性 機械族

攻撃力0 守備力0

このカードをシンクロ素材とする場合、ダークシンクロモンスター1のシンクロ素材にしかならない。

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードを墓地から特殊召喚できる。

この効果はデュエル中に一度しか使用できない。

遊戯王5D・sでボマーが使用。

おそらく数あるダークチューナーの中じゃ一番使い易い部類に入る。

レベルを揃える手間にさえ目をつむれば簡単に場に出せる。

もっとも、その手間も普通のシンクロ以上だけねど。

以上。

じゃあ次も早く上げるよう頑張るよ。待っててね。

第十二話 氷結の夢、花の罪（前書き）

うっしや〜。

第十二話〜。

長なっただけど良かったら読んでくれ〜い。
行ってらっしやい。

第十二話 氷結の夢、花の罪

視点：梓

今までも、数々のモンスター達と向かい合ってきた。

修行時代は、さすがに面と向かって誰かに教えを請うこともできず、一人でビデオや記録を使い、我流の決闘を模索した。そして、最後にはサイレントフラワーとして大会に出場し、多くの決闘者、モンスターを相手取り、勝つことができました。

しかし、双葉さんの場にあるダークシンクロモンスター、『氷結のフィッツジェラルド』。視覚で捉えることができる紫色のオーラを放つそれは、今まで戦ってきたどのモンスターにも無い、禍々しさを感じさせた。近いものがあつたとすれば、フォーチュンカップ二回戦、十六夜アキさんとの決闘において彼女が召喚したシンクロモンスター、『ブラック・ローズ・ドラゴン』。もともと、その時感じられたのは、怒り、悲しみ、憎悪と言った、純粹な負の感情の塊のみ。今回もそれは感じられるが、それ以上に、冷たささえ覚えさせる禍々しい悪意、それがある。

その悪意が私に確信させた。このカードこそが、双葉さんが私や水瀬に抱くこととなった怒りの象徴なのだ。

「バトルフェイズ！」

それを理解したところで、彼女は声を上げました。

「ええっと、その中で一番厄介なモンスターを殺せばいいのよねえ……」

わざわざ声に出しながら、私の場の三体のモンスターに視線を送っている。今まで普通に決闘を進めていたようで、細かい部分では不慣れな部分もあるようだ。

「……うん。『真六武衆・ミスホ』に攻撃。ちなみにこいつが攻撃する時は、魔法・罫は発動できないからね。ブリザード・ストライ

ク！」

フィッツジェラルドから放たれた冷気がミスホを襲いました。

梓

LP：4000 3100

「う……こ、これは……」

十六夜さんの時と同じ、衝撃が実体化している!?

「言ったでしょう。負けた方が死ぬ闇の決闘だってさ。そりゃあ痛いに決まってるじゃないよお」

く、この人は、本当に……

「カードを二枚伏せる。ついでに『オシヤレオン』を守備表示で通常召喚してターンエンド」

『オシヤレオン』

レベル3

守備力800

双葉

LP：4000

手札：2枚

場：モンスター

『氷結のフィッツジェラルド』 攻撃力2500

『イピリア』 守備力500

『オシヤレオン』 守備力800

魔法・罫

セット 2枚

梓

LP：3100

手札：2枚

場：モンスター

『真六武衆 - カゲキ』 攻撃力2000 + 1500

『真六武衆 - シナイ』 攻撃力1500

魔法・罫

永続魔法『紫炎の道場』 武士道力カウンター：1

セット 1枚

厄介ですね。『オシャレオン』が存在する限り、こちらは『オシヤレオン』以外を攻撃できない。
「私のターン」

梓

手札：2 3

「はい罫発動」

っ！

「『毒蛇の供物』。あたしのフィールドの表側表示の爬虫類族を一体破壊して、あなたの場のカード二枚を破壊。あたしは『イピリア』を破壊して、あなたの場のモンスター二体を破壊するよ」

『イピリア』が爆発すると同時に、シナイとカゲキも破壊されてしまう。

「……クス」

「あん？」

いけません。仲間の死を前にしているというのに、つい笑みが……
「なに笑ってたんだ！？ あんた今の自分の状況分かってんのか！！」
もちろん分かっています。ただ、

「分かっているのはあなただ。決闘の定石というものを理解していない」

「はあ？」

「『毒蛇の供物』の発動タイミング、破壊するべきカードの選択、どちらも明らかに間違っている。一見鮮やかな戦術を見せたかと思えば、今のプレイングではつきり分かりました。あなたは攻撃やその準備のことばかりを考え、守りのことを考えていない」

「それが何よ？ 相手のモンスターを破壊してライフをゼロにすれば殺せるんでしょう。モンスターを殺して何が悪いわけ？」

「ふむ……ではお見せしましょう。本当の決闘というものを。魔法カード『紫炎の狼煙』を発動。デッキから、『六武衆』と名の付くレベル3以下のモンスターを手札に加える。『六武衆のご隠居』を手札に」

梓

手札：2 3

「更に、永續魔法『六武の門』発動。六武衆と名の付くモンスターが召喚、特殊召喚される度、武士道カウンターが二つ乗る。そしてこのカードは、相手フィールド上にモンスターが存在し、自分の場にモンスターが存在する時、特殊召喚可能。『六武衆のご隠居』を特殊召喚」

『六武衆のご隠居』

レベル3

守備力0

『紫炎の道場』

武士道カウンター：1 2

『六武の門』

武士道カウンター：0 2

「速攻魔法『六武衆の荒行』。フィールド上の六武衆と名の付くモンスター一体を選択し、そのモンスターと同じ攻撃力を持つ六武衆と名の付くモンスターをデッキから特殊召喚する。『六武衆のご隠居』を選択。同じ攻撃力を持つチューナーモンスター『六武衆の影武者』をデッキより特殊召喚」

『六武衆の影武者』チューナー

レベル2

守備力1800

『紫炎の道場』

武士道カウンター：2 3

『六武の門』

武士道カウンター：2 4

「チューナー……シンクロする気……」

「レベル3の『六武衆のご隠居』に、レベル2の『六武衆の影武者』をチューニング」

「紫色の獄炎^{しじま}、戦場にて剣を纏う。武の精魂よ、天上凱歌の調べを刻め」

「シンクロ召喚、紫色の剣^{はね}、『真六武衆・シエン』」

『真六武衆・シエン』

レベル5

攻撃力2500

『紫炎の道場』

武士道カウンター：3 4

『六武の門』

武士道カウンター：4 6

「ここで、『紫炎の道場』の効果を発動。このカードを墓地へ送り、このカードに乗った武士道カウターの数以下のレベルを持つ六武衆と名の付くモンスターを特殊召喚できる。レベル4の『真六武衆 - エニシ』を特殊召喚」

『真六武衆 - エニシ』

攻撃力1700

『六武の門』

武士道カウター：6 8

「そして、『六武の門』の効果。このカードに乗った武士道カウターを四つ取り除くことで、デッキまたは墓地に眠る六武衆と名の付くモンスター一体を手札に加える。私はデッキから、『真六武衆 - キザン』を手札に加えます」

『六部の門』

武士道カウター：8 4

梓

手札：0 1

「そして、自分の場に同名カード以外の六武衆が存在する時、このカードは特殊召喚できる。『真六武衆 - キザン』を特殊召喚。そしてエニシとキザンは、自身以外の六武衆が二体以上存在する時、攻撃力をアップさせます」

『真六武衆 - キザン』

攻撃力1800+300

『真六武衆 - エニシ』

攻撃力1700 + 500

『六武の門』

武士道カウンター：4 6

「相つ変わらず長いわねえ」

「もうすぐで終わりますよ。『六武の門』を再び使用。武士道カウンターを二つ取り除き、六武衆と名の付くモンスター一体の攻撃力を、エンドフェイズまで500ポイントアップさせる。この効果を二度使い、シエンとエニシの攻撃力をアップ」

『六武の門』

武士道カウンター：6 2

『真六武衆 - シエン』

攻撃力2500 + 500

『真六武衆 - エニシ』

攻撃力1700 + 500 + 500

「ここでバトル。まずは『真六武衆 - キザン』で、『オシャレオン』を攻撃。漆鎧の剣勢」

「うう……『オシャレオン』が破壊された時、デッキから攻撃力500以下の爬虫類族を手札に加える。『ヨーウィー』を手札に加えるわ」

双葉

手札：2 3

『ヨーウィー』!?!? あのカードはまずい!!

しかし、手札はゼロ、あのカードをどうにかする手段は無い。

「ならば、『真六武衆・シエン』、『氷結のフィッツジェラルド』を攻撃！ 紫流獄炎斬！」

「うああ……！」

双葉

LP：4000 3500

自慢のダークシンクロモンスターは、破壊しました。

「よくも……ゴミのくせに……これ以上あたしをどうこうするんじゃないよ……！」

な！？

「『氷結のフィッツジェラルド』の効果……！ このカードが戦闘破壊された時、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、墓地から守備表示で特殊召喚する……！」

自己再生効果を持っていたのですか！？

『氷結のフィッツジェラルド』

守備力2500

く、これ以上攻撃はできない。

「そして、バトルフェイズ終了時、このカードを攻撃したモンスターを破壊する……！」

まさか！

「地獄に行きな……！ 『真六武衆・シエン』……！」

双葉さんの絶叫と同時に、フィッツジェラルドから放たれた氷がシエンを凍らせていきます。

「シエンの効果を発動！ このカードが破壊される時、フィールドの六武衆と名の付いたモンスター一体を代わりに破壊できる。『真六武衆・キザン』……！」

シエンの受けていた氷を、キザンが庇う形で受け、そのまま凍りつき、砕けました。

「身代わりとか、ひどい効果ねえ。あんたと同じじゃない」

「同じ？」

「そうよ。あたしはあんたの身代わりになってここにいるようなもんなんだから、あんたと同じでしょう」

「……」

「ほら早く進めなさいよ」

「……ターンエンド」

梓

LP：3100

手札：0枚

場：モンスター

『真六武衆 - エニシ』 攻撃力1700 + 500

『真六武衆 - シエン』 攻撃力2500

魔法・罫

永続魔法『六武の門』 武士道カウンター：2

セット 1枚

双葉

LP：3500

手札：3枚

場：モンスター

『氷結のフィッツジェラルド』 守備力2500

魔法・罫

セット 1枚

「あたしのターン」

双葉

手札：3 4

「さーで、どうしようかなあ。まあ何にしてもまずはこいつよねえ。

『ヨーウィー』召喚」

『ヨーウィー』

レベル3

守備力500

「『ヨーウィー』の召喚に成功した時、次のターンの相手のドローフフェイスをスキップする」

くう、私の手札はゼロ。このままでは……

「何が定石よ。あんたの前のターンのプレイングだって、ただ単にモンスターを並べて全滅させただけじゃない。失敗しちゃったけどね」

「……」

「ただでさえ偉そうに、頭首の座にふんぞり返ってるガキが！！これ以上あたしに偉そうにしてんじゃないよ！！ 『氷結のフィッツジェラルド』を攻撃表示に変更！！ バトル！！ シエンと相打ちになって、また戻ってきな！！ どうせそのゴミは魔法・畏じや防げないんだからさあ！！」

シエンに向かってくる、『氷結のフィッツジェラルド』。確かに私の伏せカードで防ぐことはできない。

しかし……

「掛かりましたね」

「あ？」

「『真六武衆・エニシ』のモンスター効果を発動！ エニシ以外の

六武衆が存在する時、墓地の六武衆と名の付くモンスター二体をゲームから除外することで、場のモンスター一体を手札に戻します。この効果は相手ターンでも発動できる。『六武衆の影武者』、『六武衆のご隠居』をゲームから除外し、あなたの場の『氷結のフィッツジェラルド』を、手札ではなくエクストラデッキに戻していただく！」

「はあ!!」

狼狽する双葉さんを尻目に、フィッツジェラルドは光となり、エクストラデッキに戻っていった。

「相手の動きを予測し、そのタイミングを見極めカード効果を使う。これこそが、決闘の定石です」

我ながら偉そうなことを言っていますが、決闘において、彼女に後れを取るわけにはいきません。

「この……このゴミイイイ!!」

また叫んできました。

何です？ 先程までの禍々しさが、更に増している？

「てめえだけは!! 土下座しても許さねえ!! このゴミ屑野郎
おおおおお!!」

何を仕掛けてくる？

「魔法カード『強欲な壺』発動!!」

『強欲な壺』!?

「バカな!？ それは禁止カード!!」

「知るか!! あたしは決闘者じゃない!! そんなもの守る理由

は無い!!」

「なっ!？」

双葉

手札：2 4

「永続魔法『王家の神殿』発動!!」

二枚目の禁止カード!?

「こいつが場にある限り、罨カードはセットしたターンに発動できる!!! つまり、ほぼ魔法と同じようにプレイできる!!! あたしは三枚のカードをセット!!! 一枚目!!! 二枚目の『毒蛇の供物』発動!!! 爬虫類族の『ヨーウィー』を破壊して、あんたの場のシエンとエニシを破壊する!!!」

「シエン! エニシ!」

「二枚目!!! 『リビングゲットの呼び声』!!! 墓地の『DT デス・サブマリン』を攻撃表示で特殊召喚!!!」

『DT デス・サブマリン』ダークチューナー

レベル9

攻撃力0

「三枚目!!! 『強化蘇生』!!!」

あれは、前のターンに伏せてあったカード!

「墓地のレベル4以下のモンスター一体を攻撃表示で特殊召喚!!! このカードを装備して、レベルを一つ上げて、攻守を100ずつアップさせる!!! 対象は『ヨーウィー』だ!!!」

『イピリア』

レベル3+1

攻撃力500+100

……なるほど。フィッツジェラルドに対し、『ヨーウィー』が場にあったことで自己再生効果が使えなかったにも関わらず、シエンとの相打ち後に「戻ってこい」と言っていたわけはそれですか。

シエンと相打ちとなり、それを防ぐために私がエニシを破壊した所で『強化蘇生』を発動し、攻撃力を2600ポイントに上げたフィッツジェラルドでシエンを戦闘破壊。それがあなたの狙いだった

のですね。

「レベル4になった『ヨーウィー』に、レベル9の『DT デス・サブマリン』をダークチューニング!! 再び出てこい!!」 『氷結のフィッツジェラルド』!!」

『氷結のフィッツジェラルド』

レベル - 5

攻撃力2500

「ターンエンドだあ!!」

双葉

LP:3500

手札:0枚

場:モンスター

『氷結のフィッツジェラルド』 攻撃力2500

魔法・罫

永続魔法『王家の神殿』

永続罫『リビングデッドの呼び声』

セット 1枚

梓

LP:3100

手札:0枚

場:モンスター

無し

魔法・罫

永続魔法『六武の門』 武士道カウンター:2

セット 1枚

「くう……」

まさか、禁止カードが出てくるとは思いませんでした……

「私のターン、『ヨウウィー』の効果でドローフェイズはスキップされる……」

「ついでにもう一枚。罠発動『トラップ・スタン』。このターン、このカード以外の罠の効果は無効だよ」

「……」

「どうせ罠だろうけど、一ターン目から伏せてある辺り、大したカードじゃないんだろう。わざわざ伏せておく必要も無かったね」

「……ターンエンド」

梓

LP：3100

手札：0枚

場：モンスター

無し

魔法・罠

永続魔法『六武の門』 武士道カウンター：2

セット 1枚

双葉

LP：3500

手札：0枚

場：モンスター

『氷結のフィッツジェラルド』 攻撃力2500

魔法・罠

永続魔法『王家の神殿』

永続罫『リビングゲットの呼び声』

「あたしのターン」

双葉

手札：0 1

「ふふふ……これであたしの勝ちよ。魔法カード『死者蘇生』」

三枚目の禁止カード。もはや驚きはありません。

「墓地の、そうねえ。『オシャレオン』を召喚すればすぐに終わらせられるんだけど……決めた。『ヨーウイー』を特殊召喚。これで次もあんたのドローフェイズはスキップよ」

『ヨーウイー』

レベル3

守備力500

……このターンで終わらせることができたにも関わらず、時間を掛けて、私をいたぶる気ですね。

「どうせこいつじゃこのターン決められないし、守備表示にしておいてあげる。バトル！ 『氷結のフィッツジェラルド』で、ゴミにダイレクトアタック！ ブリザード・ストライク！！」

「ぐう……うああああ！！」

梓

LP：3100 600

あまりの衝撃に、体が吹き飛び、背中から倒れてしまいました。痛みはありませんが、それ以上にその一撃は、私の肉体以外の部

分に痛みを与えた。

「この、胸の痛みは……まさか、双葉さんの……」

「そうよ。あんたっていう一つのゴミのせいで、あたしがどんな目に遭ってきたか、フィッツジェラルドの攻撃に乗せてぶつけたから分かったでしょう」

「……」

答えはしませんが、確かに、伝わりました。

同時に周囲の空間に氷の壁がそびえた。その氷は、その光景を視覚的に見せてきました。

信頼し、されていた人達からは、一気にその信頼を失い、居場所を追われ、そのすぐ後に捕まり、マーカーをつけられ、来たくもなかった場所へと無理やり飛ばされて。そんな現実を受け入れることもできず逃げ出して。

「残ったのは、あんたや、あんたの家に対する憎悪だけ。どうしてあたしがこんな目に遭わなきゃいけないの。悪いのは、ゴミのくせに必死に人のふりをして、あたし達の居場所を横取りした、あんただって言うのに」

そして、自らの手で陥れるはずだった私は、何もできなかったにも関わらず、家を追われた。そして、サテライトまで逃げてきた。

「あんたにはめられたのにも腹が立つたけど、そのすぐ後にあんたも落ちて、ざまあ見ろって思うのと同時に、何なんだよって思った。あたしが必死の思いで頑張って、失敗したのに、そのすぐ後に落ちてきたんだから。どうせなら、あたしの手で落ちてくれば良かったんだ。そうすれば、あたしがこんな目に遭わずに済んだ」

そして、やがてその憎悪は膨れ上がり、気付けば最も忌み嫌う、決闘モンスターズを手を取っていた。それ以外に、私に復讐する手立てが無かったから。

「そして、あんたが現れた。神がくれたチャンスだって思った。あ

たしをこんな目に遭わせたゴミに復讐できる。これでようやく、あ
んたを殺すことができるって。初めから存在しちやいけなかったあ
んたを。死ぬことでしか、周りを幸せにできないのに必死に生きる
あんたを、殺すことができるって」

……

……そうだ。私は元々、生きていてはならない存在。

だから、両親から捨てられた。生きていく必要無しと判断された
から。

そして、ゴミとしてサテライトで生きた。ゴミをあさり、ゴミを
着飾り、そして、玩具にされ、体の外も内も、全てがゴミになった。
お父さんに拾われた後も、私の心はゴミだった。

そして、息子として愛されることで理解した。私は愛されて良い
人間では無いのだと。

なのに……

ゴミなのに、私は父に愛された……

ゴミなのに、私もまた父を愛した……

ゴミなのに、そんな私を更に汚したサテライトを憎悪した……

ゴミなのに、大勢の人間を愛し、愛された……

ゴミなのに、一つの家の主となった……

ゴミなのに、夢を持った……

ゴミなのに、夢を叶えたいと心から願った……

ゴミなのに、夢を叶えた……

ゴミなのに、私は多くの、大切なものに囲まれた。

「許されないことよ。捨てられたゴミのくせに、そんな生き方をするなんて。生まれてすぐ死ななきゃいけないかつたくせに、あんたは今日まで生きてきた。そして、多くの人間に迷惑をかけて、拳句あたしの人生を奪った。ゴミがそれだけのことをする罪はね、重いんだよ」

「……………そうですね……………そうですね……………」

「分かったんなら、さっさと降参しな。そうすれば、せめてもの慈悲よ。楽に死なせてあげる。本当はあんたが生きてきたっていう罪の分だけ、時間を掛けてゆっくり殺したいところなんだけど、あんたが受け入れたって言うのなら、大目に見てあげる」

「ターンエンド」

双葉

LP：3500

手札：0枚

場：モンスター

『氷結のフィッツジェラルド』 攻撃力2500

『ヨーウィー』 守備力500

魔法・罫

永続魔法『王家の神殿』

永続罫『リビングゲデッドの呼び声』

梓

LP：600

手札：0枚

場：モンスター

無し

魔法・罫

永続魔法『六武の門』 武士道カウンター：2

セツト 1枚

「……感謝に堪えません」

終わらせてくれるのですね。ゴミの生きてきた十六年間。罪しか無い、決して許されなかった、ゴミの十六年間を。

多くの人を欺き、愛と言う感情を知ってしまい、何より生きると言う、数多くの大罪を犯してしまった。なのに、そんなゴミを、楽に死なせてくれる。何と慈悲深い言葉なのだろう。

そのことに、感謝の言葉を掛けながら、私は笑みを浮かべていた。そして倒れた状態のまま、ゆっくりと右手をデッキに近づけました。

「いい加減にしゃがれ!!」

突然の絶叫。同時に私の右手は掴まれ、そのまま引き上げられました。

「な、なに、あんた!?!」

双葉さんは狼狽しています。当然でしょう。直前までいなかった白い着物姿の男が、目の前に現れたのだから。

「梓!」

シエンは私の腕を掴んだまま叫んできました。

「畏だ! 一ターン目から伏せてあるその畏を今すぐ発動しろ!!」

「しかし、私は……」

「いいから発動しろ!! 降参するのはその後でも遅くねえだろうが!!」

あまりにシエンが迫ってくるので、私は仕方なく、セツトされた畏カードを起動しました。

「畏発動『究極・背水の陣』。自分のライフを100にすることで、

墓地に眠る六武衆と名の付くモンスターを、可能な限り特殊召喚できる」

梓

LP：600 100

「呼び出すのは私以外の五人だ」

「……五体の真六武衆、カゲキ、シナイ、ミスホ、エニシ、キザンを特殊召喚」

『真六武衆 - カゲキ』

攻撃力200 + 1500

『真六武衆 - シナイ』

攻撃力1500

『真六武衆 - ミズホ』

攻撃力1600

『真六武衆 - エニシ』

攻撃力1700 + 500

『真六武衆 - キザン』

攻撃力1800 + 300

『六武の門』

武士道カウンター：2 4

一体何をしようと……

発動しながらそう考えた直後、驚かされました。

本来なら鎧を着て現れるはずの真六武衆達が、どういうわけか、全員が普段私と話す時に着る、それぞれの色の着物を着ていたのだから。しかも、シエンのように実体化しているわけではないのに、ほぼ実体化しているように、近くに感じる。

「なに、こいつら、さつきと全然違う」
双葉さんも驚いている。これも当然でしょうね。

『よおおばさんよお』

まず口を開いたのは、カゲキです。

『よくもまあ人の主のことをゴミだゴミだと、好き勝手言ってくれたなあ』

「主って……」

「カゲキ、もしかして、怒ってます？」

『当たり前だ！！』

私が尋ねると、五人とも私の方を向き、叫んできました。

やっぱり怒っています。なぜ？

「あたしがそのゴミをゴミだって決めたわけじゃないでしょう？」

自分のことをゴミだって言ったのはそのゴミ自身でしょうが！

双葉さんがそう返した後、今度はシナイが言いました。

『太婆さんとか言ったかな？』

「双葉さんです……」

『どっちでもいいよ！！』

シナイに指摘したら、怒鳴られました。

『さつきから正論みたいに言ってること、全部無茶苦茶だよ』

「なにが無茶苦茶よ。私は事実を言ってるだけでしょう。そのゴミだって認めてるじゃないよ」

その通りです。全ては事実です。

『あなたは梓のせいで人生が滅茶苦茶だと言いましたが、あなたも自業自得でしょう。私たちも見ていたから知っています。そんな自分を棚に上げて、全てを梓だけのせいにするのは横暴過ぎます』

「なにが横暴よ！？ 全部事実でしょうが！！ そのゴミさえいなければ、あたしはここにはいなかった！！ あたしだけじゃない

！！ 他の親戚連中だって幸せになれたんだよ！！ そのゴミ一つにどれだけ人生狂わされたかあんたら知らないだろうが！！ たか

だか紙切れどもにあたしたちの何が分かるってんだ!? ああ!!

「紙、切れ……?」

ミスホの言葉に返した双葉さんの言葉を聞きながら、その言葉には引っ掛かりました。

『ああ。何も分からない』

今度はエニシです。

『お前たちの都合など知らない。私たちは梓に仕える身だ。だからずっと梓の姿を見てきた。梓は毎日、仕事であちこちに飛び回り、自分以外の人間のために頑張ってきた。自分という存在を投げ出しながら。その上で、お前や、親戚連中への罪悪感さえ忘れていなかった。誰よりも梓は自覚していた。自分の存在による周囲への迷惑を。だからその償いのためにも頑張っていた。お前は、そこまでのことをしたことがあるのか?』

「何でこのあたしがそんなことしないといけないんだ!? 罪悪感があるなら償うのが当然だろう!! 頭首として一番働くのは当たり前だろう!! 今更そんなこと偉そうに語ってるんじゃない!! そいつの努力なんか知るか!! そいつが頑張ってきたから何だ!! さつきから当たり前なこと、ぺちやくちやぺちやくちや偉そうに語ってんじゃない!!」

『……その当たり前前を実現することがどれだけ辛いことか、お前にも分かるはずだ』

キザン。いつも通り物静かな口調ながら、やはり怒気を感じられます。

『この歳でなら当たり前前にできることを、梓は一切できなかった。それを当たり前前にできるようになるまで頑張った。そして、頭首に選ばれ、頭首として当たり前前にできることも、当たり前前になるよう頑張った。できて当たり前前だと周囲が決めつけるのは簡単だ。だが、その当たり前前にできるようになることが最も難しい。お前も、料亭を経営していたのなら分かるだろう。もっとも、当たり前前どころか、社員はすぐクビにし、ケガを負わせ、最悪な食材を使って料理を出

していたらしいがな……」

「あんたらはゴミがあがいてる姿が珍しいからそんなこと言えるだけだろう!? あたしらはねえ、人間なんだよ!!! ゴミの悪あがきと人間の努力を同等に捉えてんじゃねえよ!!! あたしが料亭を経営するのにどれだけの苦労してきたと思っただ!? そのためにどれだけの骨を折ってきたと思ってる!? 赤字をどうにかするために捨てる食材使っしかなかったんだよ!!! 店の方針についていけないっていうから料理人だってクビにしたんだ!!! 店の秘密をばらされそうになったからケガさせて口封じしたんだ!!! それだけ汚い努力をしなきゃ当たり前にはできないんだよ!!! それが人間の努力だ!!! ただ綺麗になろうとするゴミの悪あがきと一緒にするなあ!!!」

「双葉さん……」

そんな事実があつたのか。それなのに私は……

「やはり、私は……」

私が言う前に、シエンが私の胸倉を掴み、引き寄せました。

「お前もお前だ!」

ほとんど口をつけるほど顔を近づけ、叫んできました。

「てめえは自分をゴミだっけ決めてつけて、人として罪を受け止めるのを逃げてただけだ。人としてなら罪でも、ゴミとしてなら言い訳が聞くもんな。何かする度に、そもそも人じゃなくてゴミだから。最初から許されることじゃねえからっつてよ!」

「けどな、お前がこうして生きてる以上、たとえゴミだろうが人として生きるしかねえだろう。でないとなんかの人生、本当に嘘になつちまうぞ。お前の努力、生き様、思いやり、全部嘘になつちまう。そうだろうが!」

「……」

シエンの言葉ももつともです。しかし、

「双葉さんの言った通りですよ。私が今までしてきたことは、人としての努力では無く、ゴミとしての悪あがき……」

「だったら思い出せよ。その悪あがきで、何人の人間がお前に感謝してきたかをよ」

「！」

私の悪あがきが、周囲の人達を……

「お前が教えた書道の生徒達、全員自分の成長を喜んでたよな。琴や三味線の腕が上達した子供が、それを親に披露して、笑顔になった家族だっていたよな。お前の作った和菓子や料理、食べた人間は漏れなく笑ってたよな。そしてお前も、それを喜んでたよな」

「それは……」

「粹！！」

私が考えようとした時、また双葉さんが私を呼びました。

「そんな紙切れの言うことに耳を傾ける必要無いわよ！！」

「紙切れ……！！」

またその単語が気になりましたが、その前に声を出しました。

「その生徒や顔見知りたちだって、全員あんたがサテライトのゴミだって知った途端手の平を返したじゃない！ 雑誌読んだわよ！あれこそあんたがゴミだって証拠よ！ あんたは結局、人としてしか見られてなかった！ ゴミだと分かった途端全員があんたを拒絶した！ あんたが生きてきた時間、無意味だったっていう証拠よ！」

「……」

双葉さんの言っていることは正しい。私はやはり……

「じゃあ、私達はどうか？」

シエン？

「あなた達……」

「そつだ。そんなゴミに仕えてきた私達の存在まで、お前は無意味だって言う気か？」

「!？」

「私達だけじゃねえな。お前のことを、ゴミだと知った上でずっと愛してきた親父さんや、大谷って秘書のことも、お前は否定する気か？」

「違う」

「だってそうだろう。私達や、あの二人がいるだけで世界一の果報者だ。その言葉も嘘ってことじゃねえか」

「嘘じゃない！ あなた達への思いを嘘だと思ったことなど、一度も無い!!」

叫びながら、私の目には、涙が湧き出ていた。

「私は、幸せだった……けど、ゴミとして、それを感じるのが怖かった……どれだけ愛されようと、人としてだから……私は嘘をついていた。人である……ゴミではなく、人である……そんな嘘がばれて、あなた達にまで嫌悪されるのが、何よりも怖くて……」

ポン

全てを言い切る前に、私の肩に、手が乗せられる。

「シエン……」

「見てみる」

言われて前にいる五人を見ると、全員が私を見ながら、笑っている。

「一人でもいるか？ お前を嫌いになつた奴が」

「……」

「……いない。」

誰も、嫌悪の目を向けている者は、一人もいない。

「全員お前が好きなんだよ。私もな。お前は胸を張ってればいいんだよ。お前は私たちの主なんだ。私たちは、自分達が仕えるに相応しいって思った人間にしか仕える気は無い。お前がそうだ。私たちの、主だ」

「……」

「いい加減にしろ!!」

また双葉さんの声。

「何が仕えるに足るだ!! 紙切れがさつきから偉そうにくっちやべりやがって!!」

「紙切れ……」

「あんたらが仕えるのが人間だって言うならあたしに仕えるよ!! 今すぐそのゴミ破棄してあたしに仕えるよ!! ボロボロの紙屑になって死ぬまでこき使ってやるからあたしに今すぐ仕えるよ!!」

「悪いなおばさん。私達は人間に仕えても、我がままなガキに仕える気は無いんだ」

「はあ!？」

「あのなあおばさん……」

シエンの言葉を、私は途中で遮りました。そして、前に出ました。

「何だよゴミ!! お前はさっさと降参しやがれ!! そして今すぐ死にやがれ!!」

……もうこれ以上、あなたの言葉は意味を成さない。

「あなたの言うことは正しいのかもしれない。しかし、一つだけ許せないことがある」

「あん!？」

「彼らを……私の友を、紙切れだと言う暴言を、許すことはできない」

「ゴミが生意気言ってるな!! 紙切れを紙切れだって言うてなにが悪いんだ!？」

彼女の言葉を無視し、私はディスクに手を伸ばしました。

「『真六武衆・ミスホ』の効果。一ターンに一度、自分フィールド上の六武衆一体をリリースし、フィールド上のカード一枚を破壊す

る。『真六武衆・キザン』をリリースし、あなたの場の、『氷結のフィッツジェラルド』を破壊します」

「なあ!!!」

「『氷結のフィッツジェラルド』の自己再生効果が発動するのは戦闘破壊時のみ。効果破壊では蘇ることはない」

「『六武の門』の効果発動。武士道カウンターを四つ取り除き、墓地に眠る『真六武衆・キザン』を手札に加えます」

『六武の門』

武士道カウンター：4 0

梓

手札：0 1

「そして、場にキザン以外の六武衆が存在する時、『真六武衆・キザン』は、特殊召喚できる」

『真六武衆・キザン』

レベル4

攻撃力1800+300

「はあ!!!」

キザンは先程とは違い、鎧を着て現れました。

そして、キザンの登場と同時に、後の四人も着物から、いつも着る、鎧姿へと変わった。

「バトル……」

「ゴミ!!! お前、自分のしよつとしてることが分かってるのか!!!
! ゴミがこれ以上人間様を傷つけていいと思ってるのか!!!」

シエンに言った通りだ。私は逃げていた。私の罪から。

人として生きることと早々に放棄し、自分をゴミだと言い聞かせ

ること、罪悪感からの逃げ道としていた。人としての罪を、ゴミとして生きているという罪で塗り固めて、ゴミだからと、毎日言い訳をしていた。

「てめえ!! 無視すんじゃねえ!! さっきは楽に死なせてやるって言ったけど!! 絶対楽には死なせねえからな!! 一生かけてでも苦しめて、苦しめて苦しめて苦しめて殺してやるからな!!

おい!! 聞いてんのかゴミ!!」
罪から逃げる罪。その罪が憎い。
しかし、

「私の罪を裁けるのは、私の友たちだけです」
そう言つと共に、真六武衆達は構えました。

「ひっ!!」

「五色の剣よ、私を抉れ!!」

五人が一斉に向かい、フィールドに残っていた『ヨーウイー』を切り裂き……

「ああああああああああああ!!」

同時に、双葉さんを切り裂いた。

双葉

LP:35000

「私の罪を憎む……」

ライフが0になった瞬間、周囲にそびえた氷の壁も、音を立てて崩れた。

……
……
……

「ふざけんな……ゴミのくせに……この、あたしを……」

双葉さんはその場に倒れ、私を呼んでいる。

「双葉さん……」

「手遅れだな」

シエンが隣に立ち、私に話し掛けてきた。

「俺もあまり詳しいわけじゃねえが、こいつの言った闇のゲーム、負けた方が死ぬって話だったが、仕掛けられた方ならともかく、仕掛けた方が死ぬほどのダメージを喰らうことは無え。けど、こいつは禁止カードっていう、決闘の掟を破る行動を取った。しかも、それだけのことをしながら負けた。もう助からねえよ」

「……」

ぴくぴくと体を震わせながら、私への暴言を繰り返す咳く双葉さん。

その姿が、あまりにも嘆かわしく、痛ましく、そして哀しい。

私は、そんな双葉さんの前に座り、双葉さんを抱きよせ、そして、抱き締めた。

「今まであなたの感じてきた不満を、全て吐きだして下さい。私が全て、受け止めますから。それしか、私にはできることが無いから」

「……」

それから一時間、いいえ、二時間は経ったかもしれない。

その間、双葉さんは、私への暴言を繰り返した。私が拾われてきてから今日までの六年間。ずっと胸にため込み、言葉に出来なかった私への思い。罵り、蔑む言葉を繰り返す。その一つ一つを、私は言った通り、全て受け止めた。

私と言う存在によって、起きてしまった一人の女性の没落と、死。その現実を忘れないために。その事実を、これからの私への戒めとするためにも。

そして、声も徐々に小さくなっていき、やがて、その声は聞こえ

なくなつた。

そして気が付くと、双葉さんは、体を塵へと変え、風と共に消えていった。

「双葉さん……」

彼女の名前を呼びながら、涙が地面に流れ落ちた。

キイイイ

突然、目の前が光り出した。

「これは……」

その光は徐々に小さくなり、やがて、一つの形に。それは、あまりにも見慣れた、カードの形。

「あなたは……」

何のカードか、すぐに分かりました。それを手に取った瞬間、そのカードは更に白く光ると同時に、それまで纏っていた黒いオーラを脱ぎ捨てるように、黒から白へと変わる。

「これがあなたの、真の姿、ということですね……」

なぜ元に戻ったのかは分からない。戻る前の面影も、カード効果に残っている。

それでも、それはまるで、今までの偽りの自分から解放されたことに、喜びを浮かべているようにも見えました。

「お前のおばさんを思う気持ちが、そいつを変えたんだぜ。きっとシエンの言葉が事実かどうかは定かではありませんが、それでもあなたが、こんな私と共にいてくれると言っのなら、

「共に行きましょう。そしてこれからを、共に生きましょう」

もちろんあなたただけではなく、

「あなた達も、私と共に」

後ろで並んで立っている、真六武衆たちにも語り掛ける。また全員が、私に笑顔を向けてくれた。

それだけで私は、幸せを感じた。

誰かを愛し、愛されることの喜び。人としての喜びを。

第十二話 氷結の夢、花の罪（後書き）

お疲れ〜。

ほんじゃあオリカ行ってみよ〜。

『ヨーウイー』

レベル3

地属性 爬虫類族

攻撃力500 守備力500

このカードの召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、次の相手のターンのドローフェイズをスキップする。

遊戯王DMにおいて、大下（BIG5の『深海の戦士』）が使用。ただ召喚するだけだから明らかに『八汰鳥』の上位互換。当時ならともかく今だとブリーユーナクとかもいるから悪用し放題。OCG化マジ勘弁なカードの一枚。

『強化蘇生』

永続罫

自分の墓地に存在するレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚し、このカードを装備する。

装備モンスターはレベルが1上がり、攻撃力、守備力を100ポイントアップさせる。

このカードが破壊された時、装備モンスターを破壊する。

遊戯王5D'sにおいて、ジャック・アトラスが使用。

便利っちゃ便利なカード。召喚するモンスターにもよるけど、たとえば今回みたいにレベル調整にも使えるしね。

続いて原作効果。

『氷結のフィッツジェラルド』

ダークシンクロモンスター

レベル - 5

水属性 悪魔族

攻撃力2500 守備力2500

チューナー以外のモンスター・ダークチューナー

このカードはシンクロ素材となるチューナー以外のレベルからダークチューナーのレベルを引き、その数値が - 5 に等しい場合のみシンクロ召喚することができる。

このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動する事ができない。

このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時に自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードを自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、このターン『氷結のフィッツジェラルド』を攻撃したモンスターをバトルフェイズ終了時に全て破壊する。

強いねえ。まあダークシンクロの手間を考えれば当然な気もするし、それでいてバランスも取れてるのが良い。

OCGじゃ破壊効果は無いって蘇生するときゃ手札コストいるしね。

あと、『死者蘇生』で当時禁止だったよな。

どっちみち5D・sの世界じゃ禁止だから誰も使わなかったんじゃ

ろうけど。

あとに二枚は文句無いでしょう。『王家の神殿』は問題外の壊れだし、『強欲な壺』も便利すぎて逆にアレだしね。

こんなところかな。

んじゃ、そういうことで、次も頑張るから待っててね。

第十三話 花の帰還、葛藤と決意（前書き）

お久しぶり〜。

そして、時間がかかってすまん！

待ってた人がいたら心から謝る。

んじゃ、これ以上は長くなるから、行ってらっしゃい。

第十三話 花の帰還、葛藤と決意

第十三話 花の帰還

視点：梓

新たな友と出会い、友たちとの友情を感じている時でした。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

そんな、地面が揺れるような轟音と共に、何やら得体の知れない邪悪なものを感じた。

そちらの方向を見ると、

「なあー!!」

あまりの壮絶な光景に、驚愕の声が漏れてしまった。

遙か遠くの場所で、地面が青色に、ぼんやりと、しかし強く光っている。

あの色は、見覚えがあるどころか、直前まで目の前に広がっていた光景。双葉さんとの決闘中、私たちを囲んでいた青色の炎。それに間違いない。

しかし、それ以上に目を引いたのが、まっ黒な雲が広がる空に、浮かび上がった巨大な絵。以前何かの本で見たことがある。確か、ナスカの地上絵。そのうちの一つ、『巨人』。

そして、その巨人が実体化したような、巨大な一つ目の、モンスター？

それらの光景と、先程までの事実から、分かることは一つ。

誰かが先程の私と同じように、『闇の決闘』とやらを行っている。しかも、私の行ったものとは比べ物にならないほど、過酷な決闘に間違いない。

瞬時にそれを確信し、立ち上がりました。

「待て梓！」

シエンがそんな私の手を取り、制止してきました。

「あれはかなりヤバい。近づくな！」

シエンだけでなく、五人もそんな目を向けている。それも当然と言えましょう。私ですらかなりの危険を感じるものに、決闘モンスターズの精霊である彼らが何も感じないはずは無い。それが、危険ならなお更でしょう。

しかし、だとしてもです。

「今、目の前で誰かが苦しんでいる。それを傍観することなどできるはずがない！」

「梓！！！」

シエンの声が聞こえた瞬間には、私は走り出していた。

視点：クロウ

「『地縛神

ココバク

C c a p a c

アプ

A p u 』

で、遊星にダイレクトアタック！！！」

鬼柳の召喚した、地縛神とかいう超巨大なモンスターの腕が、遊星に向かって伸びていく。しかも、遊星を守るために飛び上がった『スターダスト・ドラゴン』をすり抜けて。ヤバい！ただでさえダメージが実体化するこの決闘で、あんなバカでかい腕がぶつかってきたら！！

「遊星！！！」

「遊星！！！」

俺と、ヘリの上にいるジャックが同時に叫んだ時だった。

遊星の乗っていたDホイールが変な音を立てたと思っただ直後、そのまま前輪が壊れて、遊星が投げ出された。

Dホイールの故障。それによって、自動的に決闘も中止になった。

「Dホイールの性能の悪さに救われたな」

鬼柳が遊星に近づき、二言三言話した後、そのまま走り去っていった。地縛神は地面に消えて、燃えていた地上のライディングコースも消えた。

『遊星!!』

全てが消えたところで、ラリー達三人が遊星に近づいて、仰向けの体勢にすると、

『!!』

金属片が、遊星の腹に深く刺さってやがる!!

「遊星……」

「触るんじゃねえ!!」

Dホイールで近づきながら叫んだ。ラリーが金属片に触ろうとしたが、無暗に触ったら余計にヤバイ。ちゃんとした医者に診てもらわねーと。

「俺のDホイール乗せる! 俺がマーサハウスに連れていく!」

そう言って、三人は遊星を支えて俺のブラックボードに乗せようとした。

「待つて!!」

急に、そんな悲鳴みたいな甲高い声が聞こえた。

そっちを見ると、

「な、お前は!」

そいつは、昼に俺とライディング決闘を繰り広げた男、水瀬梓。俺達が驚いているうちに、そいつは遊星に近づいた。

「そのまま寝かせて下さい」

そう三人に指示を出した。けど突然現れたからまだ驚いてやがる。
「早く!!」

そのでかい叫び声で、三人はようやく遊星を地面に仰向けに寝かせた。

そして、

「……………」

梓は、遊星に手を触れようとしたけど、その手を止めて、顔をしかめた。そして、その拳を握って…………

(彼に罪は無い…………彼に罪は無い…………彼に罪は無い…………彼に罪は無い…………彼に罪は無い…………彼に罪は無い…………彼に罪は無い…………彼に罪は無い…………彼に罪は無い…………)

(彼に罪は無い! 助ける!!)

何か苦悩してたみたいだったけど、しかめた顔を元に戻しながら、作業を始めた。ラリー達三人に指示を出しながら、自分も色々と手を動かす。そして、

「三人とも、彼の両手足を押さえて」

言われた通りにしたところで、梓は遂に、金属片に手を伸ばした。

「ぐう……………」

遊星が呻き声を上げた。

「痛みで暴れるかもしれませんが。だから強く押さえておいて下さい」
そういうことか。理解した所で、また金属片をしっかりと持つ。

「いきます」

そして、

ズブツ

「うあ!!」

一気に引っこ抜いた。けど抜く前に色々と処理したから出血は無

え。

それでもさすがに痛みまでは止められなかったんだな。抜かれた瞬間、遊星は体をでかく反り上げた。それをラリー達が必死に押さえてる。

「そのまま押さえて！ 患部を押さえます！」

また大声で指示を出して、今度は自分が腰に巻いてた帯を外した。そしてそれを、暴れてる遊星の腹に巻き付けた。

「……これで良い。少なくとも出血は押さえられる」
すげえ……

俺達は何も出来なかったのに、指示を出したりしながら、多分完璧な応急処置を、かなりの手際で施しやがった。

「彼は私が運びましょう。サテライトのような、地面の凹凸が激しい場所では乗り物より、人の足の方が良い」

梓はそう言いながら、遊星を抱え上げた。

「クロウさん」

「おっ、おう！」

「マーサハウスへ、案内して下さい」

「おお！」

俺も返事をして、Dホイールの方向を変える。

そのまま走らせて、後ろから梓が走ってついてきた。

……

……

……

視点：梓

何の因果と言うべきか。サテライトへの憎悪から、絶対に行かないと心に決めていたマーサハウスに、共にフォーチュンカップを戦

った不動遊星さんを助け、その流れのままマーサハウスに来てしまった。そして、一泊し、今は朝を迎え、私は朝日を眺めていた。

「……助かって良かった」

心の底からそう思えます。あの後すぐに遊星さんは医者の方に診て貰い、手術をし、無事に回復した。応急処置が功を奏したと言つて下さった。

たとえ、サテライトの人間でも、命の重さは変わらない。目の前の消えそうな命を傍観することは出来なかった。それで良かったと思える。憎悪があるとはいえ、そこに生きる人間に罪は無いのです。

「梓」

声が聞こえ、振り返ると、クロウさんが立っていました。

「これ、まだ血は少し着いてるけど」

遊星さんのケガに巻いた帯。それを差し出してきた。

「……」

手を伸ばし、取ろうとして一瞬止まってしまいましたが、すぐにまた手を伸ばし、受け取りました。

「ありがとうございます。遊星を助けてくれてさ」

「……当然のことをしただけです」

それだけ言つて、私は朝日に目を戻しました。

彼が悪い人でないことは分かる。しかし、私の憎悪するサテライトの人間。彼のことを憎いとは思わない。なのに、それ以前の、釈然としない感情が私の中にある。どうしてこの人と共にいられるのか。私は彼とどうしていたいのか、と。

彼は私をどう思っているのでしょうか。態度の悪い男、無愛想な男、失礼な男、無礼な男、想像すればそんな悪い印象しか浮かんでこないものの、それでも、そう思われる接し方をしているのだから仕方が無い。どれだけの事実や過程があろうとも、結局のところ、私のサテライトに対する感情の本質は、憎悪なのだから。

そう思いながら視線を落とした時、

「？」

何かが目に飛び込んできました。まさかと思い、それに近づいてみると、

「これは……」

「ああ、カードだな」

何度見ても間違いない。裏側になったカードが四枚、目の前に落ちてている。

「よくあるんだよ。使えないってんで捨てられてよ、遊星も、そうやって拾い集めたカードで今のデッキを作ったんだ」

「よくある話し、なのですか……」

「お、おお」

「……私は一枚も拾うことができませんでした」

「え……」

なぜかは分かりません。しかし、サテライト中を歩いてても、一枚も見つけることは出来なかった。時々目にするテレビを見ながら、何度もやってみたいと思っていました。それでも出会うことは無かった。

しかし、彼の様子からして、どうやらカードが落ちていることは、本当に珍しくないことのようなのだ。運が悪かったのか。それとも、サテライトの方こそ、私を嫌っていたのか。

「良かったじゃねえか」

クロウさんが、笑いながら話し掛けてきました。

「じゃあお前にとって初めて拾ったカードってことだ。こいつらもきつと、お前に拾われたくてここに落ちてたんだ」

「私に？」

「ああ。拾ってみるよ」

「……」

言われた通り、拾ってみます。そして、表にしてみると、

「……！」

「おお、運が良いな。シンクロモンスターまであるじゃねーか」

確かに、モンスターカードが三枚。そのうち一枚がシンクロモンスター。そして、残り三枚のカードも、まるで今の私がかここに来ることを分かっていたかのように、今私の欲しているカード達。

「……ありがとう」

偶然落ちていただけなのか、それとも本当に待っていてくれたのか、それは定かではありません。それでも、サテライトという、私の忌み嫌ってしまった場所で、それでも待っていてくれたというのなら、私もそれに応えたい。

共に戦っていきましょう。これから……

「朝ごはんだよー」

マーサさんの声が聞こえた。

「梓も中に入りな。一緒に食べよう」

「行こーぜ、梓」

クロウさんが言いながら、私の手を引こうとしましたが、
「……」

また、その手から逃げてしまった。

「おい、梓……」

「すみません……」

一言だけ謝り、私はその場から走ってしまった。

マーサさんの顔を見て、そして、クロウさんを見て、また恐怖が蘇ってしまった。

それでこの場にいたくないと感じ、逃げてしまった。

情けない話だ。「彼に罪は無い」。そう言い聞かせ、不動遊星さんに手を触れ、助けた直後だというのに、その友人達と接することもできないとは。

憎しみとは恐ろしい物だ。サテライトへ戻り、つくづくそう感じ

ました。どれだけ正しいことを自分に言い聞かせ、自覚させても、心以前に体がそれを拒絶する。受け入れるべき事実から逃げ、憎しみだけに縋りつくように、否定と言う愚行こそが肯定なのだと言令するように。

人を憎みたくない。その思いはサテライトでも変わらない。なのに、心でそう思っていて、体はずっと憎悪したままだ。

フォーチュンカップでも思ったことが、また私の心に蘇った。

どうして人を憎める……どうして怒りなど覚える……どうして私は、こんなに……

マーサハウスが見えなくなる距離まで走ってきたところで足を止め、振り返った。

もう二度と、あそこへ行くことは無い。そう願いたい。

もう二度と、優しいあの人達に、こんな感情を抱かないために。

そして何より、憎悪からただ逃げることしかできない、愚かで情けない姿を、あそこにいる優しい人達に見せたくなかった。

……

……

……

視点：クロウ

「……ありがとう」

三枚のカードを見ながら、梓は目を閉じて、礼を言った。

その姿がめっちゃくちゃ綺麗だった。こいつ、本当に決闘が大好きなんだな。

今まで何度かこいつを見た中で、綺麗な奴だっと思ってた。普通に話してる時も外見は普通に綺麗だし、ライディング決闘で走って

る姿も、何て言うか勇ましい綺麗さがあつた。決闘の後で、俺のこ
とを恨みの目で見てる時も、全体の姿が綺麗だつて思った。

けどその中で、カードを手に笑つてる今が一番綺麗だつて感じた。
ただ外見が綺麗つてだけじゃねえ。そのカードを取つた途端、ただ
でさえ光つてた梓がもつと光つてる感じがして、とにかく今まで以
上に綺麗だつて感じたんだ。

まるで、梓が決闘を好きなのは当然として、決闘も梓のことが好
きだつて思つてるみたいだ。

「朝ごはんだよー」

子供の頃と同じで、また梓に見とれてる時、そんなマーサの声が
聞こえた。

「梓も中に入りな。一緒に食べよう」

いきなりだったが、そう考えたら腹減つたぜ。

「行こーぜ、梓」

梓に呼び掛けながら、手を取ろうとした。そしたら、

「……」

昨日と同じ、手を取ろうとしたら、顔をしかめながら離れた。

「おい、梓……」

「すみません……」

深刻な顔で謝ると、そのまま消えちまった。

「梓……」

「そっかい。やっぱ、今でもサテライトを恨んでるんだろうねえ……」

サテライトを恨んでる。マーサのその言葉と、この間の決闘の後
で見た梓の目を見て、納得した。

何があつたのかは分かんねえ。けど、梓は子供の頃から、マーサ
ハウスや仲間達がいた俺達と違って、たった一人でサテライトで生

きてきたんだ。成長した今になって、サテライトを恨むくらいの何かがあつたつて不思議じゃねえ。むしろ、何も無いことの方がおかしいくらいだ。

けど、それでもよ、俺達は、お前が恨みを持つような人間じゃねえ。

今までは、ただサテライトの人間つてことで見下されただけだったけど、あそこまではつきりした憎悪と拒否を見せてくる人間は初めてだった。だから、梓にはそのことを分かつて欲しかった。お前がサテライトを恨んでるんだとしても、俺達は、お前が恨みを抱くことになつたようなことは絶対しねえつて。

いや、むしろ優しい梓のことだから、とつくに分かつてんのかもしれねえ。本当に恨んでるだけなら、遊星のことを助けてくれるわけねえし、決闘に対してあんな顔を見せるわけがねえ。分かつた上で、それでもサテライトへの恨みから、俺達のことを受け入れられねえつてことかもしれねえ。

そう考えるとまた分からなくなる。どうすれば、梓は俺達を受け入れてくれるんだ。

俺達が、梓のためにしてやれることつて、何も無いのかよ……

……

……

……

視点：梓

「シエン」

サテライトを歩きながら呼び掛けると、シエンは姿を現した。

「昨夜の邪悪な巨人。空に現れたナスカの地上絵と言い、一体何なのでしょうっ？」

シエンは暗い顔で、口を開きました。

『……聞いたことがある。ナスカの地上絵として封印された巨大なモンスター。確か……』地縛神』』

「地縛神……」

『俺も詳しいことは知らねえが、確か今から5000年前に、シグナーとかいう五人の決闘者が、五体の竜と一緒に封印したらしい』』

「ということは、五千年経った現在、その地縛神が蘇り、災いをもたらしているということですか？」

『そういうことになるな』』

地縛神……恐ろしい存在だ。

けど、同時にある疑問も浮かんだ。

「しかし、なぜあなたはそんなことを知っているのです？」

『なぜってそりゃあ……俺だって、決闘モンスターの歴史はそれなりに学んでるし。一応は一国を束ねる身だからな』』

「え……ということは、シエンはいわゆる、殿様ということですか？」

『ああ』』

「……」

『何だ？ そんなに意外か？』』

「……いいえ。納得しました。大勢の人に愛されているのですね」

『あー、まあな』』

何やら照れくさそうですね。

初対面の時は、それこそ大きな子供のような方だと思った物ですが、共に過ごしていく中で、最初の印象とは全く違っていった。そして、私が彼のもとに辿り着いた時以来、その姿は大変頼もしく感じられた。しかも、私が悩む度に現れてくれて、私に最も必要な言葉を掛けてくれる。きつと、私以外のたくさんの人にもそうしてきたのですね。

「……ちょっと待って下さい」

そこまで思った時、思い出しました。

「地上絵は巨人だけではない。封印された地縛神は、一体ではないということですか？」

『ああ。そういうことになるだろうな』

「ということは……サテライトだけでなく、シティに現れる可能性も……」

『……あるかもしれねえ』

「大谷さんが！ お父さんが危ない！」

それが分かり、私は大急ぎで走った。

『おい、梓、どうする気だ！？』

「シティへ戻ります」

『戻ってどうする？ 仮にお前の考えたことが起こったとして、シグナーでもないお前にどうにかできるのか？』

「分からない。分かりませんが、それでも、彼らの無事は私が守りたい」

『しかしどうやって戻る？ また泳ぐ気か？』

「それはできない……これだけはしたくありませんでしたが……」

『え？』

「シティからサテライトへは、ゴミ運搬用のパイプラインが繋がっている」

『まさか……』

「ふふ……」

パイプラインの通っている工場に着き、私は刀を取り出した。

なぜでしょう……これからはほぼ犯罪である行為を行おうとしているというのに、この胸の高鳴りは……

『梓……お前今、かなり悪い顔してるぞ……』

「気のせいですよ……」

ふふふふ……

『ちよつと、梓……………』
『なぜ笑っているのですか……………?』

シナイとミズホも声が聞こえた気がしましたが、この際気にしません。

参ります。

……

……

……………

ある程度頑丈な作りでできているはずのドアも、簡単に斬ることができ、中に入れました。本来ならずつと作動しているはずのパイプラインも、極めて原始的な方法で止めることができました。

「サテライトにあるからでしょうか？ 建物や機械の作りというのも思っていたよりは脆いものですね」

『……………』

「どうかしました？」

『いや、何でも……………』

六人とも妙に顔が歪んでおりますが、まあ気にはしません。パイプラインの入口へと進みます。

「距離としては、およそ二十キロと言ったところでしょうか」

『本気の梓なら一分でところか』

「……………いえ。昨夜からずっと走ってばかりで、少し疲れました。歩きます」

シエンに言いながら、私は歩きました。

何やら不思議な気持ちになります。サテライトとシティ。こつま

で扱いに差がある二つの都市が、こん小さな筒一つで確かに繋がっている。シティにとつて不要なものを、サテライトへ捨てるという目的一つのためだけに。歩きながら目にするいくつものゴミが、まさにそれを象徴していると言つて良い。

そう。不要になつたから、シティからサテライトへ送られてしまふ。こんな、無機物でできた道。そんな、あつて無いような繋がりに通して。

「……やはり許されない。こんな小さな繋がりで、シティとサテライトを格付けするなど……」

『そう思つか？』

「ええ。こんな繋がりでしか無いから、私のような人間が生まれてしまふ。持ちたくも無い憎しみも、持つべきではない差別の心も、こんな繋がりでは生まれて当然です。間違っている。明らかに間違っているのに、誰もが現状にばかり甘え、何も変えようとはしない。そんな愚かな人間は、私一人で十分だ！」

ガンッ

叫びながら、怒りに任せ刀でダクトを叩き、その音が響く。

『私一人つて、梓がか？』

「だつてそうでしょう！ 頭首と言う座を言い訳に、仕事を逃げ道に、サテライトのことを考えないよう生きてきた。サテライトに生きる人達、遊星さんにマーサさん、クロウさんも、悪い人ではないのに、なのに私は、誰とも接しようとしなない。話をしたくない。関わりたくない。そんな気持ちばかりだ。今まで多くの人達と、教室の先生として接してきた私が、結局は差別してしまっている。サテライトへの憎悪を言い訳に」

『言い訳つて言ってるけど、それも明確な理由じゃねえか』

「理由があるが無かるうが、そんな感情を持ってしまった時点で、私は、人として最低な存在と化している……」

「梓……………」

「あり得ない未来だとは思いますが、もし私が頭首に復帰したなら、必ずサテライトへの差別を無くしてみせます。どれだけの時間が掛かるうが、どれだけの非難を浴びようが、サテライトへの憎悪を克服して、必ずです。サテライトで生まれ、シティで育ち、どちらの姿も知っている人間として、必ず」

思いを口にしながら、歩を進めていきました。

……

……

……

数時間歩き、ようやく出口へ辿り着きました。が、

「こいつはひでえな」

そこには既に、大量のゴミが道を塞いでいる。すり抜けるための隙間さえ無い。

「仕方が無い」

溜め息を吐きながら、刀を目の前に。

「完全に物にしたな。今まで二回しか使ってねえつてのに、大したもんだ」

シエンのそんな声が聞こえましたが、今はどうでも良い。

「刃に咎を！ 鞘に贖いを！！」

ドオオン！！

抜刀し、走り抜け、ゴミの山を斬りつけ、また元の位置へ。

その間に、ゴミには巨大な斬れ目が生まれ、そこから崩れていき
ました。

「これがあなたの罪だ」

そしてまた、刀を鞘に納める。

『気になってたんだけどよお……』

またシエンが話し掛けてきました。

『技を出す前と後に言ってる、そのセリフ何だ？』

『これは……いえ、何となく。自然と口から出たものですから』

『へえ。俺も今度言ってみるかな』

『シエンがですか？』

『ああ。嫌か？』

『……いいえ。お好きにどうぞ』

笑い合いながら話しました。

そのすぐ後に、パイプラインの入口を切り裂き、外へ出ました。

……

……

……

どうやらのんびりし過ぎたようだ。サテライトを出た時はお昼前だったというのに、シティへ出ると、既に日は沈み、暗くなっている。

『まずは病院へ向かいます』

もちろん入ることはできませんので、近くの高いビルから覗くだけになりますよすが。

『お父さん……』

ビルの上から病院を眺めていると、上手く隠れていますが、数人のマスコミが張り込んでいます。

『面倒ですね』

『それだけお前が注目されてるってことだな』

『あまり嬉しくはありませんが……』

どの道、これでは近づけませんね。

しかし、窓から見た辺り、元気そうにやっているようだ。シテイにも異常らしい異常は見られない。

「取り越し苦労でしたでしょうか。それなら何よりなのですが……」
さあ、次は大谷さんです。

ガシャアアアアアアン！！

かなり遠くからですが、ガラスの割れる音が聞こえた。そちらを見ると、

「っ！！ ああ！！」

考えるよりも先に、私は走りました。

あまりに遠くて顔は見えない。しかし、間違い無く、人が一人、ビルから落ちている！

「間に合って下さい」

間に合って……

間に合え！

「うわああああああああああああああああああああ！！」

ズドオン！！

轟音と共に、その人は、小屋の上に着地した。

中に入ると、

「そんな……」

深く沈んだ地面の上で、横たわっている女性は動く気配を見せない。

あと十数秒、反応が早かったなら……

彼女の周囲に散らばったカード。その一枚を手に、感じた。彼女も、決闘が好きだったのですね……

「くう……」

後悔に、悲しみに、目を閉じた……

その直後でした。

カアアアアアア

目の前で冷たくなった女性が、急に光り出した。

「こ、これは……うわー！」

その光の衝撃に、小屋から投げ出されてしまった。

立ち上がったもう一度小屋に入ってみると、既に女性は消えていた。

「どうして……」

夢……いや、違う。私が右手に持つ一枚のカード。これが、現実であったという何よりの証。

あの高さからでは、私ですら助からない。間違い無く即死でした。なのに、消えている。誰かが運んだという形跡も無い。まさか、生き返ったと言うのですか？

何が起こったかは分からない。しかし、やはり今シティに、得体の知れない事態が起こっている。それも、危険な事態が。

「お父さん……」

瞬時に判断し、道を引き返した。

病院まで数十メートル。その場所まで来た時、私は足を止めた。

「……」

私を見ても、声は出さない。それでも、すぐに分かった。

「……大谷さん？」

名前を呼び、初めて彼は私を見ようでした。

「……家元……」

彼が私を呼んだ瞬間、

ボアアア

「っ！！ これは！？」

また周囲に青色の炎が！？

「……嘘でしょう、大谷さん！！」

「……家元……決闘を……」

言いながら、彼もまた、経験の無いはずの決闘の、決闘ディスクを構えた。

「……あなた、誰です？」

姿は大谷さんに違いない。しかし、彼の様子から、大谷さんであつて別の存在。そう確信しました。

「……」

「……答える気はありませんか？」

私は一枚のカードを取り出し、

ヒュッ

投げてみましたが、大谷さんはそれを軽く避け、そのままカードは炎の外側の地面に突き刺さる。どの道大谷さんにとって、こんなものは攻撃のうちにも入らない。やはり大谷さん本人には違いないようだ。

「……良いでしょう。決闘がしたいのなら受けて立ちます。しかし、あなたが誰かは知りませんが、私の大切な人を利用する罪は、償つて頂く」

私も大谷さんにならない、ディスクを展開させました。

「家元……」

「参ります」

「決闘！！」

第十三話 花の帰還、葛藤と決意（後書き）

お疲れ〜。

決闘は次回からね〜。

そういうわけで、ちょっと待ってて。

第十四話 見えざる闇と希望（前書き）

どうもね。

例によってオリカ満載。

そのこと踏まえつついつてみよ。
じゃなかった。行ってらっしゃい。

第十四話 見えざる闇と希望

視点：梓

「決闘！！」

大谷

LP：4000

手札：5枚

場：無し

梓

LP：4000

手札：5枚

場：無し

「先行は私……」

大谷

手札：5 6

大谷さん。彼もまた、私のそばにいたとは言え、決闘は全くの未経験。操られているとは言え、彼はどんな戦略を……

「『ネクロソルジャー』を守備表示……」

『ネクロソルジャー』

レベル4

守備力0

確か、相手のスタンバイフェイズ、つまり私のスタンバイフェイズごとに、手札がデッキから同名カード一体を特殊召喚する効果。つまり、最大もう二体を呼び出すことが可能。

「カードを二枚伏せ、ターンを終了……」

大谷

LP：4000

手札：3枚

場：モンスター

『ネクロソルジャー』 守備力0

魔法・罫

セット 2枚

「私のターン」

梓

手札：5 6

「このスタンバイフェイズ、デッキより二体目の『ネクロソルジャー』を特殊召喚……」

『ネクロソルジャー』

レベル4

守備力0

「畏発動……」

え、いきなりですか？

「『死のデツキ破壊ウイルス』」

なあ!!!

「そのカードは!!!」

「私のフィールド上の攻撃力1000以下の闇属性モンスター1体をリリースし、発動。あなたのフィールド、手札、数えて三ターンの間にドローされたカードを全て確認し、攻撃力1500以上のモンスターは破壊される……」

説明を終えると同時に、「ネクロソルジャー」の一体が光となる。く、序盤で何と恐ろしいカードを……

そう思いつつ、手札を見せませぬ。

『真六武衆 - カゲキ』

『真六武衆 - エニシ』

『六武衆の結束』

『六武衆推参!』

『六武衆の荒行』

『真六武衆 - キザン』

「攻撃力1500以上の、『真六武衆 - キザン』と『真六武衆 - エニシ』を墓地へ送って下さい」
「……」

梓

手札：6 4

すみません。エニシ、キザン。

それにしても、手札破壊に手札公開。古いカードとは言え、恐ろしい効果だ。

「私は永続魔法『六武衆の結束』を発動。そして、『真六武衆 - カ

「ゲキ」を守備表示」

『真六武衆 - カゲキ』

レベル3

守備力2000

『六武衆の結束』

武士道カウンター：0 1

戦闘破壊した方が得かもしれませんが、カゲキの単体での攻撃力は200。彼の手札にどんなカードが握られているか分からない以上、守備表示にするしかありません。
「一枚セットし、ターンエンド」

梓

LP：4000

手札：1枚

場：モンスター

『真六武衆 - カゲキ』 守備力2000

魔法・罫

永続魔法『六武衆の結束』 武士道カウンター：1

セット 1枚

大谷

LP：4000

手札：3枚

場：モンスター

『ネクロソルジャー』 守備力0

魔法・罫

セット 1枚

手札も全て知られてしまっている。このセットしたカードさえも、
どうするか……

「私のターン……」

大谷

手札：3 4

「魔法カード『成金ゴブリン』。カードを一枚ドロし、相手はライフを1000ポイント回復する」

大谷

手札：3 4

梓

LP：4000 5000

ライフ回復。単純に考えれば嬉しい効果。しかし……

「装備魔法『死霊の残像』を『ネクロソルジャー』に装備。一ター
ンに一度、装備モンスターと同じ能力を持つ『ドゥプリートークン』
を特殊召喚できる……」

『ドゥプリートークン（ネクロソルジャー）』

レベル4

守備力0

「私は装備魔法『進化する人類』を『ドゥプリートークン』に装備。
自分のライフがあなたのライフより少ない場合、元々の攻撃力を2

400にする……」

『ドブプラートークン（ネクロソルジャー）』

攻撃力0 2400

やはりそういうことですか。そして、その伏せカードはおそらく

……

「畏発動『魔のデッキ破壊ウイルス』」

やれやれ……

「攻撃力2000以上の闇属性モンスターをリリースし……」

「攻撃力1500以下の全てのモンスターを破壊する」

「その通り。そしてこれも、今から数えて三ターンです……」

「手札は先程公開したので、今回は公開しませんよ」

「ええ。ただし、カゲキは破壊して頂きます」

先程のエニシとキザンと同じように、カゲキもまた墓地へ。

「魔法カード『アームズホール』を発動。デッキの一番上のカードを墓地へ送り、墓地に眠る装備魔法カードを手札に加える。『進化する人類』を手札に加えます……」

大谷

手札：1 2

「ふふふ……たった今墓地へ送られた『ソードオブソウル』の効果が発動。このカードが墓地へ送られた時、フィールド上のモンスター一体の装備カードとなり、攻撃力を1000ポイントアップさせます」

『ネクロソルジャー』

攻撃力0 + 1000

「『アームズホール』発動したターン、私はモンスターを通常召喚
できませんが、私はこのターン通常召喚を行っていない。『進化す
る人類』を、『ネクロソルジャー』に再び装備」

『ネクロソルジャー』

攻撃力0 2400+1000

「カードを伏せ、ターンエンド……」

大谷

LP:4000

手札:0枚

場:モンスター

『ネクロソルジャー』 守備力0

魔法・罫

装備魔法『進化する人類』

装備魔法『死霊の残像』

効果モンスター『ソードオブソウル』

セット 1枚

梓

LP:5000

手札:1枚

場:モンスター

無し

魔法・罫

永続魔法『六武衆の結束』 武士道カウンター:1

セット 1枚

『ソードオブソウル』が墓地へ送られたことは偶然だとしても、このタイミングで攻撃するわけでもなく、『ネクロソルジャー』をあそこまで強化する理由は一つ。

「私のターン」

梓

手札：1 2

「二枚のウイルス効果により、手札を見せていただく……」

「……」

『真六武衆 - ミズホ』

「モンスターカード。それは墓地へ送っていただく……」

「……」

梓

手札：2 1

「すみません、ミズホ……」

「そして、罨カード『闇のデッキ破壊ウイルス』。フィールド上の攻撃力2500以上の闇属性モンスターをリリースし、魔法か罨を宣言する。そして、宣言されたカードは破壊される。私は罨を宣言。その伏せカード、『六武衆推参!』は破壊されます……」

「……」

「私とて、素人なりにウイルスの弱点くらいは把握している。ウイルスの効果で破壊できるのは、発動時点で手札とフィールドにあったカード、そして新たにドロウされたカードのみ。そのため墓地からの特殊召喚なら破壊されることは無い。そこで狙っていたのでし

よう。『六武衆推参!』の発動を……」

「……」

「何より、六武衆を墓地から呼び出せるカードはそのほとんどが罠カード。そして、モンスターを呼び出せないあなたの数少ない防衛手段でもある。だから、罠を破壊させていただく……」

「……確かにそういう考え方もある。しかし、あなたは明らかに、選択を間違えた」

「む……?」

「破壊される前に発動『六武衆推参!』」

「な、何ですと……!」

「その反応、やはり勘違いしていましたか。カードが破壊されると言っても、発動自体ができなくなるわけではない。それに、フィールドに無ければ効果の発揮されない永続魔法や罠、永続効果である場合を除けば、たとえカードが破壊され墓地へ送られても、発動や効果を無効にされない限り、効果は場に残る」

「そんな……」

（私も始めの一ヶ月間、同じような失敗を繰り返した物だ。『大嵐』に対し、意味も無く『サイクロン』をチェーンしていた頃が懐かしい……）

「この効果で、私は墓地の『真六武衆・キザン』を特殊召喚」

『真六武衆・キザン』

レベル4

攻撃力1800

『六武衆の結束』

武士道カウンター：1 2

「あなたは二つのミスを犯しました。一つはせっかく場に残っていた『ネクロソルジャー』の効果を、私のスタンバイフェイズ時に使

う前に、ドローフェイズ時点でリリースしてしまったこと。私のスタンバイフェイズ終了を待てば、デッキから三枚目の『ネクロソルジャー』を呼び出し、防御の布陣を敷くこともできました」

「くう……」

「そして二つ目が、『闇のデッキ破壊ウイルス』での選択。確かに主に防衛手段ですが、速攻性や、そもそもほとんどの場合に枚数で劣る罠カードではなく、逆転の一手やキーカードも多い魔法カードを指定しなかったこと。ここで、『六武衆の結束』の効果を発動。このカードを墓地へ送り、このカードに乗った武士道カウンターの数だけカードをドロー」

梓

手札：1 3

「!」

これは……!

「ウイルス効果です。ドローしたカードを見せていただく……」

『真六武衆・シナイ』

『時の飛躍・ターン・ジャンプ』

「『真六武衆・シナイ』は墓地へ送られます」

梓

手札：3 2

「たとえ私の選択がミスだとしても、ウイルスの効果は三ターンずつ続く。その間、あなたが満足にプレイできなくなることに変わりはない……」

「それが、可能だと言っただら？」

「え……？」

「魔法カード『時の飛躍・ターン・ジャンプ』。発動後、このターンは三ターン後のバトルフェイズとなる」

「なに！？ ということは……」

「『死のデッキ破壊ウイルス』、『魔のデッキ破壊ウイルス』、『闇のデッキ破壊ウイルス』の三枚共に、三ターンの経過により効果は失われます」

「くう……」

（名前も分からない、出会ったことさえ一度も無い、あなたの持っていたカードに救われました。もしどこかで生きているのなら、私がこのカードを返しにいくまで待つていて下さい。もし今、既に天の上にいるのなら、どうか、安らかにお眠りください……）

「バトル！」

「う……」

「『真六武衆・キザン』の攻撃！ 漆凱しつがいの剣勢！」

「ぬう……！」

大谷

LP：4000 2200

「ターンエンド。そしてこのエンドフェイズ、本来ならば『六武衆推参！』の効果で特殊召喚された『真六武衆・キザン』は墓地へ送られますが、時の飛躍によるターン経過によりそれも無くなります」

梓

LP：5000

手札：1枚

場：モンスター

『真六武衆・キザン』 攻撃力1800
魔法・畏
無し

大谷

LP：2200

手札：0枚

場：モンスター

無し

魔法・畏

無し

逆転とはこのことですね。

「さすがにお強い……」
ん？

「素人の私でさえ分かる。あなたの、決闘者としての力というものを……」

「大谷さん？」

「……私のターン、ドロー」

大谷

手札：0 1

「魔法カード『悪夢の鉄檻』を発動します。今から二ターンの間、互いに攻撃できない……」

な、今度は二ターンですか！？

そう思いながらも、現れた鉄檻に、私とキザンは閉じ込められる。
「ターンエンド……」

大谷

LP:2200

手札:0枚

場:モンスター

無し

魔法・罫

通常魔法『悪夢の鉄檻』:0ターン

梓

LP:5000

手札:1枚

場:モンスター

『真六武衆・キザン』 攻撃力1800

魔法・罫

無し

「私のターン」

梓

手札:1 2

モンスターは来ません、か……

それにしても、どうしてでしょう。状態は真逆だというのは、あまりにも似ている。今の太谷さんの姿が、彼女に……

「カードをセット。ターンエンド」

梓

LP：5000

手札：1枚

場：モンスター

無し

魔法・罨

セット 1枚

大谷

LP：2200

手札：0枚

場：モンスター

無し

魔法・罨

通常魔法『悪夢の鉄檻』：1ターン

「私のターン……」

大谷

手札：0 1

「伏せます。ターンエンド……」

大谷

LP：2200

手札：0枚

場：モンスター

無し

魔法・罨

通常魔法『悪夢の鉄檻』：1ターン
セット 1枚

梓

LP：5000

手札：1枚

場：モンスター

『真六武衆 - キザン』 攻撃力1800

魔法・罫

セット 1枚

「しんがく」
膠着状態です……

「私のターン」

梓

手札：1 2

「……………」

（…………一人になるのも久しぶりだ。今までは、必ず誰かは隣にいたのに…………）

（すみません。私那不甲斐ないばかりに…………）

既に彼以外、四人が墓地へ送られている。

（うむ…………そうか…………）

（どうかしました？）

（…………シエンはいつもこうだったのか。最後に残るのは、大抵あいっだった…………）

（…………）

「一枚セット、ターンエンド」

「この瞬間、『悪夢の鉄檻』は破壊される……」

梓

LP：5000

手札：1枚

場：モンスター

『真六武衆 - キザン』 攻撃力1800

魔法・罫

セット 2枚

大谷

LP：2200

手札：0枚

場：モンスター

無し

魔法・罫

セット 1枚

そつだ。決闘するのは私でも、私が戦うわけではない。いつも戦っているのは、彼らだ……

「私のターン……」

大谷

手札：0 1

「……二枚目の『成金ゴブリン』を発動。カードを一枚ドロし、相手のライフを1000ポイント回復させる……」

大谷

手札：0 1

梓

LP：5000 6000

「畏発動『活路への希望』。相手とのライフの差が1000ポイント以上の時、ライフを1000ポイント支払い、効果を発動」

大谷

LP：2200 1200

「ライフの差1000ポイントごとに一枚、カードをドローします……」

くう、「成金ゴブリン」はこのためでもあったのか。まずい。私のライフは『成金ゴブリン』の効果で6000ポイント。つまり、「四枚のカードをドロー……」

大谷

手札：1 5

「このカードは、相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、特殊召喚できる。『D^{ダークチ}スパイダー・コクーン』を、特殊召喚……」

『DT スパイダー・コクーン』ダークチューナー

レベル5

攻撃力0

「くっ、大谷さん、やはりあなたは……」

「そして、『闇・道化師のペーテン』を召喚……」

『闇・道化師のペーテン』

レベル3

攻撃力500

「そして装備魔法、『降格処分』をペーテンに装備。これにより、ペーテンのレベルは二つ下がります……」

『闇・道化師のペーテン』

レベル3 - 2

「レベル1となった『闇・道化師のペーテン』に、レベル5の『D T スパイダー・コクーン』をダークチューニング……」

あの時と同じだ。レベルの光が、闇に。

大谷さんも彼女と……双葉さんと同じように……

なぜ……なぜあなたまでが……

くっ、

「大谷さん……」

「闇と闇重なりし時、冥府の扉が開かれる。光り無き世界へ……」

「ダークシンクロ。現れよ。『漆黒のズムウォルト』」

『漆黒のズムウォルト』

レベル - 4

攻撃力2000

「これは……」

やはり、双葉さんの時と同じだ。彼がダークシンクロモンスターを召喚した瞬間、それを感じた。

『漆黒のズムウォルト』の体からは、『氷結のフィッツジェラルド』の時と同じように、紫のオーラが視覚的に見える。少し違うのが、双葉さんの場合、そのオーラの色は赤色の強い紫色だった。しかし今見えている紫色は、あの時と真逆、青色の強い紫色。

「そうですか。これが……」

双葉さんと同じ、いや、対照的に、あなたが私に抱くこととなった感情。

「大谷さん、あなたは……」

第十四話 見えざる闇と希望（後書き）

お疲れ。盛り上がりには欠けるのは自覚しているぞ。ごめんなさい。とりあえずオリカ。

『ネクロソルジャー』

レベル4

闇属性 悪魔族

攻撃力0 守備力0

相手のスタンバイフェイズ時にこのカードがフィールド上に存在する場合、自分のデッキまたは手札から「ネクロソルジャー」を一体フィールド上に特殊召喚することができる。

遊戯王DMにおいて、バクラが使用。

単純に壁としても使えるし、うまくいけば高レベルのシンクロにも使えるわな。

今回はウィルスの媒介という形での登場ですが、中々に強力な効果だと思われ。

『死霊の残像』

装備魔法

1ターンに一度、装備モンスターと同じ種族・属性・レベル・攻撃力・守備力・効果を持つ「ドゥプラートークン」1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

このカードまたは装備モンスターがフィールドを離れた時、この効果で特殊召喚された「ドゥプラートークン」を破壊する。

遊戯王DMにおいて、バクラが使用。

トークンとはいえ、同じ能力のモンスターをもう一体増やせるのはかなり強いな。

まあ中には召喚時にしか効果が発揮されないカードもあるものの、ダムドとか、開闢とか、ナチュビとか、シエンとか……
考えただけで恐ろしいわ。

『ソードオブソウル』

レベル4

闇属性 戦士族

攻撃力1000 守備力1900

このカードが墓地へ送られた時、フィールド上に存在するモンスター1体を選択しこのカードを装備する。

装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。

遊戯王DMにおいて海馬が使用。

どんな形であれ墓地へ送られれば攻撃力1000アップだから、そう考えれば強いんじゃないかと思われ。属性も闇だからサポートしやすいし。

ライトロードとは特に相性が良いのではと思われず。

『時の飛躍 - ターン・ジャンプ - 』

速攻魔法

発動後、3ターン経過した後のバトルフェイズとなる。

また、経過したターンのフェイズは全て適用されたものとして扱う。

遊戯王DMにおいて、遊戯(表)が使用。

効果が複雑だからこういうテキストにしたけど、意味は通じますか？
ちなみにビルから落ちた女性が持っていたというのはこの小説だけ

の設定ですので誤解しないように。
もつとも、持っていない不思議ではないと思いますが。
後にその女性が使うカード群、このカードと相性バツチりだしね。

『DT スパイダー・コクーン』

ダークチューナー

レベル5

闇属性 昆虫族

攻撃力0 守備力0

このカードをシンクロ素材とする場合、ダークシンクロモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。

遊戯王5D'sにおいて、ルドガーが使用。

『サイバー・ドラゴン』効果のダークチューナー。おそらくはデス・サブマリンの次に使いやすいダークチューナーかと。

ネックとしては、ダークチューナーとしてはレベルが低めなことくらいかな。

ほんで、原作効果は、

『活路への希望』

通常罾

遊戯王5D'sにおいて遊星が使用。

まあ説明は不要かもしれないけど、OCG版ではドローがライフ2000ポイント差について一枚となっております。原作のままじゃ

明らかかな壊れだな。

まあ原作では初期ライフ4000だから、仕方ないっちゃ仕方ないが。

多分これで全部。次回もたくさん出ますゆえ、書き忘れが出るかも分からん。その時は教えてね。

じゃあ次話まで待ってて。

第十五話 悲しみの果て（前書き）

こんにちHa。

決闘決着回です。

書くこと無いからサクサク行こう。
行ってらっしゃい。

第十五話 悲しみの果て

視点：梓

「悲しみ……それが、あなたの私への、憎悪……」
「……………」

決闘を始める前、大谷さんのことを、別人だと思った。様子も顔色もおかしく、明らかにいつもの大谷さんではない。そう感じた。だから、得体の知れないもののせいで、大谷さんもどうにかなってしまうた。そう思った。

しかし実際には、そう思いたかった。顔色や様子など、本人に思う所があれば違って見えるのは必然。いくら長い時間を共に過ごしていたからと、彼のことを何でも理解しているつもりでいることがおこがましいことだった。

そう。大谷さんは操られてなどいない。双葉さんの時と同じように、自分の意思でカードを取り、私の前に立ちはだかっている。ダークシンクロモンスター、『漆黒のズムウォルト』と共に……

「『闇・道化師のペーテン』が墓地に送られた時、自身をゲームから除外することで、デッキより同名カードを特殊召喚できる……」

『闇・道化師のペーテン』

レベル3

守備力1200

「……………バトルです。『漆黒のズムウォルト』で、『真六武衆・キザン』を攻撃。ダーク・ドラッグ・ダウン」

「……」

梓

LP:6000 5800

覚悟してはいましたが、やはりかなりの衝撃。
「更に、カードを二枚伏せ、ターンエンド」

大谷

LP:1200

手札:0枚

場:モンスター

『漆黒のズムウォルト』 攻撃力2000

『闇・道化師のペーテン』 守備力1200

魔法・罫

セット 2枚

梓

LP:5800

手札:1枚

場:モンスター

無し

魔法・罫

セット 2枚

く、また逆転されました。

「……できることなら……」

え？

「……できることなら、攻撃などしたくなかった……」

「大谷さん？」

「三枚のウィルスカードが発動された時点で、戦意を喪失してくれる。そう信じていた……なのに……あなたは諦めるどころか……三枚のカードを交わしてみせ、逆転まで……」

梓

手札：1 2

彼が私の何に悲観しているのかは分からない。しかし、それでも私のことを思ってくれている。その事実があるなら、

「チューナーモンスター、『六武衆の影武者』を召喚！」

『六武衆の影武者』チューナー

レベル2

守備力1800

「そして速攻魔法『六武衆の荒行』を発動！ フィールド上に存在する『六武衆』と名の付くモンスター一体の攻撃力と、同じ攻撃力を持つモンスターをデッキより特殊召喚します！ 影武者の攻撃力は400、攻撃力400の『六武衆のご隠居』を特殊召喚！」

『六武衆のご隠居』

レベル3

守備力0

「この効果で特殊召喚されたモンスターは、エンドフェイズに墓地へ送られますが、その前に使用します」

「来ますか……」

「レベル3の『六武衆のご隠居』に、レベル2の『六武衆の影武者』

をチューニング！」

私の力を、あなたに捧げます！

「激流轟く海原かいげんの地より、清誕されしは神なる潮流……」

「む、これは……」

「シンクロ召喚！ 母なる海之力、『神海竜ギシルノドン』！」

『神海竜ギシルノドン』

レベル5

攻撃力2300

「バカな、このモンスターは一体……」

「私の新たな友の力をお見せしましょう。バトルフェイズ！ 『神

海竜ギシルノドン』で、『漆黒のズムウォルト』を攻撃！ 海利流かいりりゅう

衝波しゅうは……」

ギシルノドンの体から生まれた巨大な津波が、ズムウォルトを飲み込まんと向かっていく。

「……家元、あなたは私を舐め過ぎた……」

「……」

「畏発動『地縛霊の誘い』……」

「え？」

「相手モンスターがこちらのモンスターを攻撃してきた時、その攻撃対象を私が選択する。選択は『闇・道化師のペーテン』……」

『漆黒のズムウォルト』の代わりに、津波に飲まれるペーテン。

そんな回りくどいことをしてまで、『漆黒のズムウォルト』を……
違う！ 大谷さんが狙っているのは……！

「畏発動『完全破壊 - ジェノサイド・ウイルス』」

「くう……」

「闇属性、攻撃力500以下のモンスターが戦闘破壊された時発動。相手のデッキから、ランダムに十枚のカードを墓地へ送ります……」

十枚……

梓

デッキ：27 17

一気に残りの半分を失ってしまった。

「同時に墓地へ送られたペーテンを除外し、デッキより最後の『闇・道化師のペーテン』を特殊召喚」

『闇・道化師のペーテン』

レベル3

守備力1200

しかし、タダでは終わらない！

「この瞬間、『神海竜ギシルノドン』のモンスター効果を発動。フィールド上のレベル3以下のモンスターが墓地へ送られた時、エンドフェイズまで攻撃力が3000になる」

『神海流ギシルノドン』

攻撃力2300 3000

「畏発動『奇跡の軌跡』ミラクルルーカス。大谷さん、カードを一枚ドローして下さい」

大谷

手札：0 1

「そしてこのターン、自分のモンスター1体を選択し、攻撃力を1000ポイントアップさせ、このターン二度の攻撃を可能とする」

『神海竜ギシルノドン』

攻撃力2300 3000+1000

「攻撃力4000……!!」

「ただし、そのモンスターの戦闘による相手への戦闘ダメージは0となる」

「なるほど……」

「再び『神海竜ギシルノドン』で、『漆黒のズムウォルト』を攻撃！ 海利流衝波!!」

再び起こる津波。それが今度はペーテンではなく、『漆黒のズムウォルト』を飲み込んだ！

「……」

しかし、意外と言うか、予想通りと言うべきか……

「『漆黒のズムウォルト』は戦闘では破壊されません」

何かあるとは思っていましたが、早速その一つ。完全に『奇跡の軌跡』は無駄撃ちとなってしまった。もう少し慎重になるべきでしたね。

「ターンエンド」

当面の問題としては、『完全破壊・ジェノサイド・ウィルス』をどうにかしなければ。

梓

デッキ：17枚

LP：5800

手札：0枚

場：モンスター

『神海竜ギシルノドン』 攻撃力2300

魔法・罫

セット 1枚

大谷

LP：1200

手札：1枚

場：モンスター

『漆黒のズムウォルト』 攻撃力2000

『闇・道化師のペーテン』 守備力1200

魔法・罫

永続罫『完全破壊 - ジェノサイド・ウイルス』

彼のライフポイントを見るに、ペーテンでの自爆は不可能。これ以上のデッキ破壊は不可能、のはずですが……

「私のターン……」

大谷

手札：1 2

「私は装備魔法『愚鈍の斧』を、あなたのギシルノドンに装備」
「ギシルノドンに？」

『神海竜ギシルノドン』

攻撃力2300+1000

「『愚鈍の斧』を装備したモンスターは攻撃力が1000ポイントアップし、効果は無効化される。そして、私のスタンバイフェイズごとに、そのモンスターの持ち主は500ポイントのダメージを受ける……」

これは一体……

効果が無効にしても、ギシルノドンの効果は攻撃力を3000にすること。しかし、装備カードのせいで、それ以上の攻撃力になっ

てしまっている。

「バトルです。『漆黒のズムウォルト』で、『神海竜ギシルノドン』に攻撃……」

「バカな！ ギシルノドンの方が攻撃力は上のはず!？」

「ダーク・ドラッグ・ダウン!」

ズムウォルトの闇とギシルノドンの津波がぶつかり、破壊されたのは、

「そんな……なぜ、ギシルノドンが……」

しかし、ズムウォルトを見た時、その答えが分かりました。

『漆黒のズムウォルト』

攻撃力2000 3300

「攻撃力がギシルノドンと並んでいる……?」

「『漆黒のズムウォルト』が攻撃する時、攻撃対象のモンスターの攻撃力がこのモンスターよりも上の場合、攻撃力を同じにすることができます。そして、このカードの元々の攻撃力との差100ポイントにつき、相手はデッキから一枚、カードを墓地へ送ります……」

「何ですって!？」

ギシルノドンの攻撃力は、『愚鈍の斧』によって3300にまで上がっている。ズムウォルトの攻撃力2000との差、1300ポイント。つまり、

梓

デッキ：17 4

十枚、どころか五枚を切った!

「私はカードを伏せます。ターンエンド……」

大谷

LP：1200

手札：0枚

場：モンスター

『漆黒のズムウォルト』 攻撃力2000

『闇・道化師のペーテン』 守備力1200

魔法・罫

永続罫『完全破壊 - ジエノサイド・ウイルス』

セット 1枚

梓

デッキ：4枚

LP：5800

手札：0枚

場：モンスター

無し

魔法・罫

セット 1枚

「くう……私のターン」

梓

デッキ：4 3

手札：0 1

非常にまずい……

セットしているカード、そして手札のこの一枚だけでの逆転は不可能。しかし、モンスターのほぼ全てが墓地に眠っているこの状態。どうする……

「ここで、罨発動……」

「今度は何を……？」

「『強欲な贈り物』。家元、あなたは二枚のカードをドロウします」
「な！」

「く、そんなカードまで。一見相手に得をさせるだけのカードですが、デッキ破壊と合わされば実に恐ろしいカードへ化ける。」

梓

デッキ：3 1

手札：1 3

「……」

「くくく、デッキと手札の枚数が逆転しました。既にあなたには、二ターンしか残されていない。そして私の場には、『漆黒のズムウオルト』と『闇・道化師のペーテン』が二体。たとえ静花と言えども、この状態からの逆転は不可能でしょうな……」

「静花……」

「懐かしい名だ……」

「その名前を、私に与えてくれたのは、あなたでしたね」

「……」

「なら、その静花の名に賭け、逆転してみせましょう」

「バカな。その状態で、何ができると……」

「あなたからの贈り物が、私に可能性を示してくれました。魔法カード発動『貪欲な壺』」

「なっ！ そのカードは……！！」

「墓地のモンスターカードを五枚デッキに戻し、切ります」

『紫炎の寄子』

『六武衆の影武者』

『真六武衆・カゲキ』

『真六武衆・エニシ』
『真六武衆・キザン』

梓

デッキ：1 6

「その後、カードを二枚ドロ―」

梓

デッキ：6 4

手札：2 4

「大谷さん」

「……？」

「見ていて下さい」

サテライトで得た、私の新しい仲間達。

「このカードは、相手フィールド上のみモンスターが存在する時、手札から特殊召喚できます。チューナーモンスター『アンノウン・シンクロン』を特殊召喚！」

『アンノウン・シンクロン』チューナー

レベル1

守備力0

「そして、墓地に眠る水属性モンスター二体を除外することで、このカードは特殊召喚できます。墓地の水属性、『真六武衆・シナイ』、『神海竜ギシルノドン』を除外。現れよ冷狼、『フェンリル』を特殊召喚！」

『フェンリル』

レベル4

攻撃力1400

「これは……」

「レベル4『フェンリル』に、レベル1『アンノウン・シンクロン』をチューニング！」

かつては闇だったレベルの星。しかし今は、本来の光を取り戻し、輝いています。

「暗士と凍土交わりし時、永久凍土の時代が始まる。熱無き世界へ」
「シンクロ召喚！ 冷たき魔人、『氷結のフィッツジェラルド』！」

『氷結のフィッツジェラルド』

レベル5

攻撃力2500

「これは、まさか……」

「そう。『漆黒のズムウォルト』と同じ、ダークシンクロモンスターだったカード。今ではシンクロモンスターとして、私の友であるモンスターです」

「ぬう……しかし、『漆黒のズムウォルト』は戦闘では破壊されない。守備表示である『闇・道化師のペーテン』を破壊してもダメージを与えられないどころか、『完全破壊 - ジェノサイド・ウィルス』の効果が発動される。何をしようと、あなたに勝ち目は無い！」

「そう思いますか？」
「む？」

「ふふ……『氷結のフィッツジェラルド』で、『闇・道化師のペーテン』を攻撃！ ブリザード・ストライク！」

「血迷いましたか、家元！？」

彼の叫びと同時に、ペーテンは破壊されました。

「くう……『完全破壊 - ジェノサイド・ウィルス』の効果！ デッ

キからカードを墓地へ……なに？ 効果が発動されない！？」

「『氷結のフィッツジェラルド』が攻撃する時、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罫の発動はできません。『完全破壊・ジエノサイド・ウィルス』の効果が発動されるのはモンスター破壊時のダメージステップ。その間、フィッツジェラルドの効果で発動は封じられます」

「バカな……」

「カードをセット、ターンエンド」

梓

デッキ：4枚

LP：5800

手札：1枚

場：モンスター

『氷結のフィッツジェラルド』 攻撃力2500

魔法・罫

セット 2枚

大谷

LP：1200

手札：0枚

場：モンスター

『漆黒のズムウォルト』 攻撃力2000

魔法・罫

永続罫 『完全破壊・ジエノサイド・ウィルス』

「ぬう……しかし、私の有利に変わりはない！ ドロー！」

大谷
手札：0 1

「バトル！ 『漆黒のズムウォルト』で、『氷結のフィッツジェラルド』を攻撃！ ダーク・ドラッグ・ダウン！」

「……私の勝ちだ」

「え？」

「速攻魔法発動『禁じられた聖杯』。モンスター一体の攻撃力を400ポイントアップさせ、効果を無効にします」

「な、バカな、ということは……」

『漆黒のズムウォルト』

攻撃力2000+400

「迎え撃て！ 『氷結のフィッツジェラルド』、ブリザード・ストライク！」

「ぐうぐうぐう……」

大谷

LP：1200 1100

「ぬう……」

「ダークシンクロモンスター、『漆黒のズムウォルト』は破壊しました。既に手は残されていないはずですよ。まだ決闘を続けますか？」

「……」

「答えない。彼の手札は一枚。あのカードが、何かあるのでしょうか……」

「……」

「いや、違う、何かあると言うよりも、何かに迷っているように感じる。発動すれば勝てる。しかし、同時に何かが……」

まさか！

「……魔法カード発動」

「いけない、大谷さん！ それはダメだ！！」

「『命削りの宝札』」

やはり、禁止カードを！？

「手札が五枚になるよう、カードをドロ、五ターン後、手札を全て墓地へ……」

「そんな……そんなことをしたら……！」

頭の中に、双葉さんの光景が浮かび上がる。決闘するだけなら助かったかもしれないのに、禁止カードを使用したばかりに……

「やめて下さい！！ 大谷さん！！」

「カードを五枚、ドロ……」

大谷

手札：0 5

「魔法カード『死者蘇生』。蘇らせるのは、『漆黒のズムウォルト』……」

『漆黒のズムウォルト』

レベル - 4

攻撃力 2000

「カードを四枚伏せ、ターンエンド……」

大谷

LP：1100

手札：0枚

場：モンスター

『漆黒のズムウォルト』 攻撃力2000

魔法・罫

永続罫『完全破壊 - ジエノサイド・ウィルス』

セット 4枚

梓

デッキ：4枚

LP：5800

手札：1枚

場：モンスター

『氷結のフィッツジェラルド』 攻撃力2500

魔法・罫

セット 1枚

「……………わ……………私の、ターン……………」

梓

デッキ：4 3

手札：1 2

あと一撃、それでこの決闘を終わらせることが、できたはずなのに……………」

いや、そもそも彼が双葉さんと同じ状態だと分かった時点で、禁止カードの使用にも気付けたはずなのに……………」

「大谷さん……………」

もし、この決闘に勝ってしまえば……………」

「……………」
「……………」
「……………」

結局、彼の本音も未だ分からない。けれど、

「……私はもう、大切な人を失いたくない……」

負けた方が消える、闇の決闘。私が消えないためにも、負けられない。そう考えていました。しかし、大谷さんが消えてしまいうらないなら、私は、勝ちたくなどない……

『梓！』

『よせ！ 冗談ではなく、負ければ本当に消えてしまうぞ！』

「……構いません。それで大谷さんが救われるなら……」

『バカを言うな！ こんなところで消えて、お前は満足なのか！？ まだ父親にも再会できていないのに！ 第一、シエンに何と説明すればいい！？』

「……構いません。シエンには、謝っておいて下さい」

『梓！』

それ以上の言葉は聞きたくなかった。あなた方には、悪いと思っています。主として、友としても、恨まれることが当然でしょう。しかし、私は所詮、この程度の男だったということです。自分のために、大切な人を切り捨てる。そんな覚悟も持てない男なのです。

「大谷さん、お父さんに伝えて下さい。最低な息子で、ごめんなさい、と……」

大谷さんにそう伝え、今度こそ、デッキに手を伸ばしました。

「畏発動！」

……！

「『強欲な贈り物』！ 相手はカードを二枚ドローする！」

なっ……！

「なぜ、この期に及んで……？」

梓

デッキ：3 1

手札：2 4

放っておいても、私は降参していたのに、なのに手札を、なぜ……？

「家元、あなたのそんな姿など、私は見たくはない」

突然大谷さんが話し掛けてきました。

「私は悲しかった。サテライトに逃げる時、私に簡単に、あなた以外の人のもとへ行けと言われたことを」

「それは……」

「家元の気持ちは重々承知しております。私が家元のことを思っているのと同じように、家元もまた、私のことを思って下さったのだ」と

「しかし、だとしても、ずっと家元のそばにいた身として、簡単に離れて欲しいと言われた時は、それを感じる以前に、私はあなたにとって、その程度の存在でしかないのか、そう感じました」

「違う……違います！ 大谷さんは、私にとって大切な人だ！！」

「……私とてそれは同じです」

彼のためにはと思い、ずっと胸にしまっていた、私の、本当の気持ち……

「……本当は言いたかった……どこまでも、こんな私に、ついてきて欲しいと……」

「私も同じです。どこまでもついてきて欲しい、そう言って欲しかった。たとえその道中が、家元しか通れないような険しい道であったとしても、どこまでもお供する覚悟はできていた」

「それが、この決闘の理由……」

私に対する、悲しみの心……

「せめて、次に会った時は、決闘する家元の姿を見たかった。そして、証明したかった。あなたが家元として強いように、私も家元の

大谷さん……ありがとう。

「私は、『真六武衆 - カゲキ』を召喚。効果により、手札の『真六武衆 - エニシ』を特殊召喚。そして自身の効果により、『真六武衆 - キザン』を特殊召喚。それぞれ効果で攻撃力アップ！」

『真六武衆 - カゲキ』

レベル3

攻撃力200 + 1500

『真六武衆 - エニシ』

レベル4

攻撃力1700 + 500

『真六武衆 - キザン』

レベル4

攻撃力1800 + 300

「『真六武衆 - エニシ』の効果、墓地の六武衆と名の付くモンスター二体を除外し、相手の場のモンスター一体を、相手の手札に戻します！」

「永続罫、『スキルドレイン』。ライフを1000ポイント支払い、全ての効果モンスターの効果を無効化します」

大谷

LP : 1100 100

「くう……」

『真六武衆 - カゲキ』

攻撃力200

『真六武衆 - エニシ』

攻撃力1700

『真六武衆・キザン』
攻撃力1800

「更にもう一枚、罨カード『悪魔の天秤』」
「な、これは！」

カードの発動と同時に、フィールドに不気味な形をした、巨大な天秤が現れた。片方には大谷さんの『漆黒のズムウォルト』。そしてもう片方に、私の場の四体のモンスターが。

「相手はこちらのフィールド上のモンスターの数に合わせ、モンスターを選択します。選択されなかったモンスターは破壊される罨カードです」

「く、私は……『氷結のフィッツジェラルド』を選択します」
「当然の選択でしょうな」

選択した瞬間、こちら側の天秤の皿が閉じ、それに挟まれる形で、『氷結のフィッツジェラルド』を除いたモンスター達が破壊された。すみません、友たちよ……

「しかし、『スキルドレイン』の効果により、『漆黒のズムウォルト』の戦闘破壊耐性も無くなりました。何より、発動コストによりあなたのライフは残り100。フィッツジェラルドの攻撃で、あなたのライフは0となります！」

「確かに。そう思うのなら、攻撃してご覧なさい」
「……」

彼のフィールドには、伏せカードが一枚。バトルする時に魔法・罨の発動を封じる効果も、『スキルドレイン』によって無効化されている。

しかし、
「他に手は無い。バトル！ 『氷結のフィッツジェラルド』、『漆黒のズムウォルト』を攻撃！ ブリザード・ストライク！」
届け、フィッツジェラルドの吹雪よ！

「速攻魔法『収縮』発動！」

「っ!」

「フィールド上のモンスター一体の攻撃力を半分にする。対象は当然、『氷結のフィッツジェラルド』!」

『氷結のフィッツジェラルド』

攻撃力2500/2

フィッツジェラルドの氷を受けながら、『漆黒のズムウォルト』は闇を撃ち返す。

「『氷結のフィッツジェラルド』、破壊」

梓

LP:5800 5050

「どうやら、これで私の勝ちが決まったようですね。その手札の一枚と、デッキに残った一枚。二枚とも、先程『貪欲な壺』の効果でデッキに戻したカード。その五枚のうち三枚が今召喚され、残ったのは『六武衆の影武者』と、『紫炎の寄子』の二枚。既にあなたには私は愚か、『漆黒のズムウォルト』を倒せるカードさえ残っていない」

「……」

「……確かに、もう私の手札にもデッキにも、『漆黒のズムウォルト』を倒せるカードは無い。」

「そう。手札と、デッキには……」

「……『氷結のフィッツジェラルド』、効果発動」

「なに?」

「戦闘破壊された時、フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札を一枚捨てることで、守備表示で特殊召喚できる」

「な!?!」

梓

手札：10

『氷結のフィッツジェラルド』

レベル5

守備力2500

「バカな、『スキルドレイン』によって、効果は無効に……」

「『スキルドレイン』によって無効になるのは、フィールド上で発動する効果のみ。それ以外、手札、墓地で発動する効果までは、無効にはできません」

「ぐう……」

「更に、これはバトルフェイズ中の特殊召喚。よって、もう一度攻撃が可能となる」

「バカな！ フィッツジェラルドは守備表示です。新たな攻撃など……その伏せカード！」

そう。セツトはしましたが、『完全破壊 - ジェノサイド・ウィルス』の存在により、使用することは無いと考えていたカード。そして、サテライトで出会った最後の一枚。

それが今、私に力をくれた！

「永続罫『最終突撃命令』を発動！ フィールド上のモンスターは全て攻撃表示となる！」

「ということ……」

『氷結のフィッツジェラルド』

攻撃力2500

これが、私の新たな力。サテライトで出会った、新たな友たちの力です！

「バトル！」

「!？」

「黄泉へと帰りなさい、心の闇よ！ ブリザード・ストライク!!」
「ああああああああ!!」

大谷

LP:1000

.....

.....

.....

「大谷さん.....」

「.....家元」

決闘が終わり、青い炎が消えた直後、倒れた大谷さんを抱え上げ、話し掛ける。決闘に夢中になっていましたが、ようやくこの重大さを思い出した。双葉さんの時と同じだ。もう助からないということが、分かる.....

「申しわけない.....こんな手段でしか.....家元と、語り合うこともできず.....」

「悪いのは私です。私が、大会で正体を明かすようなマネをしなければ、こんなことには.....」

私のせいだ。全部、私の.....

「家元.....そう、悲しまないで下さい.....」

泣いている私に向かって、大谷さんが向けてくれたのは、笑顔だった。その笑顔を直視できず、反射的に、目を背けてしまった。

「家元.....覚えておいて下さい.....人とは、結果を選ぶことはできません.....どんな行動を取り、それがどんな結果になるかも.....それに後悔することは誰でもできます.....ほとんどの人間は.....そんな結果を恐れ.....やろうとしないうちに逃げてしまう.....かく言う私にも、経験があります.....」

「しかし……あなたは違った……どんな結果になろうとも……今できる精一杯を、全力で生きてきました……拾われてからの日々……お仕事回り……フォーチュンカップでも……この、決闘もそうです……そんな全力の生き方ができることは……誇って、良いことです……」

「私はただ、失うものが無かったです。父の期待に応えただけです。周囲の人達の、期待に応えただけです……多くの人達に……喜んで欲しかっただけです……」

「……それでそ、家元だ……自分以外の誰かのために、失敗を恐れず、全力で生きる……家元だからできることです……」

「私は……」
「家元……」

喋る途中で、今までとは違う声色で話し掛けられ、反射的に顔を見ました。

「この街には……危機が迫っている……得体の知れない、しかし、危険な何かが……」

「危機……」

「すぐに、お逃げなさい……先代を連れて、早く……」

「ええ、もちろんです。だから、大谷さんも一緒に……」

けれど、大谷さんは、顔を横に振った。

「家元……あなたの秘書であったこと、私は……誇りに……思います……」

「サア……」

その言葉を最後に、大谷さんは塵へと変わっていった。

「大谷さん……」

「行くな……私のもとから去るなああああああああああああああああ
あああ……」

視点：外

大谷の姿が、梓の手から跡形も無く消えた、その直後。

キイイイ

それは、梓も一度見たことがある光景。

「梓！」

ずっと後ろに立っていた、五人の真六武衆。話し掛けたのはミズホだった。

「見て下さい。『氷結のフィッツジェラルド』の時と同じです」

そう。サテライトでの双葉との決闘。その直後に現れた、『氷結のフィッツジェラルド』。これはまさに、その再現と言える現象だった。

「……」

「梓？」

ミズホの問い掛けに、梓は答えない。ただその場に座り込み、沈黙しているだけ。

そして、

スパア

「……」

五人全員が驚愕し、目を見開いた。

誰よりも純粹に決闘を、カードを、そして自分達モンスターを愛してくれていた。そんな梓が、現れたカードを見向きもしないどころか、一瞥もせぬ間に手刀で真つ二つに切り裂いてしまったのである。

切り裂かれたカードは無残に地面に落ち、先程の大谷と同じように、塵となつて消えた。

「梓！ 何と言うことを！？」

「そんなカード……私がなぜ使うことができる！？」

「……！！」

また五人は目を見開いた。

ずっと背中を向けていた梓がこちらへ向き直り、叫んだ時、初めて分かった。

梓の目から流れている涙は水ではなく、真つ赤に光る、血だった。「どうして……私はただ、決闘を愛しているだけなのに……その決闘は、私から全てを奪っていく……大切なものを全て……やはり私には、決闘など、許されないというのか……」

そこまで話した直後、立ち上がり、体を五人に向けた。

「どうやって生きたらいい……どうしたら良かったんだああ！？」

顔を血に染め、嘆く梓。そんな梓の姿に、五人は言葉を失い、質問に答えることもできない。

今まで誰よりも決闘を、自分達を、カードを愛してくれていた。

どんな時も笑顔を絶やさず、泣くこと、怒ることはあつても、それはいつも、人のためだった。

それが今、明らかに自分のための涙を流している。大切な存在を、自分のせいで失う。自分の選択した人生が、大切な人の喪失と言う最悪な形での報いを与え、それに怒り、悲しみ、様々なものを憎悪してしまっている。

「……」

やはり、五人とも答えることはできなかった。こんな時、いつも答えてくれていた存在も今はいない。五人も同じ真六武衆ながら、その存在ほどの掛けられる言葉を持ち合わせてはいなかった。

そして、真つ先に口を開いたのが、

「……お父さん」

ずっと泣いていた、梓本人だった。

「早く行かなければ。このままでは、お父さんも危ない……」
そう呟き、踵を返した。同時に五人も、一言の言葉も掛けられな
いまま消えていった。

……

……

……

病院へと向かう道中、

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

轟音と地響き。それは、サテライトでのものと同じだった。

「これは……」

反射的に振り返ると、炎による青色の光。それが、女性の降って
きたビルから発生している。

「まずい、急がないと……」

大きな喪失感から、ずっと歩きだった足を、その光景で初めて走
りへと変えた。

病院に着くと、先程までいたマスコミの人間達は既にいなくなっ
ていた。だが変わりに、大勢の医者や患者達が、入口に押し寄せて
いる。

こんな時でも姿を見られるわけにはいかない。瞬時にそう判断し、
先程窓を覗いた時のビルを目指す。

「あそこなら、窓から入れる」

そして、そのビルの上に立ち、先程と同じように窓を見る。もう
逃げたのか、既に父親の姿は無い。

「お父さん……」

第一部
完

第十五話 悲しみの果て（後書き）

お疲れ様〜。

つくわけで一部完結です。

ほんじゃあまらずはオリカ行こう。

『完全破壊 - ジェノサイド・ウイルス』

永続罠

自分フィールド上に存在する攻撃力500以下の闇属性モンスターが戦闘で破壊された時に発動する事ができる。

相手のデッキからランダムに10枚のカードを墓地へ送る。

劇場版遊戯王DMにおいて、海馬が使用。

文句なしに最強のデッキ破壊カードです。

今でこそ墓地肥やしになるって考え方もあるが、単純に考えて四回自爆特攻させたら次の相手のドローフェイズで勝てる。
強すぎだね普通に。

『命削りの宝札』

通常魔法

手札が5枚になるようカードをドローする。

発動後、5回目のスタンバイフェイズに手札を全て捨てる。

遊戯王DMにおいて、海馬が使用。

説明不要なくらい、言わずと知れた超絶ドローカード。

5D'sの世界では禁止カードとしました。でなきゃみんな使ってるって。

『悪魔の天秤』

通常罾

相手は自分フィールド上のモンスターの数と同じになるよう、自分フィールド上のモンスターを選択する。

選択しなかったモンスターを全て破壊する。

遊戯王DMにおいて、パンドラが使用。

ちなみに原作では自分フィールドのモンスターがゼロだったから必然的に相手の場もゼロになった。

だから作中とは違って、使いようによっては単純に第二の『激流葬』にもなる。

これもまあまあ強いかな。

これで全部かな。じゃ次は原作な。

『漆黒のズムウォルト』

ダークシンクロモンスター

レベル - 5

闇属性 悪魔族

攻撃力2000 守備力1500

チューナー以外のモンスター - ダークチューナー

このカードはシンクロ素材となるチューナー以外のレベルからダークチューナーのレベルを引き、その数値が - 5 に等しい場合のみシンクロ召喚することができる。

このカードは戦闘では破壊されない。

このカードの攻撃宣言時、攻撃対象モンスターの攻撃力がこのカードの攻撃力よりも高い場合、攻撃対象モンスターの攻撃力をバトルフェイズ終了時までこのカードと同じ数値にする。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、攻撃対象モンスターの攻撃力がこのカードの元々の攻撃力よりも高い場合、差の数値100ポイントにつき1枚、相手のデッキの上からカードを墓地へ送る。

遊戯王5D'sにおいて、牛尾が使用。

これもまあ相手にもよるが結構なデッキ破壊だわな。

どんなモンスター相手にも基本相討ちにできて、おまけに戦闘では破壊されないのが地味に来るね。

ちなみにOCGじゃ、デッキ破壊は三枚。少ないよ絶対。

というわけで、無事に一部終了。

いや〜ここまで読んでくれた人、感謝します。ありがとうございます。

さて、次は第二部だが、投稿は年明け以降かな。

今まで以上に忙しくなるうえ、二部今だからまで以上に時間頂かなきゃいけないしね。

それでも待っててくれる？ くれるなら、ちょっと待っててね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2644x/>

遊戯王5D's ~ 剣纏う花 ~

2011年12月17日18時51分発行